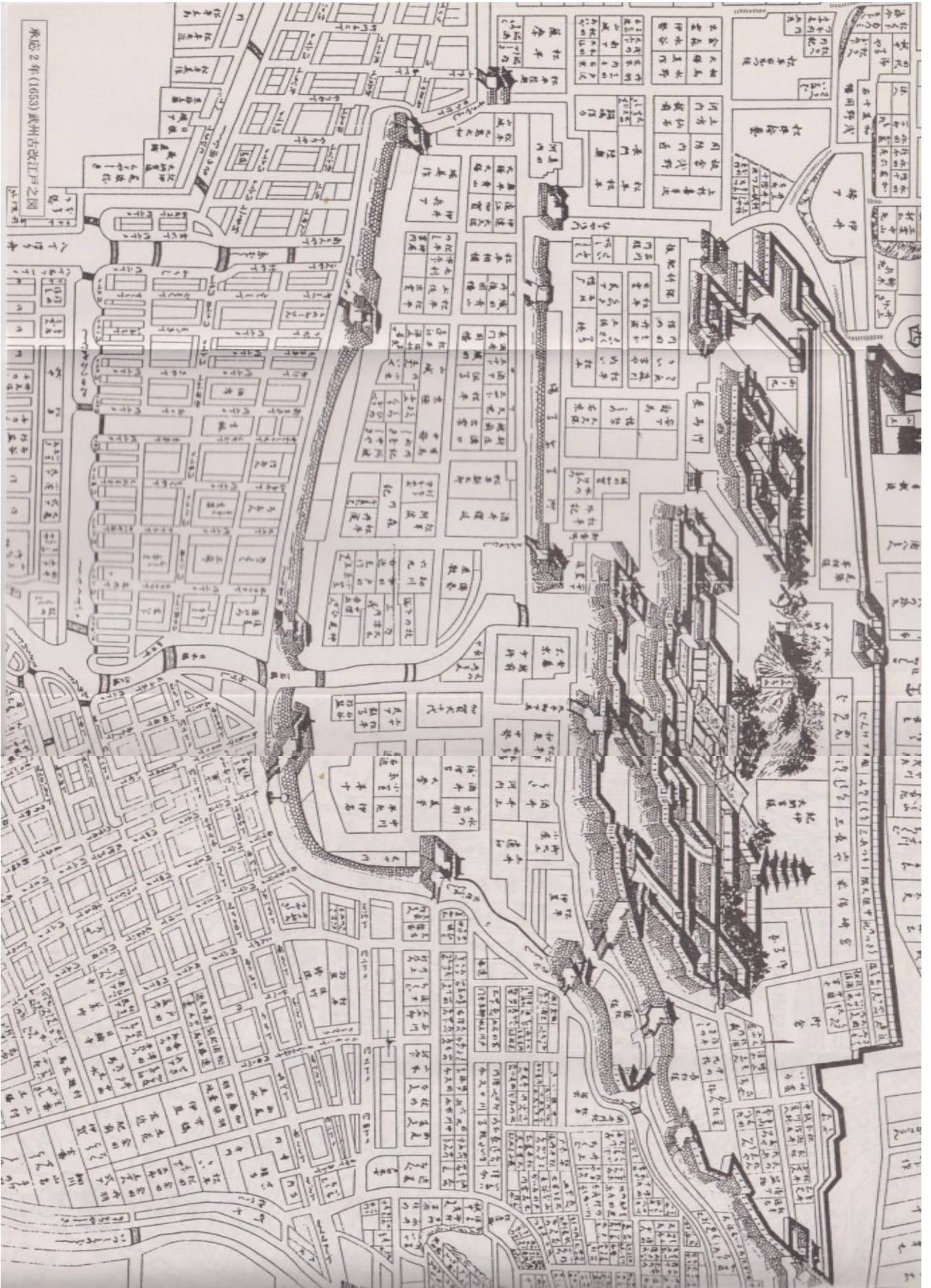


デンカの七十年を  
見つけた街日比谷

デンカ  
70



承应2年(1653)武州古改江戸之图



元禄2年(1689)江戸図鑑

池田

御城

池田

池田

池田

池田

池田

池田

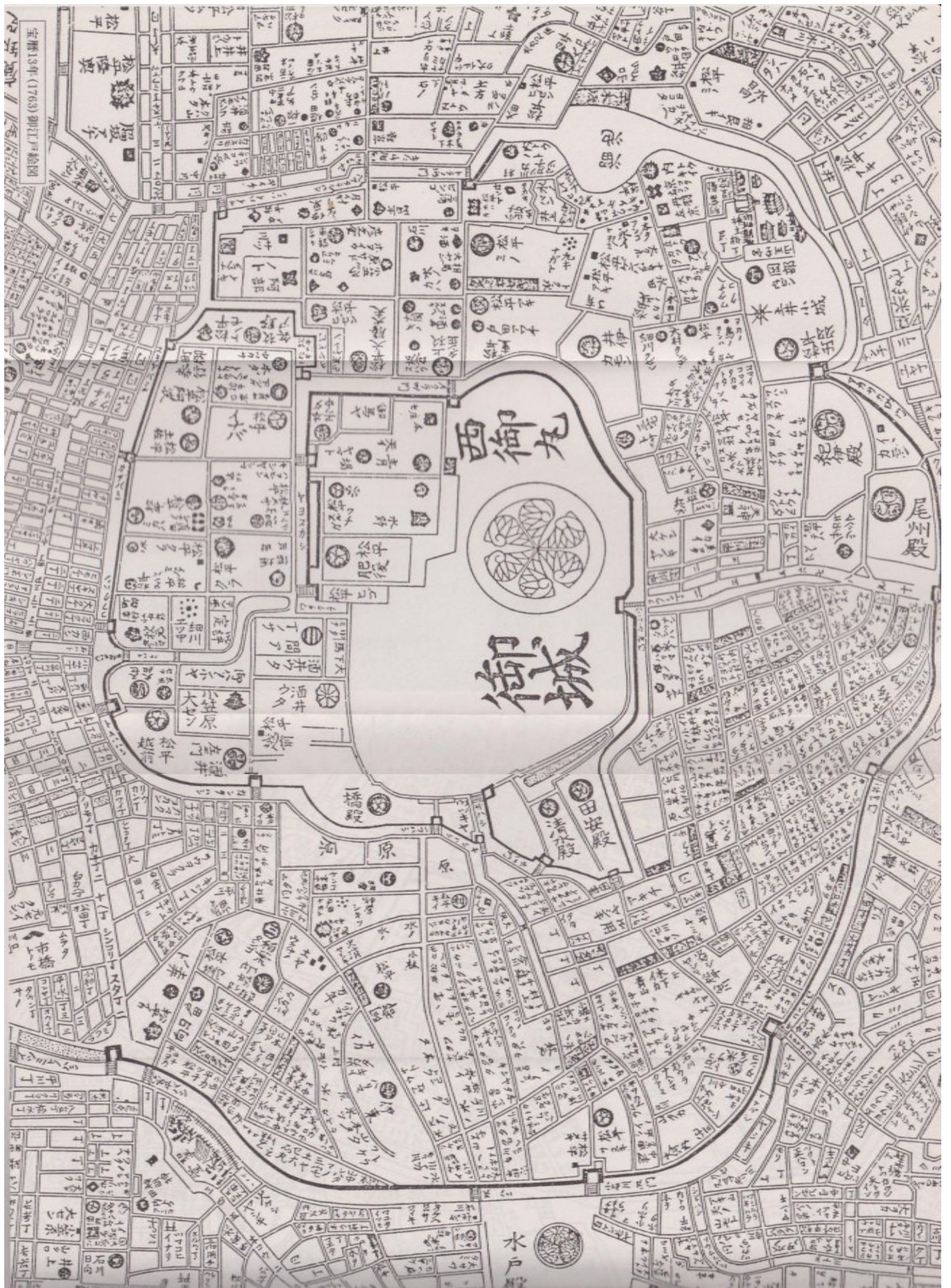
池田

池田

池田

池田

池田



西御丸

御城

尾州殿

米弄小城

紀伊殿

大川

宝曆13年(1763)御江戸城図



## ひあこやし

電気化学工業と日比谷との関わりは、七十一年前の大正四年四月一日にさかのぼります。この日、現在の日比谷三井ビルが建っている敷地の一面にあった三井集会所で行なわれた設立発起人会で、当社の誕生が議決されたのです。当初、当社の本社は日本橋室町に置かれていましたが、その後、関東大震災などにより三か所を転々とし、昭和六年一月、前年に竣工したばかりの日比谷三信ビルに移ってきました。この三信ビルは戦後連合軍に接収されたため、一時他所へ移転しましたが、二十五年再び三信ビルに戻りました。以来、ここに当社は本社を構えております。三十五年には管理部門の一部が新設の日比谷三井ビルに移りました。このように、この日比谷の町は当社の歴史をずっと見つけつけてきました。

昨六十年四月、当社は創立七十周年を迎えました。これを機に当社内報「ぐんばい」編集室では、デンカの生まれ育った町・日比谷の街の歴史を調べて紹介してみようと企画し、昨年一月号から十二回にわたって掲載しました。

図書館や地元の方々の暖かいバックアップをいただいで調査、取材をつづけることができ、お陰さまで昨年十二月に完結しました。今般、お世話になった方々や日比谷に関心をお持ちの方々に差しあげられたら、と小冊子としてまとめてみました。短期間での調査、取材とあって内容も未熟です。まだまだお話をうかがわなければならなかったところもたくさんあると思います。ご存知のことやお気づきの点をご教授、ご指摘いただければ幸いです。

昭和六十一年一月

保科 隆夫 電気化学工業株式会社総務部長代理

山岸 弘明 同 広報課ぐんばい編集室・執筆担当

デンカの七十年を  
見つけた街日比谷

デンカ  
70

社内報“ぐんばい”60年度連載

山岸 弘明

# デンカ ビル

## デンカの七十年を 見つづけた街日比谷

### ① ここに近世以降 日本の歴史の結晶が

大正四年（一九一五）四月一日、東京日比谷の三井集合所（カット写真）で電気化学工業株式会社設立に関する発起人会が開かれた。

この日、会場には三井銀行の早川千吉郎常務を筆頭に団 琢磨、牧田 環、藤原銀次郎、馬越恭平、渋沢栄一氏ら後世に名を残す三井系の有力者と、わが国カーバイド工業の祖、藤山常一博士ら二十二人が集まった。会社創立趣意書にはつぎのように記されている。

「（前略）発起人ハ茲ニ電気化学工業株式会社ヲ設立シ藤山氏ノ工場（注・北海カーバイド工場、後ノ当社苫小牧工場）及ビ特許權ヲ譲リ受ケ尚ホ各地ニ工場ヲ建設シ将来大規模ノ製造ヲ為シ年々激増スル需要ヲ充タシ進シテ海外輸出ヲ図リ更ニ諸種ノ化学工業ヲ経営セントスルモノナリ」。

そして、一か月後の五月一日、日本橋本町の三友倶楽部で創立総会が開かれ、公的にはこの日に当社は七十年の歴史を築くスタートをきったのだが、実質的な会社設立のための集まりである発起人会

が開かれた三井集合所は、現在当社の本社管理部門が入居している日比谷三井ビルの敷地内にあった。当時の住所は東京府麹町区有楽町三丁目一番地。

当初、当社の本社は日本橋室町に置かれたが、その後関東大震災などにより三か所を転々、昭和六年一月、前年に竣工したばかりの日比谷の三信ビルに移ってきた。戦後昭和二十年九月、この三信ビルが連合軍に接収されたため、当時目黒にあった研究所へ、その翌年には新富町の帝国興信所ビルへ移転したが、二十五年二月再び三信ビルへ戻った。都電が三信ビルと、当時は建っていない三井ビルとの間の通りを発着所としていたころだ。以来ここに当社は本社を構えている。

このように、ここ日比谷の地は当社の七十年をずっと見つづけてきたといつてよからう。

有楽座裏にある焼き鳥、ポッポのこの主人、大久保幸太郎さんは朝日新聞の記者の質問にこう答えておられる（朝日新聞社会部、有楽町有情）。

「（昭和十一年二月二十六日）朝八時こ



ろだったかな。機をたんだ将校の乗用車と、麻布三連隊の軍用トラックに剣付き鉄砲で武装した兵隊を満載したのが、猛スピードでやってきた。それが、朝日新聞の前にピタッと停った。輪転機に砂をかけたんだそうだ、なんていうのはあとで知ったんだよ。日劇前には機関銃二丁がすえてあった。(翌朝)こんどは千葉のはらの連隊の兵隊がたあくさんきた。土地の人間はみんな日劇と三信ビルの地下に、強制避難させられた。あたしは在郷軍人の班長だったから、警戒警邏の手伝いをさせられた。一日にニギリメシ一個という日がつづいてね。無我夢中だったよ」ここに出てくる朝日新聞はすでに築地に移り、日劇はマリオンとなり、有楽座はいま取り壊しが進んでいる。

い二十年一月二十七日午後二時過ぎ、この一帯にB29編隊の爆弾の雨が降った。三信ビル南側の道路、日比谷映画館隣、帝国ホテル裏、朝日新聞の旧社屋わき、さらに国電有楽町駅中央改札口に二発命中し、地方への疎開を急ぐためなどで切符を買いきていた行列の百人以上と駅員九人が爆死している。

皇居に近いこの地域が狙われた最大の理由は、当時陸軍が米大陸まで風に乘せて運んで爆発させる風船爆弾を日劇、東京宝塚劇場、有楽座でつくっていたためといわれる。

そして敗戦。二十年九月八日、マッカーサー連合軍最高司令官は東京に入ると、日比谷交差点に近い第一生命館を占拠して総司令部(GHQ)とした。進駐軍は周辺の焼け残ったビルを次つぎと接収、三信ビルには通信隊が入り、隣の朝

日生命館は憲兵隊本部となり、日比谷・有楽町界隈は米兵で溢れた。戦時中、米本土を焦土と化すはずの風船爆弾をつくらっていた東京宝塚劇場がアーニー・バイル劇場と改名され、昭和三十年まで米軍将兵のための専用劇場になっていたのは、時の流れが生んだ皮肉であった。

そしていまこのあたりはオフィスとアミューズメントのセンターとして繁栄を極めていく。

このように戦前、戦後の五十年間を垣間見ただけでも、この街は時代の折々の様相を克明に反映している。

古くは江戸城を目前にし、これが維新によって皇居となり、鹿鳴館時代の本舞

台となり、平民社など社会主義運動の本拠地ともなりGHQがおかれ、血のメーデーと安保抗争を眺め、さらにビジネスと映画・演劇の中心地として発展してきた日比谷・有楽町の移り変わりを見ると、近世から現在までの日本の政治と経済の歴史がここに結晶しているという感を深く抱かされる。

デンカ70を機に来月号から十一回にわたってこの街の歴史を点描したい。生まれ育った、ふるさと」とは別に、いま実際に働き、生活に密着している場所の、来しかた」を探り、その地への愛着を深めようとするのは決して無駄ではないと思うからである。



藤原銀次郎氏



早川千吉郎氏



藤山 常一氏



田 塚 康氏



沢沢 栄一氏



牧田 環氏

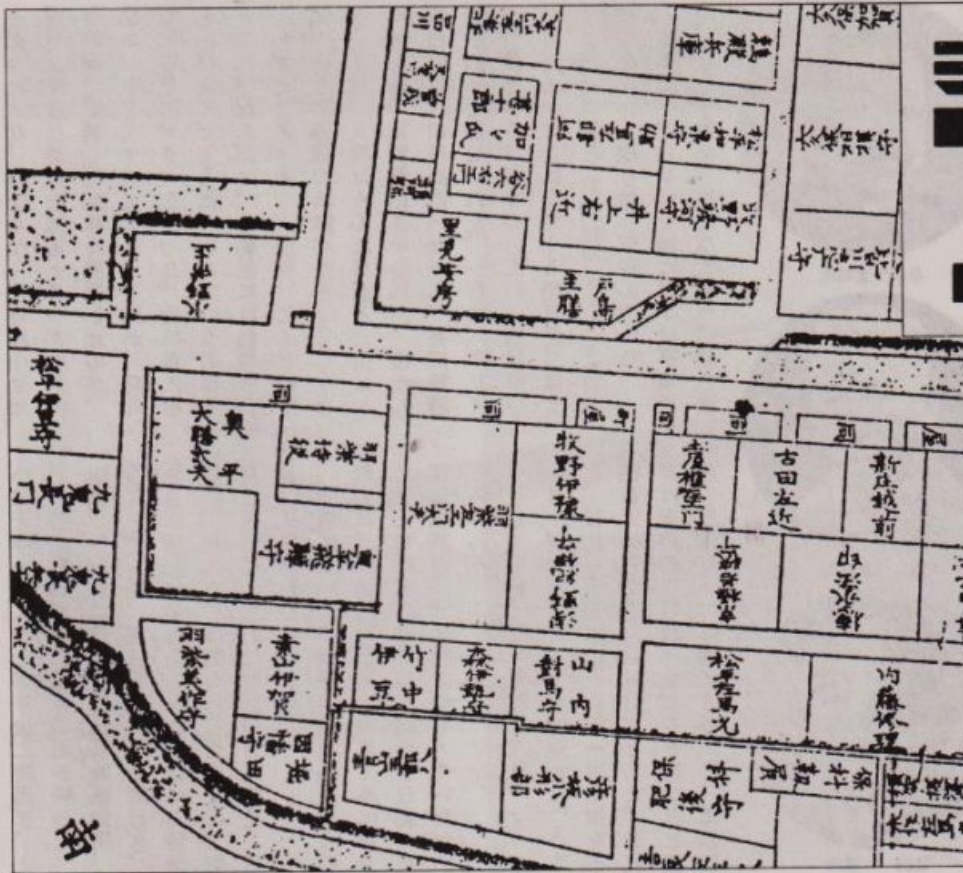


当社創立当時の日比谷地区 (大正7年東京市全図)

# デんカ アジ

## デんカの七十年を 見つけた街日比谷

### ②日比谷のあけぼの



日比谷入江は慶長8年に埋め立てられたが、その3年後の江戸。初代住民たちの名前がみえる

慶長八年（一六〇三）、徳川家康は得意の絶頂期にあった。三年前の関ヶ原の合戦で豊臣方を粉碎し、この年二月に征夷大將軍に任命されたのだ。家康六十二才。暗れて全国の諸大名を従えることになった家康は、これを契機に名実ともに江戸を中心とした支配体制を展開する。町づくりも急ピッチだ。当時入江だった日比谷地区の埋め立てを含む江戸港整備、翌九年からは豪華壮麗な江戸城築城に着手する。新將軍の威光を天下に示すためにも日本一の町づくり、城づくりが不可欠であった。日比谷のあけぼのである。

日比谷は、江戸城構築のために全国から運ばれてくる建築資材荷上げ用の江戸港整備のために、まっ先に埋め立てられた。神田山を切りくずした土が日比谷の海に運ばれた。この工事は天下普請といわれて幕府から命令された諸大名が、石高千石について一人ずつの人夫を出し合ったことから千石夫とも呼ばれている。この年の秋からは初代住民の賜邸がはじまった。カットの慶長江戸絵図は慶長十一年（一六〇六）のものだが、埋め立てからわずか三年目だから、この人たちは日比谷の最初の住民であろう。

この絵図によると現在、皇居外苑になっている西の丸下と日比谷には諸代大名の屋敷がつづき、丸の内には外様大名が軒を並べている。日比谷は西に日比谷濠（現存）、東は高速度道路になった外堀に囲まれ、さらに日生ビル、宝塚劇場のところに堀が通じていたので、完全な城郭内であった。この日比谷埋め立てで作られた街並みは、その後大正十二年の関東大震災まで三百年間ほとんど変わっていない。

三信ビル、三井ビルはこの図では水野市正と松平伊豆守、奥平大膳邸の一部にあたる。松平伊豆家は後、酒井、青山、松平と変わり、明治維新まで五家十五人、水野家は十四家三十五人、奥平家は九家十八人の大名（一部高級旗本）がこの敷地に移り住むのである。

水野家は代々松平家につかえた名門。忠胤の父忠正は家康の生母・於大の方の弟だから家康とはイトコ同士にあたる。

茨城県の結城藩祖・勝成は忠胤の兄。兄弟は関ヶ原の合戦で戦功をあげ、忠胤も愛知県内で一万石が与えられ大番頭となつた。

この忠胤はささいなことから破綻を招く。慶長十四年九月、浜松藩主を招待して日比谷邸で宴会を行なったが、このとき配下の大番士が武道のいい争いから、客の桜井忠教を殺害するという事件を起こしたのである。この事件に連座した忠胤は事件一か月後に切腹を命じられる。家康のイトコとして出世が約束された勇将の、あつけない最期であつた。

悲運の人といえは福島正則もそうだ。この絵図の羽柴左衛門太夫がこの人。現在の有楽町国際ビル、新国際ビルが上屋敷である。元和五年（一九一九）六月、福島邸はものしい武装隊に包囲された。この日、幕府上使は広島城無断修復を理由に福島家の改易に結びつく大減封を申し渡している。この豊臣温顧の大々名への処遇は、伝える人、聞く人涙にむせんだという。

松平藤井伊豆守は徳川家を支えた有力松平のひとつ。御前元服や將軍家の諸行事では徳川一族として厚遇され、兵庫県の明石七万石、奥平伊達大膳太夫もまた、徳川の大功臣のひとつで栃木県の宇都宮十萬石を領有した。

この図にはないが、日比谷公園の三信・三井ビル寄りと帝國ホテルには独眼竜と恐れられた伊達政宗邸があつた。政宗

は秀吉没後、家康とガッチリ手を結んで徳川幕府創設に尽力し、加増を繰り返して陸奥（宮城県など）六十二萬石の太守におさまっている。

日比谷公園といえは、関ヶ原の合戦で豊臣方についた鍋島直茂と毛利輝元邸があつた。逸早く人質をさしだして危うく改易を逃れている。桜田から霞ヶ関にかけて外様大名が多かつたのは、油断のない連中をこの低地に集めたからだともいわれる。

江戸初期の日比谷にもうひとり忘れられない人がいた。千利久七高弟のひとつりで有楽町の語源ともなつた織田有楽斎である。この人は泰明小学校の一面に慶長、元和期に住んだが、茶人として有名になりすぎたせいか、天下人・織田信長の弟として関ヶ原の合戦でも活躍した勇将であつたことはあまり知られていない。

信長亡き後の織田一門はいずれも歴史の渦中にもあそばされるが、この人だけは別だつた。本能寺の変では京都にあつて難を逃がれ、豊臣時代はお咄衆に加わる。徳川期に京都府内三萬石の大名となり、裕々自適、その余世を茶人として送る。

ある者は加増を繰り返して子々孫々におよび、一方、涙にくれた改易大名もあつた。日比谷四百年の歴史は大名たちの悲喜模様を織りなしながら、こうして幕を開いたのである。

江戸図(前期)に見る日比谷住民の変遷

年号	地名	帝國ホテル	公園東端	道路・三井	三井・劇場	焼鳥・ニュー	パークツイン	電気ビル
1598	慶長3	別本江戸図	海	荷あげ所	海	海	海	海
1606	" 11	江戸絵図	一	水野市正	松平伊豆	九鬼長門	奥平大膳	空屋敷
"	"	江戸始図	一	"	"	"	"	"
"	"	江戸図	一	"	"	"	"	"
"	寛永前	往古江戸図	松平越前	松平陸奥	真田河内	山城	"	池田備中
1632	" 9	武州江戸図	"	"	"	"	"	"
1636	" 13	江戸図	"	"	"	"	"	"
1638	" 15	"	"	"	"	"	"	"
1644	正保1	"	"	"	"	"	"	"
1653	承応2	武州古改図	陸奥	"	河内	"	"	青山大膳
1655	" 4	武鑑	"	"	"	"	"	"
1657	明暦3	新添江戸図	"	"	"	"	"	"
1658	万治1	武鑑	一	"	"	"	"	"
1666	寛文6	新版増補図	本多・土岐	甲府宰相	岡田豊前	"	"	"
1669	" 9	武鑑	*5 *6	*7	*8	"	日向	"
1670	" 10	新版大絵図	"	"	"	"	"	"
1672	" 12	正権江戸鑑	"	"	"	"	"	"
"	後期	江戸図	"	"	"	"	"	"
1675	延宝3	武鑑	"	"	"	"	"	小平治
1679	" 7	江戸大絵図	"	"	"	"	"	小次郎
1680	" 8	方角安見図	"	"	"	"	"	土屋相模
1681	天和1	正系江戸鑑	"	"	"	"	"	"
1683	" 3	武鑑	阿部対馬	"	"	酒井河内	"	"
"	貞享期	上水図	*11	"	坂本内匠	"	"	播摩
1686	" 3	江戸大絵図	"	"	内記	"	"	"
1688	元禄1	本朝武鑑	"	"	"	"	"	"
1689	" 2	図鑑綱目	"	"	植村土佐	"	"	長門
1690	" 3	江戸大絵図	"	"	"	"	"	弾正
1691	" 4	本朝武系鑑	"	"	*13	"	"	稲葉丹後
1693	" 6	江戸正方鑑	"	"	"	"	"	大和
"	"	図花万葉記	"	"	"	"	"	*14
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	"	"	長門
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	"	"	松平主殿
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	"	"	*15
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	"	"	一*17
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	青山播摩	"	*16
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	北條美濃	"	*4
"	"	本朝武系鑑	"	"	"	"	"	"

ぐんばい編集室調べ\*1九鬼守隆三重3.5 \*2真田中屋敷松代13 \*3池田長吉松山6.5 \*4青山寺成尼崎5 \*5本多利長岡崎5 \*6土岐頼行上山2.5 \*7徳川綱重甲府25 \*8岡田義政0.7 \*9土屋政道土満4.5 \*10酒井忠孝前橋13 \*11阿部正敏忍8 \*12坂本重治深見1 \*13植村忠朝上総1.1 \*14稲葉正征高田10.3 \*15本多正永沼田4 \*16松平忠房島原6.5 \*17北條氏治狭山1.1 (氏名は初代のみ、単位:万石)

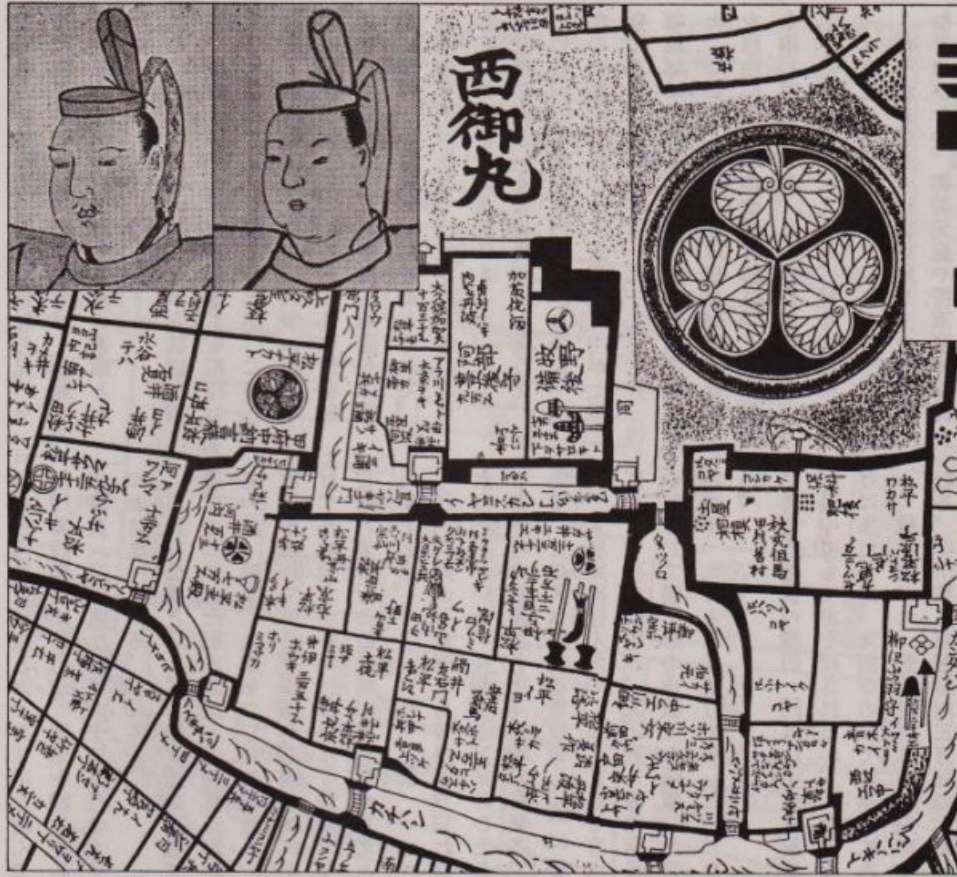


慶長3年(1598)の日比谷周辺。三信・三井ビルは海中に没している

# デニカ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### ③ 華ひらく日比谷元禄



元禄6年の江戸図。日比谷公園には甲府中納言邸があり、ここからは6代将軍家宣（写真左）と7代将軍家継がでた

元禄時代——一六八八年から一七〇三年。戦がなくなつて久しく、武士にも町人にも農民にもはや平和は当然のことと考えられていた。江戸は急激に発展し、当時人口はすでに百万を数えたという。消費は拡大し、貨幣経済が進み、商人が大きな力を持つてくる。この時期に

生きた获生徂徠は、このころの江戸の暮しを、旅宿の境界、といっている。宿屋住いと同じで、菜っ葉や大根はもとより、味噌も酒も、草鞋に至るまで金で買わなければならぬ生活であるというのだ。

この時代も日比谷は武家の地でありつづける。三信・三井ビルには酒井河内守と稲葉能登守、松平主計らがあり、日比谷公園の交差点よりには甲府宰相があつた。

酒井河内守は下馬將軍とられた酒井忠清の子忠挙である。忠清は四代將軍家綱の信を独占して専横を振るつたが、延宝八年（一六八〇）十二月、將軍後継問題でライバル堀田正俊に敗れた。新將軍綱吉の忠清への憎しみは凄まじいもの

があつた。二年後の天和元年三月に隠居して、五月不遇のうちに没すると、病死の届け出に不審ありとして埋葬後検視を命じている。

忠挙は父の失脚後、前橋十三万石を継ぎ、江戸屋敷も現在の皇居前広場から日比谷に移された。父在職中のはからいにいきすぎがあつたとして六か月間の逼塞も受ける。中央では閑職に終始したが、これがかえつて前橋藩政に専心させる結果となつた。学問や武道を奨励する一方、諸制度の整備、元禄検地の実施、商業振興などをはかり、酒井歴代随一の名君と語り伝えられている。

日比谷は幕府政治の中心地であつた。老中や若年寄、寺社奉行などの役宅ともなつたからである。彼らは江戸城内での執務のほか、実務をそれぞれの上屋敷で行なつた。三信ビルの一部からパークビルまでの一面には土屋相模守数正、稲葉丹後守正往、戸田能登守忠真など幕閣の実力者が移り住んでいる。

稲葉正往の曾祖父正成ははじめ糸魚川一万石にすぎなかつた。この稲葉家を中

堅護代大名におしあげたのは、この正成の妻が三代將軍家光の乳母春日局であつたからだ。次期將軍が弟の国千代に傾きかけたとき、家康に直訴してひっくりかえした春日局はその後も大奥にあつて絶大な権勢をふるう。正往も幼少期から大奥をたずね、曾祖母春日局や家光にかわいがられている。天和六年奏者番をふりだしに寺社奉行、京都所司代に進み、元禄十四年(一七〇一)一月には老中に昇りつめる。高田十萬二千石。

ところで日比谷の住民が六代將軍になつてゐる。万治四年(一六六一)二月から宝永元年(一七〇四)までの四十三年間、日比谷公園の三井ビル寄りには甲府二十五万石の徳川綱重と綱豊父子が住むが、父は惜しくも五代將軍の座を逃がしたものの、子は六代將軍家宜となり、孫は七代將軍を継承する。カットの徳川系図をみると、その辺の事情のみこめる。綱重は家光の三男で兄家綱は四代將軍である。はじめ千姫の養子となり、甲府城主として三十四才の生涯をとげるが、この人ももしあと二年長生きできたら間違ひなく五代將軍の座を射とめていたことだろう。二年後に兄將軍が病死すると、弟の綱吉が五代將軍を継ぐ。

綱吉をはじめ、天和の治、といわれる文治政治を布く。学問を奨励し文学、絵画、芸能など江戸文化が花を開いた。しかし堀田正俊没後、政治は弛緩する。泰平ムードのなかで消費経済はますます進

み、インフレを招き、幕府財政は悪化を辿る。生類あわれみの令などの悪政もめだつてくる。

宝永六年(一七〇九)一月、綱吉が没すると綱豊が徳川宗家を継いで六代將軍家宜となった。父綱重の悲願は子、孫の二代にわたつて叶つたのである。

綱豊の母は千姫に奉公していたお保良の方といった。綱豊が生まれたとき綱重には関白二条光平の娘との縁談が進んでいた。正妻を迎えるときに子どもがあつてはまずいということになつて家臣の養子として育てるが、このことが幻の天一坊事件へ発展する。正妻が亡くなると再び正式の嫡子として迎えようとして、一部の家臣がにせ者だと幕府に訴えたのである。

元禄といえは泰平の夢を破つた赤穂浪士の討入りにふれないわけにはいかなない。東京駅前前の山陽因策バルビル、東京海上ビルの一画には幕府の勅使接待所Ⅱ伝奏屋敷があつたが、元禄十三年三月、この屋敷で数かずのはずかしめを受けた浅野内匠頭が殿中松の廊下で吉良上野介に切りかかる。仇役の吉良家上屋敷は鍛冶橋際、都庁先にあつた。旧主の仇を討ちとつた大石良雄らが切腹を命ぜられ、果てたのが元禄十六年。元禄期最後の年である。

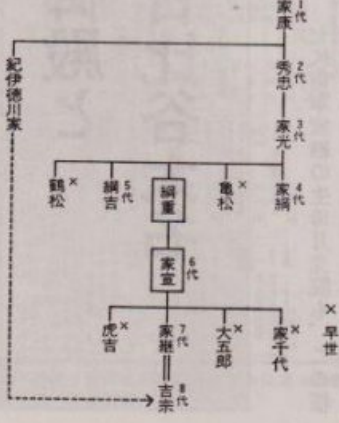
そして元禄の幕が降ろされたとき、江戸時代の歴史は大きな岐路にたつのである。

江戸図(中期)に見る日比谷住民の変遷

年号	地名	帝国ホテル	公園東端	道路・三井	三井劇場	焼鳥・ニュー	パークツイン	電気ビル
1696	元禄9 江戸絵図	阿部対馬	甲府殿	植村土佐	青山播摩	松平主殿	稲葉丹後	本多紀伊
1698	" 11 分間江戸図	" *1	" *2	松平主計	" *5	" 阿波	" *7	内藤丹波
1699	" 12	"	"	" *3	"	" *6	"	" *8
1700	" 13 江戸絵図	"	"	" *4	"	"	"	" *9
1701	" 14 大成江戸図	"	"	"	"	主殿	戸田能登	右近
1704	宝永1 江戸図	"	"	土屋山城	"	"	" *10	松平下野
1707	" 4 御城辺小路	"	桜田御殿	松平主計	"	"	"	" *11
1708	" 5 分間大絵図	"	" *12	土屋山城	"	"	"	"
1710	" 7 一統武鑑	"	一	" *13	"	"	"	一
1713	正徳3 分間大絵図	備中	"	"	大膳	"	"	森河出羽
1714	" 4 分間懐宝	対馬	"	一	播摩	"	一	" *14
1716	享保1 分間大絵図	"	"	松平主計	大膳	"	秋元伊賀	石川近江
1717	" 2 江戸絵図	伊勢	"	土屋丹後	"	"	" *15	" *16
1718	" 3 分間大絵図	"	"	"	"	"	"	永井飛騨
1720	" 5 江戸図	"	"	"	播摩	"	"	" *17
1723	" 8 江戸大絵図	"	"	松平内匠	大膳	"	"	"
1724	" 9	"	"	" *18	"	"	"	"
1725	" 10	"	"	"	"	"	"	"
1728	" 13 江戸絵図	"	"	"	"	"	但馬	"
1730	" 15	"	"	"	"	"	"	"
1731	" 16	"	"	"	"	"	伊賀	"
1732	" 17 江戸図	"	"	一	"	"	但馬	"
1734	" 19 江戸大絵図	"	"	安藤出羽	" *19	"	"	"
1735	" 20 江戸図	"	"	"	"	"	丹後	"
1736	元文1	"	"	一	"	"	但馬	"
1737	" 2 江戸大絵図	"	"	明地	"	"	丹後	"
1739	" 4 新版分間図	"	"	一	"	"	"	"
1741	寛保1 分間大絵図	"	"	"	"	"	"	"
1744	延享1 江戸大絵図	"	"	"	"	"	摂津	"
1745	" 3 分間大絵図	"	"	"	"	"	越中	"
1747	" 4 武鑑	一	"	" *21	"	"	本多紀伊	遠江
1750	寛延3 分間大絵図	"	"	土佐今大路	"	"	中務 *22	"

編纂室調べ= \*1阿部正邦宮津9.9万石 \*2徳川綱重甲府25万石 \*3植村忠朝上総1.1万石 \*4松平近鎮大番頭2.5万石 \*5青山幸督尼崎5万石 \*6松平忠房鳥原6.5万石 \*7稲葉正征高田10.3万石 \*8本多正永沼田4万石 \*9内藤政森泉2万石 \*10戸田忠真高田6.7万石 \*11松平信次小島1万石 \*12幕府御用屋敷 \*13土屋朝直大番頭3千石 \*14森河俊胤生実1万石 \*15秋元齋房川越1万石 \*16石川総茂石川1.7万石 \*17永井直期高槻3.6万石 \*18松平乗興御側衆5千石 \*19安藤定衛御側衆3千石 \*20松平土佐中屋敷25.7万石 \*21今大路元典典業頭1.2千石 \*22本多忠敬古賀5万石

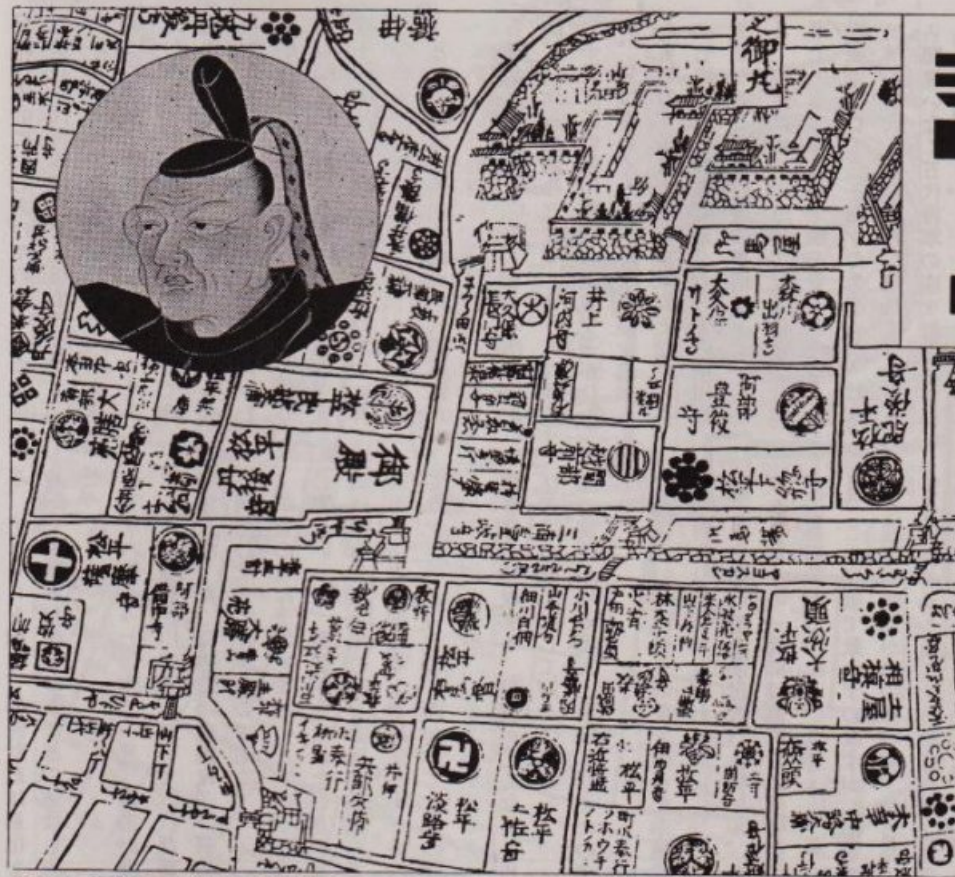
徳川家系図



# デニカ ア

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### 4 桜田御殿と 中期日比谷大名



享保元年(1716)の日比谷。8代将軍吉宗(写真)の享保の改革を推進した松平乗徳邸が有楽町ビルの一画にあった

宝永元年(一七〇四)、甲府二十五万石の徳川綱豊が将軍綱吉の養子となり、六代将軍(家宣)に就任したことは先月ご紹介した。この綱豊邸は日比谷通りを隔てた日比谷公園、三信・三井ビル側の四分の一を占め、その後縮小されながらも桜田御殿、桜田御用屋敷と呼ばれて幕末に至る。

桜田御殿は将軍没後、残された子持ち側室たちの余世の場。比久尾屋敷で、八代将軍吉宗以降は御庭番長屋をも兼ねる。明和九年(一七七二)から寛政元年(一七八九)までここに安祥院が住んでいる。安祥院はお遊覧の方、お千勢の方といい、浪人三浦親周の娘として生まれたが、旗本の養女となって大奥に入り、九代将軍家重の寵愛を一身に受けて二男の清水重好を生んでいる。家重没後、落飾して桜田御殿に入り、その子重好は都下などで十万石を領して田安、一橋ともにご三卿のひとりに数えられる。このほか家宣側室の右近の方、吉宗側室のお久亀の方などがここで余世を前將軍供養にあてるのである。

七代将軍家継の生母月光院も、この桜田御殿の奥勤めがきっかけで家宣の手がついた。宝永六年、西の丸で鍋松を生み將軍世継になった。この人は浅草の住職の娘である。

お庭番は吉宗が享保元年(一七一六)紀州の身分の低い士を呼びよせて創設したもので、將軍の私的情報収集機関である。江戸城内の巡察に加え、諸大名の秘密事項を探ったりもしている。いったん任務を受けると、農民や商人に変装して目的地に侵入、身分がわかってそのまま悲業の最期を遂げることもあった。このように危険を伴う業務のため、機転がきいて武術の優れたお庭番のなから、やがて立身出世を果すものも現われる。彼らははじめ桜田長屋にあり、出世とともに屋敷を与えられた。

さて、先月ご紹介した元禄文化は泰平ムードのなかに都市の消費生活を向上させたが、インフレや道義の頹廃もめだち、米作経済を基盤とした封建制度そのものをゆさぶる。

帝国ホテルにあった阿部家はこうした

中期江戸大名の典型だろう。日比谷最初の住民となった正邦は、はじめ岩槻九万九千石を領したが、宮津九万九千石、宇都宮十萬石、福山十萬石と転封を繰り返したため藩財政は窮乏し、これを補うために収奪強化と厳しい領民弾圧を繰り返している。阿部氏の帝国ホテル時代八十年は、弾圧と一揆の歴史でもあった。

最初の全藩一揆は享保二年(一七一七)に起こっている。このときは農民の要求が一応認められたが、一揆後多くの首謀者が捕まって厳罰に処せられると、領主と領民の間には消えがたい不信感が宿る。明和六(一七六九)、七年、天明六(一七八六)、七年の不凶時に再び大一揆が激発、徹底抵抗した農民は強硬方針でのぞんだ領主側を敗北に追い込んでいく。

国際ビルの一面には鳥取三十二万石の松平池田相模守邸があった。鳥取藩は国替えがなかったとはいえ、幕府からの公役や相づく災害復旧などで臨時出費が増え、参勤交代の旅費や五つもあった江戸屋敷の維持費も増加して、享保期には藩主の江戸参勤費用が捻出できずに四苦八苦する。このため藩では年ごとの豊凶にかかわらずに税を一定にする年限請負法を実施しようとするが、相づく反対一揆に合って実現しない。財政危機は藩主藩士の生活を逼迫させ、藩政動揺がつづくのである。

もともと三井ビルの青山幸道のように、収奪強化を上手にはこんだ大名もあつた。幸道は宝暦八年(一七五八)郡上四万八千石へ国替えとなつた。この藩は前任の金森出雲守が財政難のため強引な検地を行ない、相づく強訴のため改易された曰く地。幸道はあっさり切汰田畑を調べて増収を果した。

吉家の治政三十年間に渡る享保の改革は一時的にせよ成果をあげる。彼はまず幕府内の人心を一新するため、人材の抜擢を行なつた。そのひとりがある楽町ビル、新有楽町ビルにあつた老中筆頭・松平乗色であり、来月号に紹介する南町奉行の大岡忠相である。

改革は幕府の財政をどうやって建て直していくかということで、元禄以来膨大になっている消費支出に歯止めをかける一方、農民からの年貢取り立てを厳しいものにした。具体的には上米制・足高制・五公五民制の採用、新田の開発、株仲間・育成などで、乗色は吉家のブレインとしてこの享保の改革に取り組み、延享二年(一七四五)新將軍家重の勘気によつて失脚する。

農村対策に全力を傾け、米將軍の異名までとつた吉宗ではあつたが、この改革も成功するには至らなかつた。財政の窮乏は貨幣の改鑄、増発にすすみ、農村一揆の激発は幕藩体制を脅かす。江戸時代はかかえきれない矛盾をはらみながら、後期へと移っていく。

江戸図(中期)に見る日比谷住民の変遷(くはいは編集室調べ)

年号	地図名	帝国ホテル	公園東端	道路・三井	三井・劇場	焼鳥・ニュー	パークツイン	電気ビル	
1755	宝暦5	武鑑	阿部伊子	一	今大路・松平	青山大膳	松平主殿	本多美濃	永井直江
1756	"	6	新版江戸図	"	御用屋敷	道三	土佐	"	"
1758	"	8	分間大絵図	"	"	"	"	"	"
1759	"	9	"	"	"	"	"	"	"
1760	"	10	江戸図	"	伊勢	"	"	中務	"
1763	"	13	御江戸絵図	"	"	"	"	"	飛弾
1766	明和3	分間大絵図	井上大和	"	"	大和	"	"	"
1768	"	5	懷宝江戸図	"	鉄之進	"	"	平八	"
1770	"	7	新版江戸図	"	大和	"	伯耆	中務	阿波
1771	"	8	江戸図	"	堀田相模	"	大和	"	虎之助
1772	"	9	分間大絵図	"	井上河内	"	"	平八	"
1773	安永2	"	堀田相模	"	安祥院	"	"	中務	"
1774	"	3	御江戸絵図	"	"	"	大膳	越中	日向
1775	"	4	江戸図	"	"	"	"	中務	"
1780	"	9	分間大絵図	"	"	"	"	"	"
1781	天明1	"	改正江戸図	"	"	"	大和	大和	"
1784	"	4	江戸絵図	"	阿部能登	"	大膳	飛弾	"
1786	"	6	公間大絵図	"	"	"	大和	"	"
1788	"	8	天明江戸図	"	"	"	"	"	"
1790	寛政2	"	江戸大絵図	"	豊後	"	松平玄蕃	主殿	"
1792	"	4	分間大絵図	"	"	"	牧野備後	"	"
1796	"	8	懷宝江戸図	"	"	"	"	日向	"
1797	"	9	再版改正	"	"	"	"	"	飛弾
1803	享和3	"	分間大絵図	"	播摩	"	越中	"	日向
1805	文化2	"	懷宝江戸図	"	"	"	"	"	"
1806	"	3	御江戸絵図	"	"	"	"	"	"
1809	"	6	武鑑	"	鉄丸	"	"	"	"
1811	"	8	江戸図	"	"	"	"	"	飛弾
1813	"	10	江府新絵図	"	"	"	"	"	"
1814	"	11	分間江戸図	"	播摩	"	"	"	"
1816	"	13	武鑑	"	鉄丸	"	"	"	"

\*1阿部正邦福山10万石 \*2青山幸督尼崎5万石 \*3松平忠房島原6万石 \*4本多忠敬古賀5万石 \*5永井直期高槻3.6万石 \*6幕府御用屋敷 \*7今大路元勲典薬頭1.2万石 \*8松平土佐中屋敷25.7万石 \*9井上正経浜松6万石 \*10堀田正頼佐倉8万石 \*9代將軍家重の側室 \*12阿部正敏忍8万石 \*13松平忠福小幡2万石 \*14牧野貞長笠間8万石(氏名は初代のみ、単位:万石)

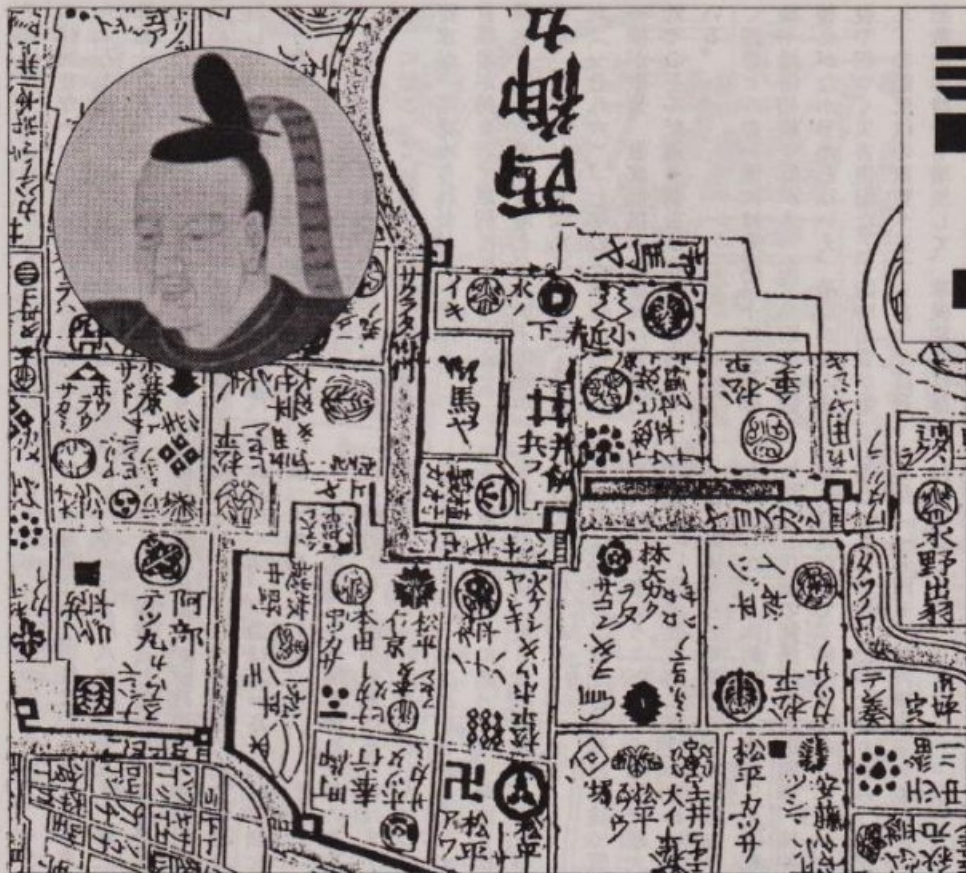


元禄・享保・宝暦と96年間三井ビルにあった青山大膳家(天保武鑑)

# デニカ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### 5 幕閣と 奉行所と医官の町



大御所政治を展開した11代將軍家斉（円内）と文化8年（1811）の江戸図

文化・文政時代（一八〇四―二九）に開いた化政文化は、江戸時代の終焉を飾る最後のあだ花でもあった。八代將軍吉宗没後の幕政は田沼意次に代表される側用人政治となる。十一代將軍家斉のもとで老中となった松平定信は、田沼一族を追放して寛政の改革を断行するが、わずか六年で挫折。芸術面では滝沢馬琴、山東京伝、喜多川歌麿、五代目市川團十郎、学問の分野では平賀源内、杉田玄白らに代表される文化文政の華が咲き誇った繁栄の一方で、地方の困窮はその極に達し、増幅する農民一揆は幕藩政治を揺るがす。

江戸後期の日比谷は幕閣の町であり、奉行所の町であり、医官の町であり、そして財政難にあえぐ譜代中堅大名、その実力を着々と養いつつあった、外様雄藩の江戸屋敷の地でもあった。

三井ビルには牧野越中守、焼鳥横町と三角街は松平主殿頭、パークビル本多中務大輔、電気ビル永井飛弾守、第一生命松平右京亮、有楽町ビル本多豊前守があり、帝国ホテルには阿部頼摩守邸があっ

たが、この時代の日比谷の代表といえは有楽町マリオンの裏側、朝日街にあった南町奉行所であろう。宝永四年（一七〇七）北町奉行所としてスタート、享保四年（一七一九）には南町奉行所と改称されたが、その二代目がテレビや映画でお馴染みの大岡越前守忠相である。

忠相は二十年間の在職期間中数々の名裁判を残したと伝えられているが、そのほとんどがフィクションだという。しかし町火消し制度、風俗取り締り、小石川療養所の建設、物価安定のための諸政策など、その業績は公正な裁判ぶりとともに江戸市民の人気を集めた。

この南町奉行所には明治維新までの約百六十年間に三十八名の奉行が名を連ねるが、そのなかには弘化・嘉永期に遠山桜を散らした、金さんこと遠山左衛門尉、安政の大獄で悪名をはせた鳥井耀蔵の名前もある。

三信・三井ビルの一部と、その前の日比谷通りに延享三年（一七四六）から六十年間住んだ今大路道三は將軍主治医。わが国医学界中興の開山といわれる道三



正盛、正頼父子の子孫で、幕府医官の最高責任者である典薬頭をつとめた。代々の將軍家臨終の席にも立ち合う。当時の武鑑では従五位下千三百石。登城には乗輿、白無垢着用が許され、日比谷には元勳から五代が住んだ。

さて、先月号に松平乗邑が老中筆頭として享保の改革を進めたことを書いたが、その後も相次いで幕閣の実力者が移り住んでいる。第一生命ビル、丸の内署の四家はその代表的なものだ。文政六年（一八二三）からの牧野忠精は寺社奉行、京都所司代を経て老中に昇進、一旦は閣外に去ったが、再び加判の列を拝命する。

文政十一年（一八二八）からの酒井忠順は京都所司代要職にあつて和宮降嫁に奔走、天保八年（一八三七）からの青山忠良も老中となつた。

そしてその極めつけは弘化元年（一八四四）からの土井利位である。利位は天保五年、大阪城代るとき、大塩平八郎の乱を鎮圧して九年から老中になり、水野忠邦のブレイクとして天保の改革を進める。

幕府財政立て直しのため、奢侈を取り締まり、低物価政策を貫こうというものであったが、安逸に慣れた役人や一般市民に歓迎されるはずはなかった。上知令を契機に猛反対が起こり、忠邦は失脚する。このとき利位は閣内にあつて上知令に反対し、代つて老中筆頭に進むが、難

局を避えた外交問題をかかえて忠邦が再び復帰したとき老中職を退いた。

日比谷電々ビル、第一勲銀ビルの一面には薩摩七十七万石の島津藩邸があつた。ここは江戸中期まで上屋敷で、後期は中屋敷となり、装束屋敷とも呼ばれた。装束の名前は島津藩の附偏であつた。琉球国王が江戸へ出て將軍にあいさつしたとき、ここで装束を改めて登城したからである。かつて独立国として栄えた琉球王朝も慶長時代に島津家光の猛攻を受けて、あえなく陥落、以後、島津藩の属国となつていた。

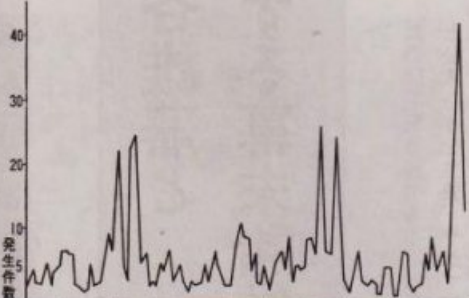
先月号に日比谷大名の苦しい台所事情を紹介したが、大々名島津藩の財政にも触れないわけにはいかない。これも宝暦期（一七五一）赤字は五百万両にも達していた。二十万両といわれた藩収の二十五年分にもあたる額である。このため島津藩は藩財政の立て直しと倒幕への道を歩むことになる。天保期にはこれまでの貸主に二百五十年間の無利子分括返還を強引に納得させる。借金のふみ倒しで身軽になる一方、国産品の専売や琉球を通じた貿易の収益などで藩財政は好転する。この成功が薩摩藩の明治維新遂行への基盤となつたといわれる。

嘉永六年（一八五三）ペリーの来航は徳川幕府の根底を揺さぶる。国内は開国、攘夷、勤王、佐幕にわかかえり、その混乱のなかに幕藩体制は終焉を迎えるのである。

江戸図(後期)に見る日比谷住民の変遷(ぐんばい編集室調べ)

年号	地図名	帝国ホテル	道路三井	三井劇場	パークツイン	電気ビル	第1生命	有楽町ビル	
1817	文化14	武鑑	阿部鉄丸	今大路土佐	牧野越中	本多中務	永井飛彈	松平右京	本多豊前
1818	文政1	新板富士見	*1	*2 *3	*4	*5	*6	*7	*8
1819	" 2	武鑑	"	"	"	"	"	"	"
1820	" 3	分間大絵図	"	"	"	"	"	"	"
1821	" 4	武鑑	"	"	"	"	"	"	"
1823	" 6	分間懷宝	"	"	"	"	"	"	"
1824	" 7	安見御江戸	飛彈	"	"	"	"	牧野備前	"
1826	" 9	御江戸絵図	松平	"	"	"	"	松平右京	"
1827	" 10	江戸図	鉄丸	安房	"	"	"	牧野備前	"
1828	" 11	江戸大絵図	"	*9	"	"	"	酒井修理	松平徳
1829	" 12	懷宝御江戸	飛彈	"	"	"	"	"	*10
1830	天保1	改正大絵図	"	"	"	"	"	"	*11
1831	" 2	御江戸絵図	鉄丸	"	"	"	"	"	右京
1832	" 3	江戸図	"	"	"	"	"	"	"
1833	" 4	分間懷宝	播摩	"	"	"	"	"	"
1834	" 5	江戸図	"	"	"	"	"	"	"
1836	" 7	泰平御江戸	能登	"	"	上総	"	青山駿河	"
1837	" 8	分間大絵図	"	"	"	"	"	酒井修理	"
1838	" 9	分間懷宝	播摩	"	"	中務	"	青山駿河	"
1839	" 10	江戸大絵図	能登	"	"	"	"	"	"
1840	" 11	分間大絵図	"	"	"	遠江	"	因幡	"
1841	" 12	江戸図	"	"	"	"	"	下野	"
1842	" 13	改正大絵図	"	"	兵部	"	"	"	*12
1843	" 14	江戸大絵図	播摩	"	"	越中	"	"	"
1844	" 15	江戸絵図	能登	"	"	兵部	"	土井大炊	"
1845	弘化2	江戸図	"	"	"	"	"	"	*13
1846	" 3	改正大絵図	"	"	"	"	"	"	"
1847	" 4	江戸図	播摩	"	"	"	"	"	"
1848	嘉永1	分色要覧図	能登	"	"	"	"	"	"
1849	" 2	江戸図	播摩	"	"	"	"	"	"

\*1 阿部正敏忍8万石 \*2 今大路元勳典薬頭1.2千石 \*3 松平土佐中屋敷24.2万石 \*4 牧野貞長笠間8万石 \*5 本多忠敬古賀5万石 \*6 永井直期高槻6万石 \*7 松平輝延高崎8.2万石 \*8 本多正珍田中4万石 \*9 松平阿波下屋敷25.7万石 \*10 牧野忠精長岡7.4万石 \*11 酒井忠順小浜11.3万石 \*12 青山忠良篠山5万石 \*13 土井利位古賀8万石  
(日比谷公園東端=幕府御用屋敷、焼島横町・ニュートーキョー=松平主殿忠房島原6万石は不変のため省略=氏名は初代のみ)



1760 1770 1780 1790 1800 1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870  
明 安 天 享 文 文 天 弘 嘉 安 万 文 慶  
和 水 明 政 和 化 政 保 化 永 政 延 久 治 応

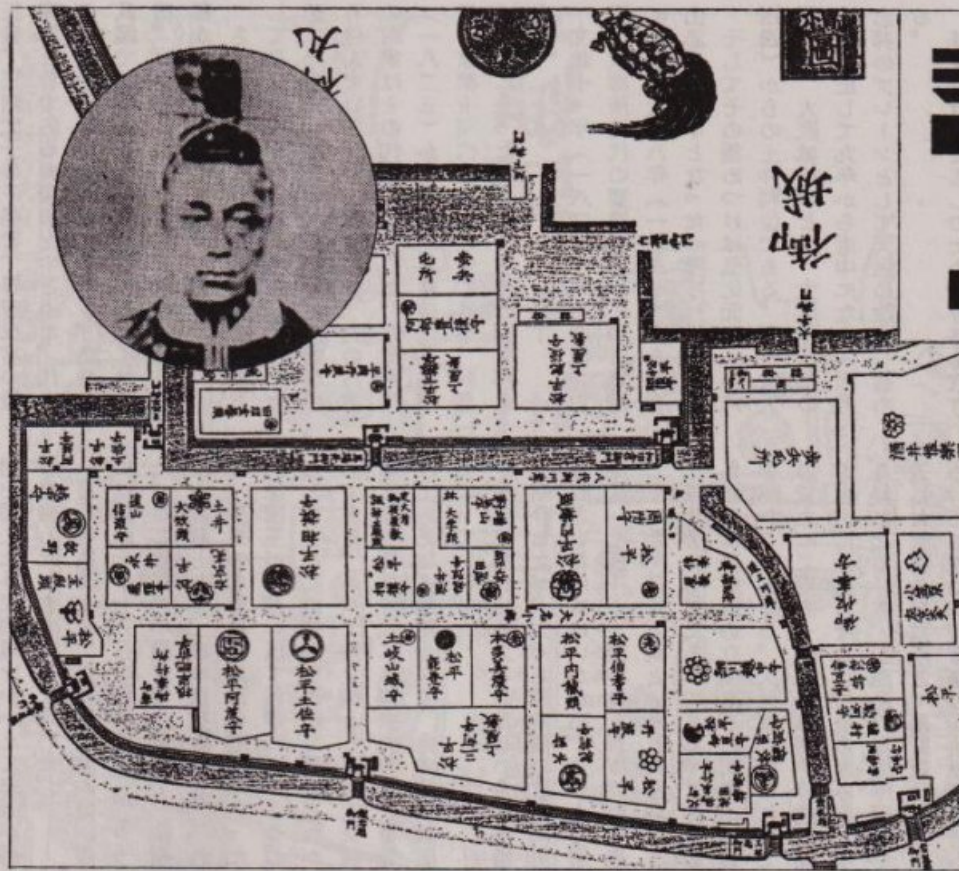
幕藩政治の矛盾は収奪強化となって農民に押しつけられた。農民一揆の続発もまた幕藩体制を揺るがす(文芸堂刊・国民の歴史から)

# デンカ アサ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

⑥

### 日比谷雄藩と 混乱する幕末諸侯



徳川幕府最後の将軍・慶喜（円内）と幕末慶応元年（1865）の日比谷周辺

嘉永六年（一八五三）、ペリーに率いられたアメリカ艦船の来航は徳川幕府を根底からゆさぶることになった。これを契機に国論は開国か攘夷か、尊王か佐幕かで沸きかえる。

安政五年（一八五八）、大老となった井伊直弼は対米・蘭・露・英・仏通商条約を調印、さらに尊攘派の弾圧（安政の大獄）、将軍後継問題などで独裁体制を布くが、これに対する反発も高まる。万延元年（一八六〇）三月、この直弼が桜田門外で水戸浪士に襲撃されるという大事件が起こった。白昼幕政の最高責任者が殺されるなどとはまったく考えられなかったことで、幕府の権威は一気に失墜する。

日本の夜明けは日比谷雄藩からはじまった。薩長土肥、というが、薩州鹿児島島津藩は中屋敷（はじめ上屋敷）が日比谷電々総合ビルにあり、長州山口毛利藩上屋敷は日比谷公園に、土州高知山内藩上屋敷も東京都庁に、そして肥州佐賀鍋島藩邸は日比谷公園にあった。

このなかでまず幕末史の引き金を引い

たのは毛利敬親である。はじめ積極開国と公武合体を主張、やがて尊攘論に変わる。慶応元年（一八六五）、十四代将軍徳川家茂は毛利再征を決め、自ら大阪城に入城する。

戦いは翌二年開かれたが、禁門の変直後の第一次征伐とは情勢が一変していた。裏では薩長同盟が結ばれ、幕府軍側の結束もおぼつかない。開戦と同時に幕軍は総崩れとなり、家茂は引き続き敗報のなか大阪城で急逝する。

十五代最後の将軍には、水戸斉昭の七男慶喜が就任する。彼の使命は幕府の権威を立て直すことにあった。慶喜は幕政と軍制の改革に着手するがすでに遅かった。薩長による倒幕計画が着々と進んでいることを知ると、あっさり大政を奉還。慶応三年（一八六五）、徳川幕府開府以来二百六十五年の歴史に終止符が打たれたのである。

しかし、この大政奉還がすべてを解決したことはならなかった。あくまで倒幕をめざす新政府軍五千と、大義によって君側の奸を一掃するとした幕府軍一万

五千が、鳥羽伏見にまみえたのは翌慶応四年二月のことであった。しかしすでに士気の衰えた幕府軍は、近代軍制のもと錦旗をなびかせて進撃する新政府軍の敵ではなかった。全軍総崩れとなると、慶喜は老中ら数人を伴ってアメリカ軍艦で江戸に逃げ帰る。徳川幕府の政權奪回の夢もここまで。征討軍の東下、江戸開城へと進むのである。

この激動期、薩長土肥以外の日比谷諸大名はどう対応したのであろうか。国際ビル一画の鳥取藩主池田慶徳は勤王藩として活躍している。鳥羽伏見の戦い以来つねに新政府軍の最前線にあり、上野彰義隊、近藤 勇の甲陽鎮撫隊を破り、ついで奥州各地を転戦する。ニュートーキョーからやきとり街の一面にあった島原藩主松平忠和は將軍慶喜の末弟であったが、藩論のおもむくまま新政府軍に加わり、やはり奥羽で苦しい戦いを強いられた。

有楽町ビルの高崎藩松平大河内輝照はもとの幕府陸軍奉行並み。早々と武器弾薬と一万両を献納して恭順を表し、新政府軍に加わって会津勢と戦った。先月号に天保の改革の推進者として紹介した元老中筆頭、第一生命ビルの古賀藩土井利位系の利与は上洛して勤王を誓い一万五千両を献上、食料補給に努め、パークビルの高槻藩永井直諒は恭順の意を表わしただけで、戊辰戦争にはまったく関係なく終わっている。

この一方で、奥羽列藩同盟に加わって落城の悲運を味わった日比谷大名もあつた。帝国ホテルの阿部正静、正功父子である。阿部氏は慶応二年、福島県の棚倉十萬石に転じたが、四年には旧領の白河十萬石を併わされていた。両藩ははじめ勤王とも佐幕とも決めかねた。四年六月奥羽鎮撫隊が進むと、一旦は恭順を表明して白河城を政府軍に明け渡す。

ところが一転して戦火にまみえることになるのは、直後に仙台藩(伊達宗基)、米沢藩(松平茂憲)の要請を受けて遅ればせながら同盟軍に加わることにしたからだ。同盟軍は逆襲して白河城を奪い返す。

新政府軍も黙っていない。宇都宮から転じた薩長鳥取連合軍が白河に進み、その数千七百と大砲七門、一方の同盟軍も二千と大砲八門。この戦いは新政府軍が勝ち、敗走する同盟軍を追って市内に入る。戊辰戦争中での最激戦といわれた白河戦争に勝った新政府軍は、白河城に入城。このときの参謀が土佐の板垣退助である。

白河城攻防に敗れた同盟軍は棚倉城に退いて再度の決戦を期すが、再び政府軍の猛攻にあつて敗退。この戦いで棚倉城と市街は焦土と化し、阿部父子は敗走した。日比谷史はこうして一旦は幕を閉じるが、明治期新政府の軍都として新たな時代を迎える。

江戸図(幕末期)に見る日比谷住民の変遷(ぐんばい編集室調べ)

年号	地名	帝国ホテル	道路三井	三井劇場	パークツイン	電気ビル	第1生命	有楽町ビル
1850	嘉永3 万宝江戸図	阿部播摩	阿波土佐	牧野兵部	本多中務	永井遠江	土井大炊	松平右京
1851	" 4 江戸図	"	"	"	"	"	"	"
1852	" 5 切絵図	"	"	"	"	"	"	"
1853	" 6 再刻江戸図	"	"	"	"	"	"	"
1854	安政1 安政武鑑	"	"	備中	"	"	"	"
1855	" 2 松栄江戸図	能登	"	兵部	"	"	"	"
1856	" 3 江戸絵図	播摩	"	備後	"	"	"	"
1857	" 4 繁栄江戸図	能登	"	越中	"	"	"	"
1858	" 5 府郷江戸図	"	"	"	"	"	"	"
1859	" 6 分間大絵図	播摩	"	"	美濃	飛弾	"	"
1860	万延1 切絵図	"	"	"	"	"	"	"
1861	文久1 御府内沿革	"	"	"	有馬遠江	"	"	恭三郎
1862	" 2 江戸絵図	"	"	"	本多能登	遠江	"	右京
1863	" 3 舞鶴江戸図	"	"	備後	有馬日向	"	"	"
1864	元治1 切絵図	"	"	"	遠山信濃	"	"	"
1865	慶応1 曲輪内大名	"	"	越中	"	"	"	"
1866	" 2 武鑑	豊後	"	"	"	日向	"	"
1867	" 3 懐宝江戸図	"	"	"	永井肥前	飛弾	"	"

\*1阿部正功棚倉10万石 \*2松平土佐中屋敷20.2万石 \*3松平阿波下屋敷25.7万石 \*4牧野貞久笠間8万石 \*5本多忠民岡崎5万石 \*6永井直諒高槻3.6万石 \*7土井利興古賀8万石 \*8松平輝声高崎8.2万石 \*9有馬道純丸岡5万石 \*10遠山友禄苗木1万石 \*11永井尚販加納3.3万石(氏名は日比谷最後の住民 日比谷公園東端=幕府御用屋敷、焼鳥横町・ニュートーキョー=松平主殿忠和島原6万石は不変のため省略)

賜部記録にみる日比谷大名邸の規模  
阿部能登守(天明1-12)63~66×111間7,836坪、門扉8枚、障子568本、襖235本、畳1,498帖、戸1,198本、障子88丁、植木・庭石、  
牧野備後守(寛政2-7)70-60-85間5,076坪、門扉7枚、戸900本、襖234本、畳1,093帖、障子38丁、庭石、  
有馬左衛佐(文久2-7)60×166~77間4,129坪、門扉10枚、戸1,320本、障子671本、襖262本、畳1,650帖、障子73丁、植木・庭石、



慶応4年2月、有栖川宮徳仁親王率いる東征軍が錦旗をひるがえして京都を出発した

# デンカ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### ⑦ 明治元勳の町 軍都・日比谷



明治天皇（写真）と明治2年（1869）の日比谷

慶応四年（一八六八）、東征大総督の有栖川宮と西郷隆盛に率いられた新政府軍が無血開城した江戸城に入ったのは四月十一日のことであった。

徳川最後の将軍となった慶喜は、江戸総攻撃中止の条件となった一大名への降格を受け入れて謹慎したとはいえ、これに反発する幕臣は上野寛永寺にこもり、幕府びいきの江戸市民もまた露骨に新政府軍に不信を表わした。市内は不穏な空気に包まれるが、五月新政府軍の近代兵器が彰義隊を一蹴。そして旧幕臣の抵抗の総てが翌明治二年に終息する。

明治天皇がはじめて江戸行幸されたのは明治元年だが、翌年三月には京の都を江戸に移す。いわゆる東京遷都が発令される。

日比谷の明治の曙は、勝てば官軍、敗れば賊軍に象徴された戊辰戦争そのものでもあった。明治初期の東京図をみると、維新での活躍組と新政府軍の屯所がめだっている。国際ビルの一面は新政府軍の最前線を担った鳥取松平藩屯所となる。ここはやがて兵部省、陸軍省、東京鎮台と変遷し、軍都日比谷の中心に。

有楽町ビル、新有楽町ビル、朝日街は倒幕軍主力鹿兒島島津藩の屯所、第一生命は高知山内藩屯所であった。日比谷に軍隊を集結したのは江戸城から徳川將軍を追い出して、明治帝を迎えたとはいえ、いつ反薩長派が新宮城の奪還をはからなことも限らなかつたからである。

明治元勳の屋敷もめだっている。パークビルから三信ビルの一部には倒幕運動の陰の演出者といわれる岩倉具視邸があり、また明治天皇の外祖父・中山忠能、東征大総督・有栖川宮熾仁、後の総理大臣で早稲田大学創設者でもあった大隈重信邸などが並んでいた。

岩倉は中納言堀川康親の次男として生まれ、平公卿・岩倉具慶の養子となり、幕末期政治にうとい公卿のなかで徐々に頭角を表わした。一旦は公武合体のため和宮を強引に降嫁させた奸物として失脚するが、この間大久保利通、西郷隆盛、坂本竜馬らの参謀役として活躍。王政復古、新政府の設立、そして倒幕へ、岩倉の仕組んだシナリオが着々とすすむ。維新の大業があったときには、新政府の最高位に座していた。

東京図(明治はじめ)にみる日比谷の変遷(くばい編集室調べ)

年号	地図名	公園西端	公園中央	公園東端	帝国ホテル	道路・三井	三井・劇場	焼鳥・ニュー	パークツイン	電気ビル	第1生命	有楽町ビル	朝日街
1868	明治1 東京大地図	桑茶園	肥前鍋島	—	中津奥平	空地	仙台伊達	松平・有栖川	岩倉大納言	永井飛彈	高知屯所	兵隊屯所	兵隊屯所
1869	" 2 官版東京図	元長州	"	御用屋敷	清水	仙台伊達	"	島原松平	"	"	兵營	大河内	山内薫
"	" " 東京大絵図	"	"	"	"	"	"	"	"	"	仁和寺宮	"	元裁判所
"	" " 切絵図	"	"	"	"	預り	"	"	"	"	中御門宮	"	執次巳
1870	" 3 東京区分図	"	"	御用地	—	—	"	"	"	"	高知屯所	鹿兒島屯	鹿兒島屯
"	" " 東京御絵図	桑茶園	鍋島上地	—	—	—	"	"	"	—	—	—	—
1871	" 4 東京大絵図	陸軍操練	陸軍操練	陸軍操練	—	仙台伊達	"	"	徳島蜂須賀	万里小路	御用邸	御用邸	—
"	" " 東京御絵図	"	"	"	中津奥平	"	"	"	"	"	"	"	御用地
"	" " 永福東京図	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
1872	" 5 東京御絵図	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
"	" " 永福東京図	"	"	"	"	"	"	有栖川	"	永井・万里	"	兵隊屯所	"
1873	" 6 東京全図	"	"	"	—	大隈重信	大隈重信	松平忠和	中山忠能	万里小路	教導団兵	教導団兵	田中光儀
1875	" 8 小区分絵図	"	"	"	博覧会	—	—	—	—	"	—	—	—
"	" " 大小区分図	"	"	"	"	神風講社	神宮・神道	"	"	博房	—	—	・・・・・



岩倉具視



有栖川熾仁親王



大隈重信

中山をはじめわずか二百石の堂上公卿であったが、娘慶子が孝明天皇につかえて明治天皇の生母となったことで幕末の尊王公卿として、一躍脚光を浴びることになる。明治帝は五才までこの中山家で育てられ、即位後も 天皇の祖父として絶大な権勢を振るった。幕末動乱期、討幕密勅の御璽(へし)を得て、徳川討伐の火蓋を切らせたのもこの人であった。新政府では議定や神祇伯をつとめ、のち大正天皇の養育係に。大正天皇もまた、この日比谷で幼児期を送っている。

有栖川宮は四親王家のひとりだが、公武合体のため十四代將軍家茂の許に降嫁された和宮の元婚約者として有名である。慶応三年十月、大政奉還により王政復古が発せられると新政府総裁職に就任。四年、東征大総督の位についた。初窓の人和宮の住む江戸をめざす有栖川宮の胸中はいかがなものだったろうか。

明治二年六月、藩籍奉還が行なわれた。旧藩主が藩知事となり、公卿とともに華族の称号が与えられ、八月からは華族の東京在住が命ぜられていた。旧大名はともかく、千年来京都を離れたことのない公卿の東京転動は大変なショックで

あったという。このときの華族は旧大名二百八十家、旧公卿四百五十家であった。日比谷にも宮家や公卿が続々と移住してくる。仁和寺宮、中御門宮、九條、万里小路、徳大寺、西園寺、坊城らである。

こうした新政府の躍進グループの陰で、ひっそりと日比谷に息をひそめなければならなかった徳川一門や佐幕派もあった。帝国ホテルの徳川清水は御三卿のひとつ。昭武は十五代將軍慶喜の実弟でパリ万博の日本館館長として海外で明治維新を迎える。三井ビルの伊達宗基は父慶邦が奥羽列藩同盟の盟主となって敗れたため、三分の一の二十八万石に減封された。日比谷邸も広大な旧藩邸とは比すべくもなかった。

別表の日比谷変遷のなかに、公園西端が桑茶園になっているのに驚かれる方があるかもしれない。ここは長州藩邸跡だが、元治元年、長州征伐に先だって焼き打ちされ、その後放置されていた。当時、皇居周辺の旧武家地は大名が国元へ引きあげたうえ、旗本も四散し、広大な屋敷や跡地が空地として放置されていたので、この活用は新政府の大きな課題に

なっていた。

そのひとつがさびれた武家地を整頓して、桑茶を栽培しようというもので、この政策の推進で明治六年には皇居周辺に百万坪の桑茶畑が誕生した。しかし、桑茶の輸出が軌道にのらなかったうえ、枯死が多く東京を首都として発展させていくうえで、この田園化は時代に逆行しているという批判も高まって、のちに中止される。

幕末日比谷の象徴は南町奉行所であったが、この奉行所は慶応四年五月、南町裁判所と改称され、明治元年七月、現在の第一勧銀内幸町ビルの一面に作られた東京府庁に移っている。東京府庁といえれば日比谷で生まれた樋口一葉に触れないわけにはいかない。父が役人として東京府庁に就職、この庁内の長屋で一葉は生まれ、父の退職した明治五年十月日比谷を去った。生後五か月のことであった。

明治四年の廢藩置縣は日比谷から旧幕時代の大名を徐々に閉めだした。そして翌年四月には有楽町の町名が生まれる。八年の東京府志料は有楽町一丁目(国際・有楽町ビル)華族二戸、士族八戸、卒七戸、平民四戸からなり、人口九十二名、寄留三百五十八名。都庁と朝日街の二丁目士族一戸、平民八十二戸。三井、三信周辺の三丁目は華族一戸、士族五戸、平民十戸、人口七十二名。寄留百三十人。馬車一両、人力車一両、馬六匹と記録している。

# デニカ ア

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### ⑧ 国会と鹿鳴館と 神道の町



当時の●日比谷大神宮●鹿鳴館●帝国議事堂●帝国ホテルと明治16年の日比谷周辺

明治はじめの日比谷は新帝を守る政府軍屯所や元勳たちで占められたことを前回ご紹介したが、明治中期の日比谷は帝国議事堂や鹿鳴館、東京鎮台、陸軍練兵場、東京府庁に代表される政治の中心地であり、神道界の中枢の地でもあった。

維新後、わが国は太政官政府の誕生で曲がりなりにも近代国家へのスタートを切ったとはいえ、内外に多くの難問を抱えていた。明治九年（一八七六）、明治天皇は憲法の制定を表明して反政府運動に歯止めをかけるが、国会開催を求める自由民権の嵐はその後も吹き荒れる。

二十二年にはわが国初の明治憲法が發布され、翌二十三年には第一回総選挙が行なわれた。とはいえ、当時の有権者は十五円以上の税金を納めた男性。一%の金持ちが選んだ新議員三百五十人が第一回の帝国議会にのぞんだのであった。その檜舞台であるわが国最初の帝国議事堂は日比谷公園南側の通産省の一面に建設されたが、初代議事堂の運命は実にあっけなかった。第一回議会召集日直前に完成したが、その会期なかば、竣工二か

月で焼失。そして突貫工事の末、同じ場所には完成する二代目も、大正十二年の関東大震災で焼失するのである。

新政府の最重要課題は幕政時代に締結された不公平な神奈川条約の改正にあった。政府はこの交渉には、わが国の近代化が先決だとして、積極的な欧化主義をすすめることになる。明治十六年には大和生命ビルの一面にレンガ二階建てルネッサンス形式の豪華な官設社交場鹿鳴館が誕生する。当時の外務大臣井上馨が、外国大使との折衝の場に使用おうとしたのである。政府高官が、ぎこちない洋装に身を固めた夫人や令嬢をとまなびて鹿鳴館に集まったが、度のすぎた連夜の饗宴は世の批判を浴び、六年後の二十三年に華族会館に変わっている。

欧化主義といえは二十二年に三信、三井ビルの一部とその前の日比谷通りに建設された東京ホテルと帝国ホテルにふれないわけにはいかない。東京ホテルは鹿鳴館などを訪ずれる外国人客をみこんで横浜の回船問屋鹿島屋II小宮政次郎が建設したもので、二十二年にはフィリピン



# デンカ アソ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### ⑨近代産業と庶民の町



地目	所有者	坪数	地価(円)
宅地	三菱合資会社	6,334	66,695
	"	6,276	66,090
	"	489	5,411
	内務省用地	2,432	—
	中山孝麿	948	14,460
	"	799	12,187
	"	8	127
	"	10	155
	"	1,115	14,754
	"	129	1,705
	青木友子	505	5,900
	"	58	883
	桜井小太郎	960	14,647
	清樓家教	684	12,237
"	146	2,233	
宅地	三菱合資会社	1,004	11,651
	"	1,121	13,018
	渡辺保全合名	887	23,958
	"	1,345	36,308
東京市	348	4,035	
宅地	清水栄蔵	1,615	16,412
	"	1,538	19,105
	"	356	3,617
	三井合名会社	3,265	37,020
	神宮奉斎会	1,600	18,144
	清水栄蔵	321	3,635
	神宮奉斎会	699	7,922
	東京電燈会社	990	11,227
	東京市	988	12,199
	愛国生命保険	702	7,959
	東京信託会社	345	3,917
	三井合名会社	100	1,134
	清水栄蔵	28	343

明治45年の麹町区地籍図(右)と大正1年の地籍台帖の一部

明治二十一年(一八八八)八月、勅名をもって公布された東京市区改正条例は日比谷の町を一変させた。明治十年代、日比谷から丸の内にかけては陸軍省用地が集中していたが、自由民権運動が下火になると、皇居周辺の警備もさして重要でなくなる一方、軍事大國をめざす当時の陸軍本拠としては手狭となっていた。

この市区改正は陸軍省を牛込、赤坂方面に一大用地を買収して転出させ、跡地を商業街として発展させることと、日比谷地区の区画整理を盛り込んだものであった。陸軍省の移転費用は日比谷、丸の内地区十萬坪の軍用地払い下げでまかなうこととしたが、二十三年からはじまった経済恐慌で難航、結局、三菱の岩崎弥之助が買収する。日比谷第一生命ビルから東京駅までの一面である。

三菱はここをしばらく使用しないで放置したので、やがて日比谷が原、三菱が原と呼ばれ、追いはぎや殺人事件が相つぐ荒地になっていたが、二十七年にイギリス人技師コンドル設計になるレンガ造り三菱一号館が完成、三菱グループの中核としてよみがえる。以来着々と完成し

た丸の内、日比谷オフィス街は、一丁ロンドンと呼ばれて衆目を集めた。

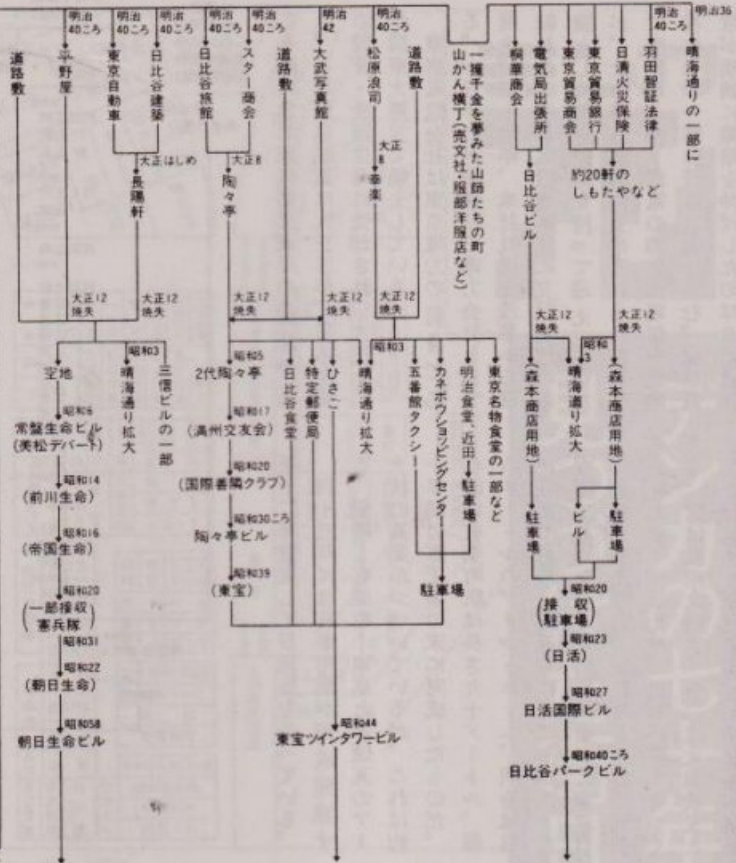
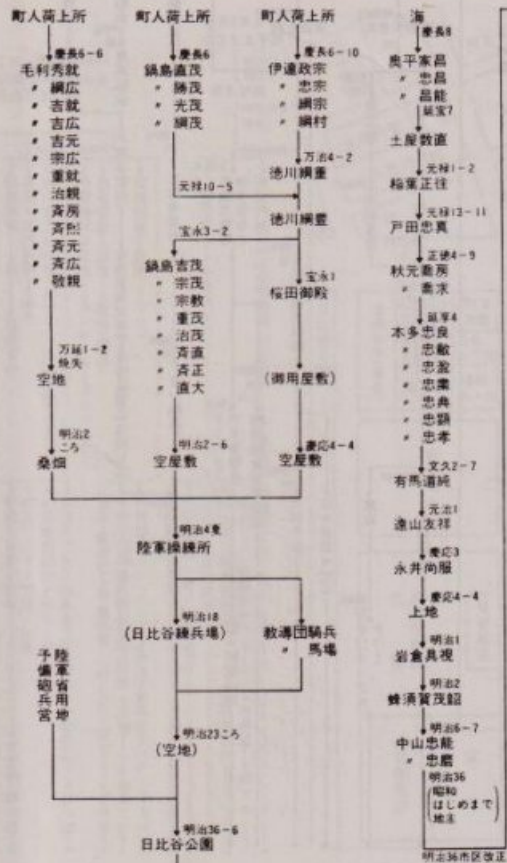
日比谷交差点周辺は、日比谷御門はすでに撤去されていたとはいえ、町並みは旧幕時代そのまま、南は日本生命、宝塚の濠池でさえぎられたうえ、道路も曲りくねっていた。市区改正の公布後も整理は遅々として進まなかったが、三十二年計画道路の中心にあった日本倶楽部が焼失したことでようやく着手された。三十六年には中山大納言邸が二分されて日比谷交差点が作られ、日比谷―数寄屋橋―銀座を結ぶ晴海通りと、日比谷と内幸町を結ぶ日比谷通りも日比谷濠の一部を埋立てるといふ大工事を経て完成する。この日比谷地区区画整理予算は十一万四千円。うち二万七千円が濠池埋立費と記録されている。

同じ三十六年、日比谷練兵場跡に西歐様式を取り入れた日比谷公園が開園している。日比谷公園といえは、直後の三十八年に行なわれた日露講和条約反対国民大会が忘れられない。日露戦争の勝利は一部特権階級に莫大な利益をもたらせたが、一般市民は戦場へかり出されたり、



日比谷公園の変遷

ツインタワー・パークビル周辺の変遷

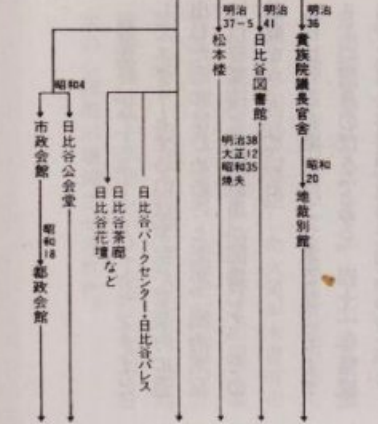


地番	有楽町一丁目	二丁目	三丁目
1-1	1-1	1-1	1-1
1-2	1-2	1-2	1-2
2-1	2-1	2-1	2-1
2-2	2-2	2-2	2-2
2-3	2-3	2-3	2-3
2-4	2-4	2-4	2-4
2-5	2-5	2-5	2-5
2-6	2-6	2-6	2-6
2-7	2-7	2-7	2-7
2-8	2-8	2-8	2-8
3-1	3-1	3-1	3-1
3-2	3-2	3-2	3-2
3-3	3-3	3-3	3-3
3-4	3-4	3-4	3-4
3-5	3-5	3-5	3-5
3-6	3-6	3-6	3-6
3-7	3-7	3-7	3-7
3-8	3-8	3-8	3-8
4	4	4	4

特別税やインフレに悩まされていた。講和条約は戦勝国としての権利を大幅に譲歩したものであるとして、市民の怒りが爆発。日比谷公園に三万人の群衆が集まり、帝国ホテルの一角にあった内務大臣官舎を焼き打ちするなど大暴動に発展している。日比谷公園ではこの後、国葬や戦勝大会などの国家行事が繰り返されたが、日本が軍国化していくさまを見守るのである。

市区改正は日比谷を経済の中心地として生まれ変えさせる。埋め立て地には三十六年東京市街鉄道会社、東京電燈会社が入り、すでに二十七年からは三井集会所があった。

三井集会所は当社本社のある三信・三井ビルの前身で、ここで当社の設立総会が開かれたことをはじめに紹介した。日比谷大神宮の一部を三井家が入手し、三十七年に本館を完成させた。木造入母屋造り平屋の純日本風で大名屋敷を模している。大広間二、舞踊席、演芸室のほか、庭園には国内珍種の大石を集め、洋館は木造入母屋スレートぶき平屋。後に

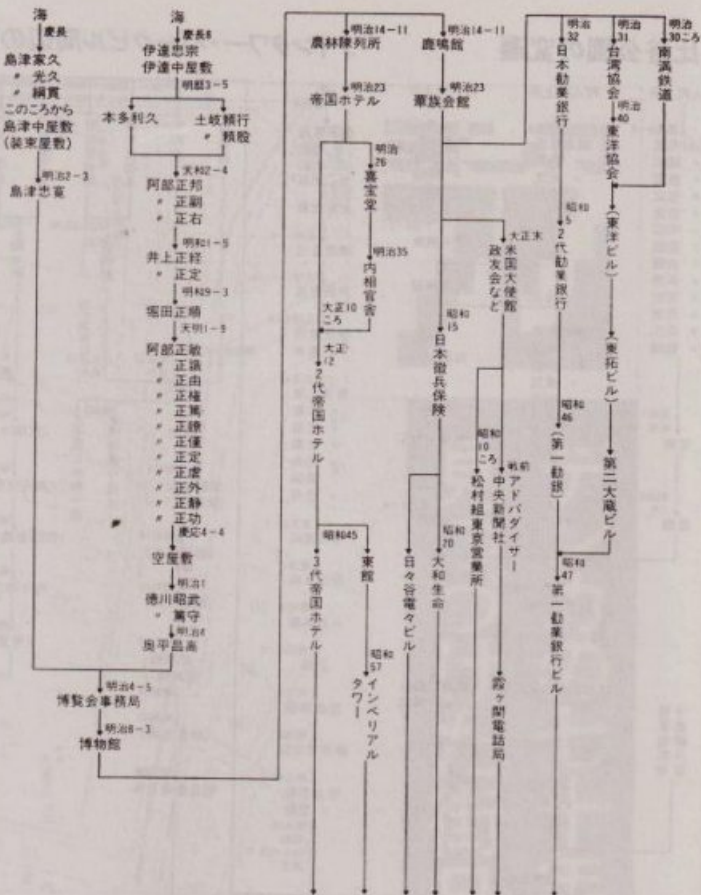


二階建てに建替えられた。当時の「風俗面報」によると「同家に関する秘密会議が開かれるところなり。またあるときは同家に従事する諸役員をはじめ、各商店員一同を集め遊戯運動をなすことあり。故に同所内には玉突場、自転車、大弓など種々なる器具を設置する」とある。

このように三井集会所はグループのクラブとして使われ、三十一年には総理大臣の伊藤博文も得意のステッキをつきながら来所している。三十三年、この集会所に三井各家が集まり、三井家憲を制定する。この家憲は三井創業の主高利の長男高平が享保七年に子孫に残した遺書を二百年ぶりにまとめ直したもので、グループ発展の礎となった。集会所は関東大震災は免れるが、昭和三年の市街再編で取り壊される運命にあった。

東京市街鉄道会社は初期の市電会社である。明治五年、新橋―横浜間にわが国最初の蒸気機関車が走ったが、東京市内の鉄道建設は遅く、当初は馬車鉄道というレールに乗った客車を馬に引っぱらせていた。日比谷の埋め立て地に東京市街鉄道が設立された三十六年、この馬車レールに東京電車鉄道がわが国最初の電車を走らせ、一足遅れて有楽町―神田橋間に市街鉄道が二番目の電車を開通した。三十九年には市電三社が合併して東京鉄道会社となるが、夏目漱石は東京に戻った「坊ちゃん」をこの市街鉄道に入社させている。後に現在の交通会館のと

# 帝国ホテル周辺の変遷



ころにできた東京都交通局の前身である。この東京鉄道は大正五年、日本生命の前身・愛国生命に売却され、大正十二年関東大震災で焼失している。

東京電燈会社は東京電力の前身である。十五年わが国最初の電力会社として誕生。三十六年、本社社屋を浅草から移転した。当初電燈は市民に文明開化の象徴として驚きの目を持って迎えられたが、その後も順調に受け入れられたわけではなかった。漏電の怖さは電気を危険視させ、一時は苦難の道を歩む。東京電燈が順調に業績を伸ばしたのはこの日比谷に本社を置いた二十年間であった。大

正十二年被災して日比谷を去っている。四十三年には有楽町駅が完成、業すち状の高架がつづいているが、これは約十年間の難工事の末に完成したものだ。当時の有楽町駅は長さ九十メートル、幅八メートルのプラットホーム、駅舎は日比谷口にあり、駅近くにはそばがあった程度であったが、駅前にはやがて東京日々新聞、読売報知、朝日などの各新聞社が軒を並べ、日比谷の新しい時代をつくる。駅は関東大震災、第二次大戦被災と大きな試練を受けるが、その後も日比谷とともに発展して今日におよんでいる。

日比谷がアミューズメントセンターとしてスタートするのは東宝が有楽町に進出した昭和はじめのことだが、明治末期には有楽座と帝国劇場が開場して、その基盤をきずいている。

日比谷の有楽座は二つあるが、ピカデリーの前身のほうである。四十一年落成当時は旧公書研究所の一面にあった。ドイツ風の洋館木造建築で、わが国最初の洋風劇場として知られている。坪内逍遙の文芸協会、小山内薫の自由劇場、島村抱月、松井須磨子の芸術座などが旗あげ公演し、新劇の発祥地である。

帝国劇場は四十四年の開場である。放送中のNHK大河ドラマ、春の波濤、では川上音二郎、川上貞奴のラブロマンと奇想天外な人生が描かれているが、貞奴は音二郎没後、福沢百介との初恋を交らせる。百介のバックアップを受けた貞奴は四十一年帝国女優養成所を設立、百介も帝国劇場を建設する。帝国劇場は大正時代、今日は三越、明日は帝劇、ともてはやされるが、関東大震災で焼失。現在の帝劇は三代目になる。

明治後期の日比谷は社会主義運動の源流としても名をはせる。三十六年万朝報を退社した幸徳秋水と堺利彦が有楽町マリオンの裏の朝日街に平民社を設立して、平民新聞を発行。平民社は公然と政府を批判して反戦論を展開し、三十九年には日本社会党を結成するが、政府は赤旗事件、大逆事件として、秋水以下幹部

を刑死させた。冬の時代をくりくり抜けた社会主義運動は、やがて日比谷の売文社に集まり、大正デモクラシーのうねりながら新たな活動を展開する。

売文社があったパークビルの一面は当時、山かん横丁と呼ばれていた。体制への不満や不景気を嘆きながらひと山あてようという人たちが集まったことからこの名がついた。二階建てのしもたやが二十くらい軒を並べたこの横丁に、早稲田大学を除籍された青成飄吉が入りした。尾崎士郎の半自叙伝、人生劇場、愛欲編の舞台である。

この山かん横丁の隣り第一生命ビルの一面には四十四年、赤煉瓦三階建の警視庁が建った。新有楽町ビルのあたりまで警視總監やおまわりさんの官舎となる。日比谷周辺にはサーベルをぶらさげたひげの巡査やピカピカの軍靴を光らせた騎上隊で満ち溢れるが、これも関東大震災で焼失して、桜田門前の現在地に移転する。明治末期から大正期にかけての日比谷はこのように独自の展開を示すが、大正十二年九月、関東地方を襲った大地震は日比谷一帯を灰埃と化するのである。



創業当時の有楽町駅



当時の帝国劇場

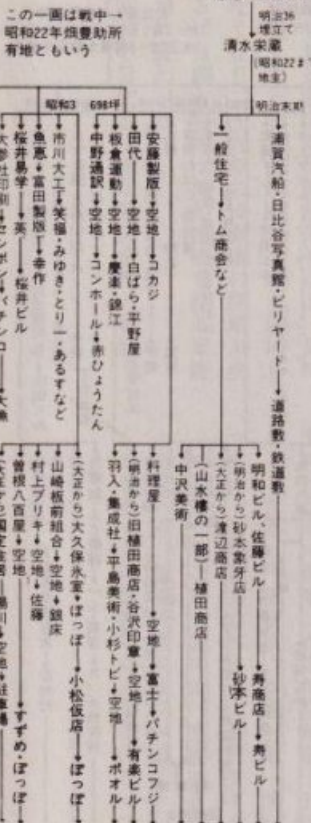
# デンカビル

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### 10 関東大震災と 戦前の日比谷



戦前（昭和15年ごろ）の日比谷周辺



この一画は戦中一昭和22年爆撃助所有地ともいう

大正七年（一九一八）十一月、ドイツ降伏によって第一次世界大戦が終わる。翌年のベルサイユ会議で日本は中国の諸利益と南洋諸島の委任統治権を得、イギリス、アメリカ、フランス、イタリアと並んで五大列強の仲間入りを果たす。この間海運界、重工業を中心に軍需景気が盛り上がり、経済界は一大発展をとげるが、一方、米騒動に見られるように、大衆は物資の欠乏、インフレに悩まされていた。

明治末期から大正にかけて、日比谷は政治と経済の中心地として繁栄したことを前号で紹介したが、十二年九月一日、関東地方を襲った大地震は日比谷の街を廃虚と化す。この日午前十一時五十八分、首都圏一帯はマグニチュード七・九の激震に揺れたが、この大地震は家屋倒壊に加えて、同時に発生した火災が未曾有の大惨事を引き起こす。東京府下の罹災者百三十二万人。全焼、全壊家屋三十一万戸、死者・行方不明者九万七千人。明治維新後、五十年間かかって築いた近代日本

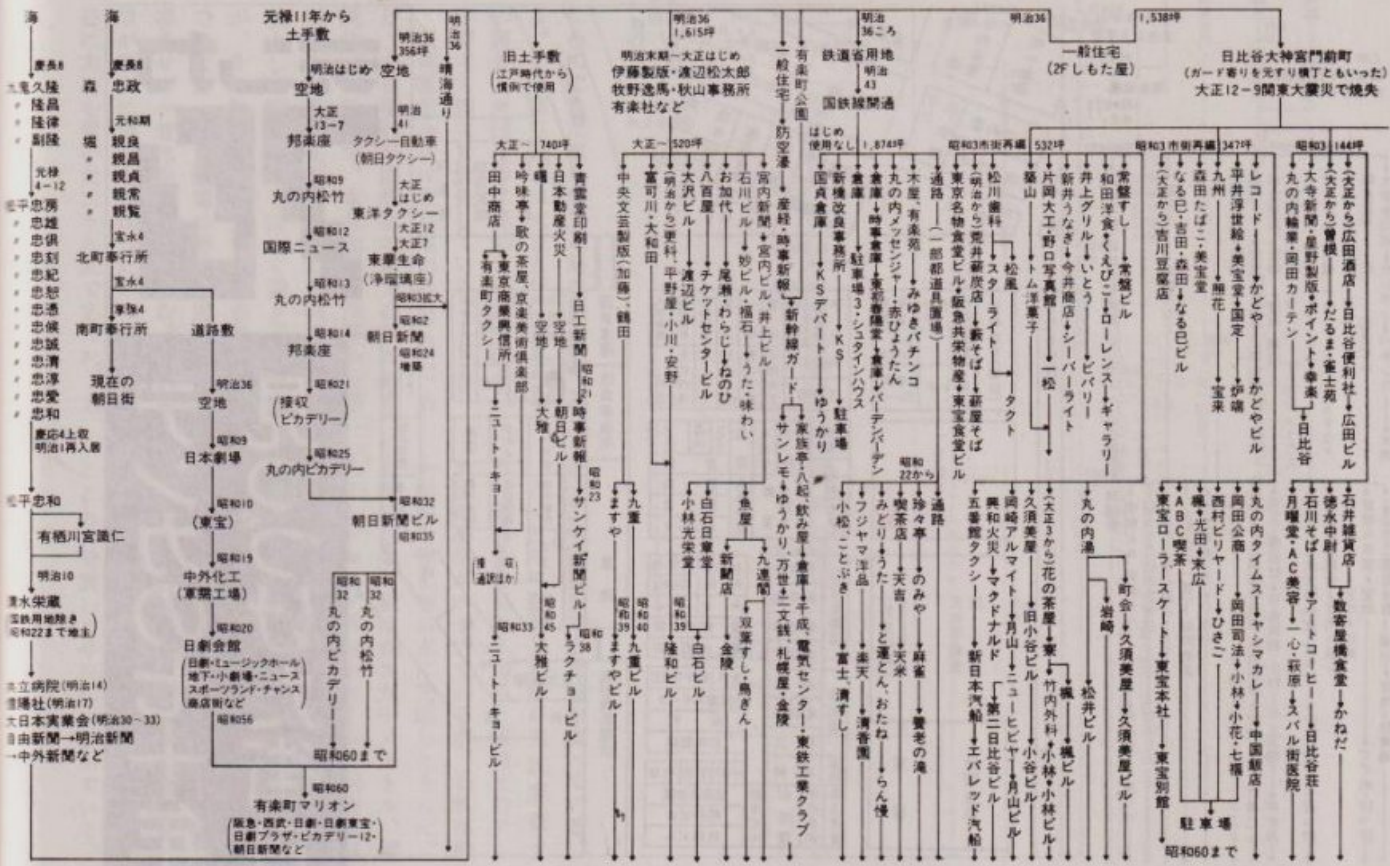
の本の心臓部が壊滅させられた。

この日の日比谷の惨状。十二時三分、電気ビルにあった一色活版所と朝日生命ビルの長養館付近、日比谷公園松本楼、さらに二分後、宝塚の東京電燈会社から出火。電気ビルの火は山かん横丁、消防本部、警視庁、帝劇、有楽町駅、朝日街、現マリオンへと延焼。一方の東電側はガード一帯を焼いて日比谷大神宮、山水楼、大松閣へ。朝日生命の火も幸楽、平野屋、大武写真館、陶々亭へ延びる。この幸楽は後に二・二六事件の舞台となった赤坂幸楽の前身である。

羅災図をみると、新築落成式当日地震にみまわれた二代目帝国ホテル、当社本社のある三信・三井ビルの前身三井集会所、東京日々新聞、報知新聞、市交通局の五建物を除く、すべての日比谷が焼野原と化している。

関東大震災全史によると、ぼうぼうとして満目荒涼たる一面の広野。石のかけらとれんがの壊れとあめのようになった鉄とろろ高い灰と死体、がつづき、日比谷交差点は、無数の自動車が疾駆して、その間をたずね人を立てたシャツ一枚、

# マリオン・ニュートン・キョー・ガード周辺の変遷



やぶれゆかた一枚の通行人が左右に逃げまどろ。いままでならばしゃれた流行の装いをこらした紳士淑女が遊楽の巷へと急ぐこの日比谷街頭には焼け跡の褐緑色の灰のうえにおかゆと冷水の接待があった。三井集会所や帝国ホテルなどによる救済活動の模様も伝えている。

日比谷周辺の罹災者は自然に宮城前と日比谷公園に集まった。彼らは焼け跡や川などから板切れや鉄板を拾い、これらを組み合わせバラックを建てる。炭焼き小屋にもおとるこのバラック街が全東京にひろがっていった。

帝都復興の先鞭を切ったのはこの日比谷公園であった。公園内には露店のすいとん屋、おでん屋、牛めし屋が生まれ、これが繁盛すると荒物屋、雑貨屋、炭屋、みそ・醤油屋などが並び出した。見物にゾロゾロ出かける者が右往左往して、その混雑はいうばかりもない。と資料にある。人々は足を空にして復興を急いだ。

この大災害にこりた東京市は再び区画整理を実施。三信ビル周辺も大きく様変わりを果たす。昭和三年、晴海通りが拡幅され、昭和四年、新市街が生まれ、翌年には有楽町三丁目が一丁目編入される。日比谷大神宮、警視庁、帝国議事堂、三井集会所など明治の日比谷を伝える建造物もこのとき姿を消している。

三信ビルもこの昭和五年に生まれた。

三信の名は当時の所有者三井信託社から生まれた。豪華なシャンデリアがさがる立派なビルだったが、戦争が激しくなるに供出されてゼロ戦や弾丸に変わった。隣りの朝日生命館の初代ビルも同じ昭和五年の誕生である。外壁に彫刻を施した、当時の代表的建造物。ここは戦前食堂ビル的美松デパートが入り、日比谷名物のひとつとなる。

日比谷が新聞街になるのは明治三十九年、前島密、大隈重信が創刊した報知新聞がそごうに入ってからで、明治、大正期の報知は東京最大紙として言論界に君臨していた。大正十一年、創刊五十周年を記念して新社屋を建設、昭和十七年、読売新聞と合併して読売報知となるが、二十年から二十二年まではさらに読売新聞と変わりここに本社を置いた。

明治三十六年には電報社が電気ビルに、四十二年日報社が新有楽町ビルの一画に居を構えるが、四十四年には大毎、毎日電報、東日が合併、毎日新聞の前身東京日々新聞を発行している。大正五年、木造二階建ての社屋を焼失して翌年鉄筋コンクリート三階を新築、さらに昭和十三年には新館を増やしてこの六一八階にプラネタリウムを作った。

昭和二年、現有有楽町マリオンの一画にあった日華生命跡に朝日新聞が進出、モダンな建物と最新鋭の印刷機が話題を呼んだ。そしてラクチョービルにあった日本新聞は二十二年、かつての三大紙時事

新報に変わり、二十三年からサンケイ新聞となった。こうして朝毎読サンケイの一般四紙が日比谷に勢揃い。ブンヤ専用のハイヤーやインクの匂いが満ち溢れ、送稿用伝書鳩が舞った。

そしてもうひとつの顔、アミューズメントセンターとして発展をとげるのは昭和九年以降のことである。この年、大阪の宝塚劇場開設で大成功をおさめた小林一三が東京での常設劇場開設を決め、東京電燈跡地に東京宝塚劇場を建設した。

つづいて日比谷大神宮拝殿跡地に日比谷劇場を完成させ、十年には有楽座も開場する。さらに日本劇場、帝国劇場を傘下におさめ、一挙に東宝一大劇場街を誕生させたのである。

洋画専門館としてスタートした日比谷劇場は当時珍しかった丸型ドームで、五十銭の均一料理に。有楽座は人気絶頂のエノケンやロッパが舞台から笑いをふりまいた。日劇はダンシングチームを作り、映画とショーのパターンを生む。十六年には李香蘭公演に大群衆が殺到、乱闘の末ケガ人も。現参院議員の大鷹(山口)淑子の若き日の一コマである。

相づく新劇場の建設は十年代前期の日比谷を娯楽街として発展させるが、戦時色が濃くなると外国映画の上映も認められなくなり、十九年には劇場の閉鎖が決まる。日劇と宝塚は風船爆弾を作る軍需工場に変わった。

昭和の日比谷はまた電気町の町でもあつ

た。東京都電気局、電気研究所、電気博物館、都電変電所、電気協会、電気倶楽部があったからである。交通会館にあった市電気局は明治四十四年、宝塚劇場にあった東京市街鉄道を東京市が買収したとき建設された。昭和十八年都交通局となり、疎開のため一時日比谷を離れている。旧公害研究所にあった電気研究所は大正十四年十月の竣工。電気についての研究や試験業務を担当して電気博物館、電気図書館を併設した。

日本電気協会は、電気の父、といわれる藤岡市助が普及啓蒙を目的に明治二十五年に設立したもので、はじめ電燈協会といった。大正三年から東京電燈社内に入り、六年九月から電気ビルに移った。電気倶楽部は電気協会の協力団体。十二年二月、正式発足して日本倶楽部を買収したが、関東大震災で焼け、昭和はじめに、それぞれ独立したビルを作り直した。

電気ビルといえば明治四十一年から昭和四十七年まで市電気局の変電所があり、この一面にあった有楽稲荷は現在も電気ビル前に鎮座している。

タクシースの前身、辻待ち自動車、が東京にはじめて開業したのは明治四十五年のことだが、そのタクシース会社第一号はマリオンの銀座寄りにあった朝日タクシースである。ここは大正中期、東洋タクシースと変わり、関東大震災後反対側のニュートーカーに有楽町タクシースが入って

いる。その後日比谷・五番街・丸の内タクシースと、つぎつぎにタクシース会社が誕生する。明治四十五年、東京市内に百二十八台しかなかったタクシースは、大正十五年には三千四百七十三台と増え、やがて昭和円タク時代の到来を迎えたのである。

有楽町タクシースは昭和十年ころ、東京商業興信所とともにニュートーカーに引き継がれる。十二年六月に開設するニュートーカーは白亜の木造五階建てで、創業当時一階がエビスビヤホール、二階和食堂、三階すきやき、四階喫茶室、屋上五階ピヤテラス、地下ドイツビヤホールとなっている。十八年、戦時色が強まると閉鎖され、戦後は長らく進駐軍に接収された。

アミューズメントセンターとしてよみがえった日比谷を娯楽街として発展させたのは、このニュートーカーをはじめとする周辺の飲食街であった。いまはなき日比谷劇場からガードにかけての一面はこれまで、元すり横丁、と呼ばれていた。ここは明治後期から二階建てもたやのつづく一般住宅地だったが、関東大震災後は日比谷大神宮もなくなってさびれ空地が目立っていた。やがて商業の町となるが、当初はなにをやってもあたりなかつたので、元すり、の名がついたという。昭和のはじめ、ここの町内会が不景気をやぶろうと丸の内音頭を作り、日比谷公園で踊りまくった。その替え歌

が東京音頭になる。

関東大震災(大正12年9月)の罹災図



が東京音頭になる。

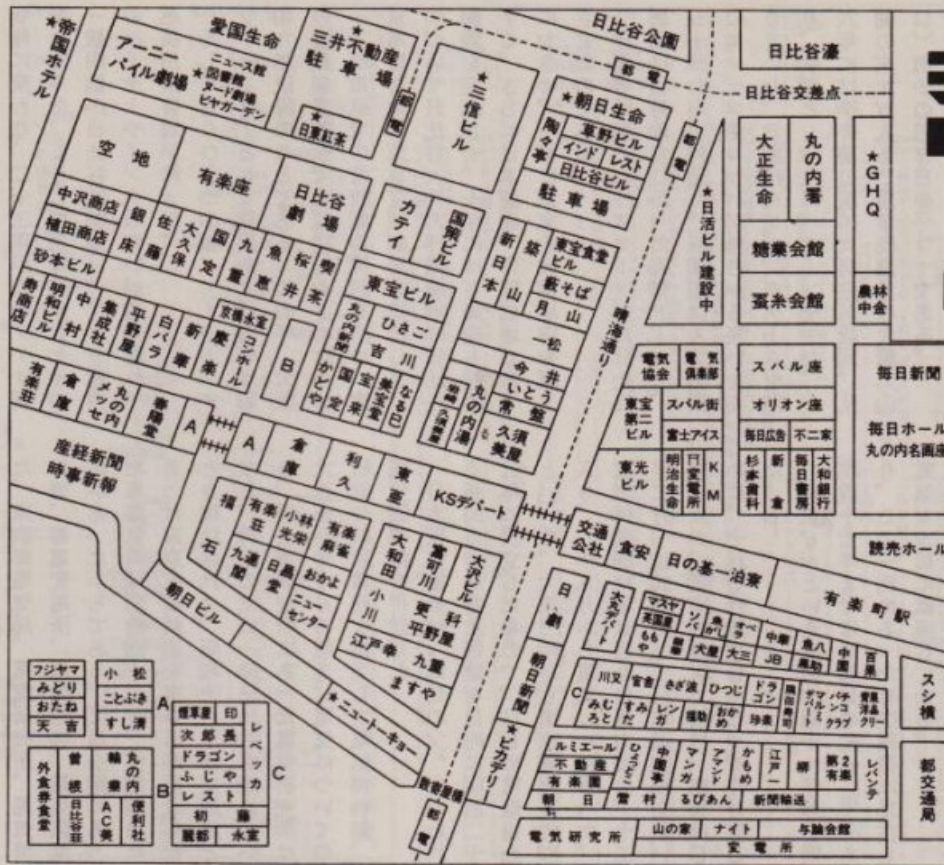
東宝進出後、この一面は飲食街として繁栄している。戦後国際ビルに移った山水楼をはじめ、大松閣、陶々亭、東京名物食堂ビル、国定、水明館、そして現在も隆和ビルの一面に残る更科などであった。

昭和十一年の二・二六事件を契機に日本はますます軍事色を強め、戦争の泥沼へと踏み出す。翌十二年、上海事変から日中戦争へ。そして十六年には日米開戦、第二次世界大戦へと突入するのである。日比谷も、帝都防衛の名のもとに軍需工場が生まれ、強制疎開が強行される。娯楽街からはネオンが消え、この地からも多くの出征兵士を送り出すのである。

# デンカ

## デンカの七十年を 見つけた街日比谷

### 11 進駐軍と闇市の町、 日比谷



昭和25年ごろの日比谷（★印は進駐軍の接収）

昭和十六年太平洋戦争に突入。当初は南北に戦線を拡大し、連戦連勝のニュースに国民は酔いしれるが、十七年のミッドウェイ大海戦の大敗を契機に劣勢に転じ、ガダルカナル、アッツ島と相つづぐ敗戦に戦況は早くも敗色を濃くする。

十八年十月、学生・生徒の徴兵猶予特権が廃止となり、三万人の大学生が学徒動員される。神宮球場での雨中の壮行会には、国定佐藤 清、有楽町ビルミツシエル中田谷義一らの姿があった。成人男子は戦場や軍需産業にかり出され、銃後は国防婦人会が守った。食料や衣料品が統制され、宝石や金銀の供出がはじまる。レストランも雑炊食堂に変わり、十九年六月には泰明国民学校の日比谷っ子が埼玉県の大里郡に集団疎開している。

東京空襲が激しくなる。二十年一月二十七日には、三信ビル横、日比谷劇場裏、日劇横、ニュートーキョー裏、電気倶楽部周辺、山水楼、帝国ホテル裏、ガイドが被爆、有楽町駅中央口では出札を待って行列していた人たちが百人以上と、職員九人が爆死した。遺体は朝日と毎日

の新聞輸送トラックに乗せて運ばれ、日比谷公園の花壇のわきに安置された。

戦況はますます悪化する。すでに日本軍は首都圏の制空権を失ない、米軍機は東京上空にたれ込んだ。延べ百二十一日間に五千機のB29から四十万発の爆弾と焼夷弾が投下され、死者十萬、負傷者七万人、七十六万戸が焼失、破壊した。強制疎開が実施される。日比谷では慶楽一帯、隆和ビル一画、朝日街の一部、都交通局などが取り壊された。残る重要建造物を守るための自衛手段であった。

六月軍部は、あくまで戦争を完遂、もって国体を護持する、として本土決戦を決めるが、竹槍と精神力にたよる実体的ないものであった。八月六日広島、九日長崎に原子爆弾が投下されるにおよんで、ついにポツダム宣言の受諾を決意、八月十五日終戦。三十日、連合軍総司令官マッカーサー元師が厚木に降り立ち、七年間にわたる占領政策がはじまるが、その舞台として日比谷が脚光を浴びる。

九月八日、マッカーサーは第一生命ビ

ルを総司令部（GHQ）に指定した後、焼け残った日比谷周辺のビルをつぎつぎと接收した。朝日生命ビルには憲兵隊が入り、三信ビルに通信隊、ニュートーキョーは翻訳通訳隊と米兵専用ビヤホールに。市政会館は新聞検閲部、帝国ホテルに宿泊施設、日東紅茶は図書館に、そして三井ビル用地、パークビルの広場も駐車場として調達された。日比谷公園の一部には野球場も。宝塚も接收されて米軍専用劇場アーニーマイルと改名される。アーニーマイルは硫黄島で戦死したジャーナリストの名である。

こうして日比谷は一挙に米兵の街と変わった。専用のクラブやキャバレーが生まれ、女たちが米兵にむらがあった。らく町お時をはじめとした彼女たちは空襲で家族にはぐれたり、生活に困窮して転落した子女たちだ。トラブルも続発する。黒人兵と白人兵の喧嘩にまき込まれ、米兵にからまれて数寄屋橋から神田川に投げ込まれたサラリーマンや女性も。この辺り一帯はいかめしい肩章をつけ、拳銃をさげた白いヘルメットのMPや、一般兵で満ち溢れた。

東京の大半は焦土のうえ、男女四百五十万人といわれた失業者に復員軍人と大陸からの引揚者が加わって、住居と食と職を求めてさまよう。焼け残ったビルや地下道をめぐらに、浮浪児は靴みがきやかっぱらいで食料を得、売春に走る少女も。

終戦直後のターミナル駅周辺は闇市街として発達するが、有楽町駅前も、新宿、新橋とならぶ三大闇市のひとつに数えられた。現在の交通会館から朝日街にかけての一面と晴海通りの数寄屋橋周辺である。

交通会館には戦前、都交通局があったが、二十年三月、戦争が激しくなると青山学院に疎開し、朝日街も被爆と強制疎開で櫛の歯が抜けたようになっていた。朝日街には道端にむしろを敷いただけの即席露店が並ぶ。使い古しのナベカマ、古着、軍用物資の改造品、進駐軍からの横流し品などが売られた。

人が集まれば当然食べもの屋が生まれる。いも、焼そば、ふすまとうもろこしの粉をまぜたパン……口に入るものなら飛ぶように売れた。進駐軍の残飯を大鍋で煮込んだシチューに長い行列ができる。当時、政府の配給はほとんどなく、人々は生き延びるために闇市にたより、米とさつまいもを求めて近郊の農村に足を運んだ。

朝日街にも二十一年ごろから木造の店舗が立ち並ぶようになる。デパートという名のマーケットには様々な店が雑居し、その間に古着屋や氷屋、オンリーパー、ミルクホール、カストリ屋がひしめく。闇専門店も多く、なかには売り上げを毎日リュックサックで移動させたという逸話も残っている。

大丸パチンコビルは終戦直後大丸デバ

ートで、後楽そば、有楽シネマの一面にマルミデパート、マリオン横には千代田デパートがあり、ガード下の日の基デパート、KSデパートを加え、町全体がマーケットになっていた。

この辺りはその後激しく代替わりするが、ジャーマンペーカリー、鈴木たばこ、ふじや、初藤、ドラゴン、おかめ、ルミエール、つるや、アマンド、かもめなどが現在につづいている。

旧交通局の一面も話題に事欠かない。テキヤが取り仕切ってヨシズで囲った商店街を作り、五百軒ほどの飲み屋と雑貨屋などが並んだ。ここでは、あやしげなカストリ焼酎が売られ、酒や食べ物を求める人たちが群がった。二十一年の東京都便覧には百七十四軒の店名があり、交通会館の千鳥、中村屋などが載っている。

二十三年、疎開していた都交通局がここに戻ることになって立ち退き話が起った。しかし、食うや食わずの人たちを全部放り出すわけにはいかない、と露店を整備することになる。都は周辺を仕切っていたテキヤに、手切金を払い、この年結成されたスシ横組が交通局と借地契約して、スシ横が正式に誕生することになった。（朝日新聞社会部編「有楽町有情」）

スシ横は三十七年の都市計画で取り壊しが決まるまで有楽町駅中央口と交通会館の間の広場に横三列にならんでいた。

当時のすし屋はそばやおからにネタを乗せる加工ずしで、店外でヤミめしを買って持ち込んだ客にだけ米のすしを握った。もちろんめし屋も仲間だが、取り締まりをくぐるための方であった。

名前はスシ横だが、すし屋は少なく、後はいっぱい飲み屋やバー。この界限には柴ずし、柳ずし、照ずし、広島屋、銀華、おかめなどのスシ横組が現在でもがらばっている。本日開店の安倍 久もそのひとり。終戦直後郷里広島から裸一貫で上京、サンドイッチマンを経てスシ横で念願の店を出した。プラカードを片手に数寄屋橋から神田川に飛び込み、コメディアンとして日劇の舞台も。薄暗いイレの臭いの立ち込めるこの一面は二十年から三十年代にかけての日比谷サラリーマンの憩いの地でもあった。

電気ビルの一画にあったスバル街も日比谷を語るうえで忘れられない。電気倶楽部所有地に二十三年、白亜の名店街が建設された。同倶楽部資料によると、千八平方メートルの敷地いっぱい建てられた鉄筋コンクリート二階、一部三階建て店舗で、階段をちょっと登った両側に二十軒ほどの店がならんだ。地下入口には招き猫のパチンコ屋パッカスがあった。これは火事で焼けた米軍向けキャバレー銀座パッカスの後身。中本ラーメ、毎日書房、しのだずしはいまも有楽町に残っている。もっともこの主流は博雅、オパールといった喫茶室。一面の

オーナーの半分ぐらいが外国人で、厳しい統制のなかでも、本もののコーヒーに砂糖、ミルクがふんだんにあった。

ここはまたジャズのメッカでもあった。ママやオレオは京橋のユタカ、新宿キーヨ、スシ横のコンボとともにジャズ喫茶ブームをつくりファンを魅了した。初期の民放ラジオ時代、多くの芸能人がこのスバル街にたむろする。

電気ビルといえは当時、この一面には電気協会ビル、電気倶楽部ビル、東光ビル、富士アイスなどがあった。倶楽部は戦災で二階以上を焼失、戦後は応急修理をほどこして一部が丸の内署の官舎になった。四十四年新築の新有楽町ビルに移り、協会の一部を借りてスタートしたスバル街病院も自社ビルへ。富士アイスは実績関東一のレストラン兼ティールームとして人気を集めるがやがて国際自動車に。一方、三菱地所は電気倶楽部、明治生命と敷地を広げて電気ビル建設へと繋がるのである。

ニュートキーヨから日比谷劇場裏までの一面は、明治十年から清水栄蔵(一説では戦中から畑 豊助)所有地であった。

- 電気協会ビル最後のテナント(提供:電気協会) 聖徳医院・城谷歯科・むさし野(地下1F)、阪急交通社・クリル日比谷(1F)、電気資材(2F)、永順貿易(3F)、大平工業(4F)、電気協会(5F)、九州電力(6F)
- 電気倶楽部ビル最後のテナント(提供:電気倶楽部) 宝貿易(1002)、長野法律(1003・37)、ユニオン・マーケティング(1007)、東京三立貿易(1008)、晩電(1006・1009)、三陽電線(1010)、義輪事務所、三達工業(1012)、青南エンタープライズ(1013)、コンツール(1014)、日比谷産業(1016)、文化通商(1017・24)、日新工業(1018ほか)、河本事務所(1019)、家庭電気文化会(1020)、インターナショナルプランニング(1021)、電気商品連盟(1022)、井建材(1023)、日比谷法律(1027)、芹沢事務所(1032)、日昌工業(1033)、電波技術協会(1034・35)、電気化学協会(1036)、新都商事(1039)、義興商事(1040)、大平ビル(1101)、電気通信協会(1005ほか)、電気学街(1103・4)

- スバル街最後のテナント(提供:電気協会) 夫物産(1)、大陸通産・ハリウッド(2)、博雅(3)、美沢多津蔵(4)、ハブ(5)、東京商工通信所(6)、西シゲ(7)、日本工業(8)、スバル工業(9)、芹沢多(10)、オパール(11)、ユニコン(12)、リボン(13)、新羅(14)、メッカ・ブラウン(15)、太月(16)、三田寿司(17)、毎日書房・なかもと(18)、ナイル(19)、東宝殖産(20)、ママ(21)、ミスズ(22)、フウダ(23)、サモワール(24)、オロ(25)、モカ(26)、三立興業(27)、津田合名(28)
- 東宝ビル最後のテナント(提供:東宝) 東宝共栄企業ビルヤード・麻雀(地下1・2F)、KLMオランダ(1・3・4F)、三菱地所(2・5F)、東宝製菓所社員クラブ(6F)、クリフォードウィルキンソン炭酸(7・8F)、日本楽器音楽教室
- 東光ビル最後のテナント(提供:東光電気) 電気記念科学技術研究所、日本電球工業会、日本地熱調査会、東光電気、東光機械、東宝、サンリー、アルプ、村越俊治
- 国際自動車関係(提供:国際自動車) アイエム観光、国際ハイヤー、富士アイス

だが、この一面も被爆と強制疎開で終戦直後は空地や防空壕が目立った。大雅の直撃弾は日本閣ビル(サンケイ東京支社)を半焼していたが、焼けただれた印刷機を応急修理した板倉卓造と前田久吉が二十一年一月に名門時事新報を復刊。一時は二十七万九千部も。時事は二十七年木挽町に去り、やがて廃刊に。二十三年から産経が東京本社となった。印刷工場と新館がうなぎの寝床のように現新幹線に延びるが、手狭で三十年に新築なると大手町の新社屋に引越した。

慶楽の一面はまったくの空地であったが、やがて掘立て小屋から本格建てへ。二十二年には財閥解体に伴って清水家がこの一面を手離す。多くは当時の居住者に引き継がれたが、なかにはこれを機会に日比谷を去った人もあった。大通り坪一万円、そのほか七千円。このとき取引引きされた地価である。

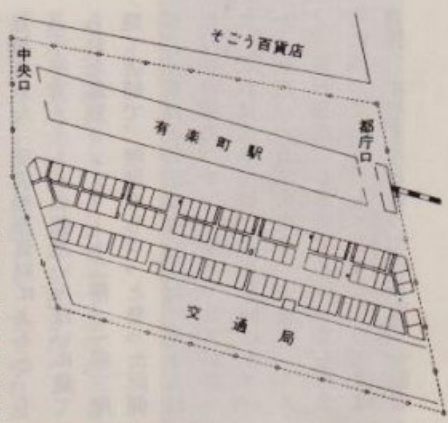
隆和ビル周辺の三角地帯は更科、平野屋、小川屋の三親戚と富可川、大和田、白石日昌堂、九連閣などの戦前組に、ますや、九重が加わり、皇居寄りでは新屋、月山、一松、常盤ずし、久須美屋、

東宝別館、楓、小林、吉川豆腐、なる巳、美宝堂、広田酒店、だるま、かねだ、ぼっぱ、中沢商店、植田商店、渡辺商店などが戦前組で、町内での移動組は日比谷荘、国定、岩崎。そして慶楽、新日本汽船、かどやなどが加わった。

この松井ビルの一画には、大正時代から丸の内湯という銭湯があって有楽町住民はみんなここで風呂につかった。三十四年火災が起き、周囲の反対もあってビルに。一時ナベプロが入居して芸能人が盛んに出入りした。

山手線のガード下は戦前ほとんどが倉庫だったが、二十二年ごろから雑貨や飲食店になった。やきとり街で有名な煙横丁もこのころの開店。小松、清ずしが古く、後はいづれも代わりした。通路にはみ出したみかん箱に丸椅子を囲み、焼とりの煙と匂いが一面をおおう。仕事を終えたデンカマンの姿も。この一面は国鉄から借りた人がまた貸しするなど利権が輻輳していたのでトラブルが絶えず、四十五年国鉄南管財区の直接店子となった。

ガードといえは終戦直後の日の基引き揚げ寮も忘れられない。ここは戦前岩崎があつて記者のたまり場でもあったが、二十一年三月、栗田久男が借り受けて、外地からの引き揚げ者に開放した。台湾から引き揚げたE・H・エリック、岡田真澄の兄弟もここに泊っている。「一回に利用できるのは百二十人。一泊が原則



35年ごろのスシ横の町並み

で、東北方面へ引き揚げる人が主だった。二十五年に廃止するまで延べ十万人は利用したと思います。日の基の名は日蓮の行動と基督の反省を両者から取りました」と、当時この「事業」を手伝った石田善次郎が、有楽町有情で語っている。いまの酒場日の基である。

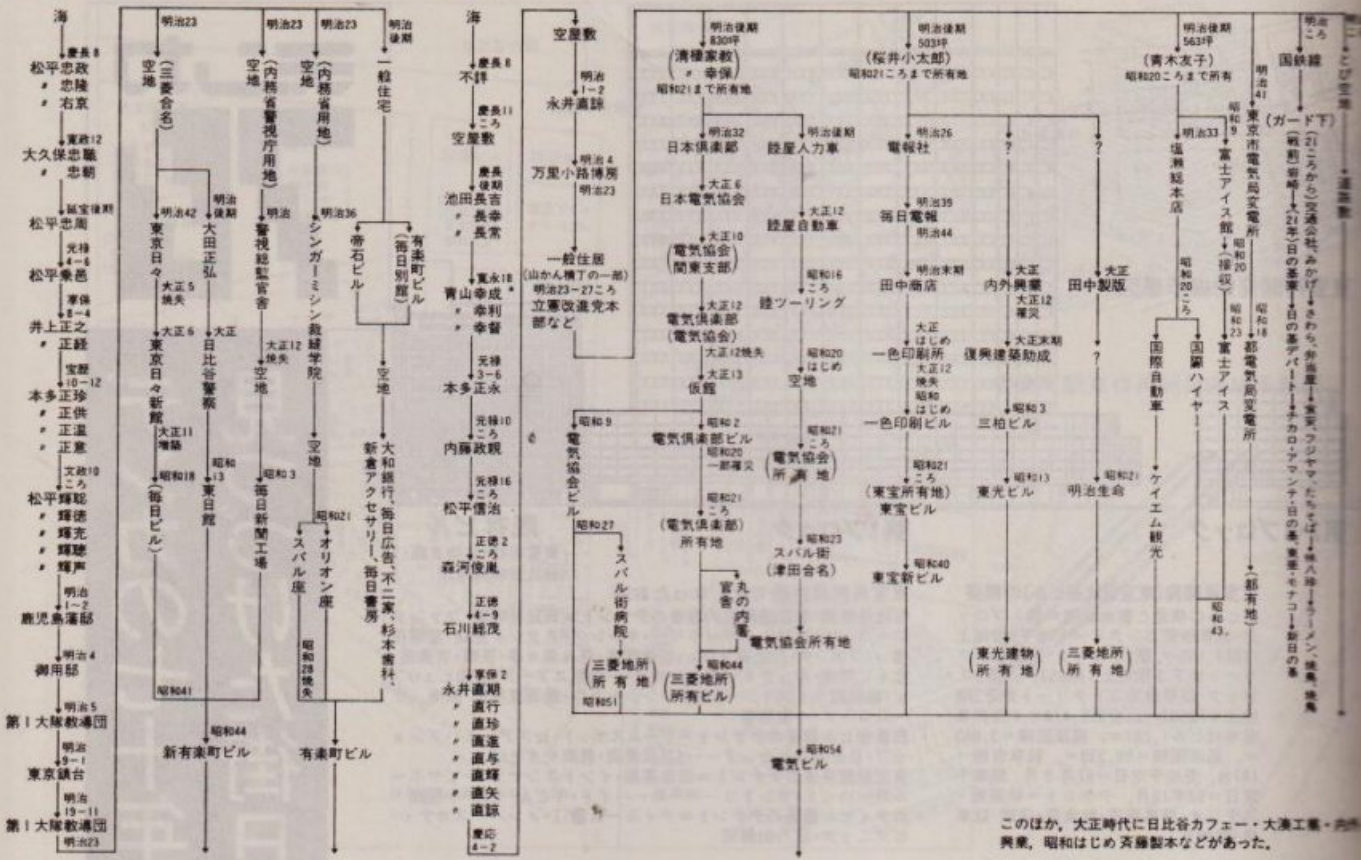
日比谷は日本最大のアミューズメントセンターとして復活する。二十年の十月から、帝劇、日比谷劇場、有楽座、日劇が相ついで再開場。娯楽に飢えた東京市民を集めた。日劇は笠置シズ子、灰田勝彦、江利チエミ、三橋美智也、三波春夫らが舞台に。ダンシングチームの三大おどりでは重山則子、根岸明美に話題が。そして三十年代にはウエスタンカーニバルが若いファンの熱狂的な拍手を浴びた。

日劇小劇場は、鐘の鳴る丘で大ヒットを飛ばし、二十七年三月から日劇ミュージックホールと改称。伊吹まり、ジプ



有楽町ビル周辺の変遷

電気ビルの変遷



このほか、大正時代に日比谷カフェー・大業工業・西興業、昭和はじめの宮崎製本などがあつた。

シー・ローズ、春川ますみらが躍動美を披露した。宝塚も三十年八月、米軍からの返還を受けて再開、これを契機に東宝劇場街は一挙に発展する。スカラ座、日劇ニュース、数寄屋橋東宝、東宝名人会が相ついで開場。二十九年には新帝国劇場がシネママ上映を。

一方、松竹も接収された邦楽座を丸の内ピカデリーとして再開させ、三十二年朝日新聞社ビルの拡大に伴って丸の内松竹も併設する。スバル興業はスバル座、オリオン座を作り、二十七年に完成した日活国際会館(現パークビル)には赤いジュウタンを敷きしめた丸の内日活が新設された。こうして日比谷映画街が完成する。三、四十年代の日比谷は若人の町として賑わいをみせた。

日比谷はまた放送の地でもあった。十三年から四十八年までNHKが日比谷公園そばの日比谷国際ビルにあり、東京放送の前身ラジオ東京もまた二十六年の開局から、三十六年赤坂のTBS新社屋に引っ越すまで、朝日生命ビル、毎日新館、農協会館から電波を流し、ニッポン放送も二十九年ラジオ放送開始以来丸の内警察裏にいつづけている。

スポーツや文芸の話題にもことかかない。巨人軍事務所が一時期読売ホールにあり、ロッテの前身毎日とパ・リーグ事務局が毎日館にあった。球界関係者の多くがこの辺りに出入りした。またプロレスの力道山も有楽町の大ファン。スシ横

最後の店となっただるまの常連だった。終戦直後復員した田村泰次郎が、有楽町を徘徊して夜の女たちの生活を描いた『肉体の門』はラク町が生んだ傑作だが、その田村や寺崎 浩、丸岡 明、横山隆一、高見 順らの作家連中はレパンテやおきよに集まった。二十七年から放送された菊田一夫のNHK連続ラジオドラマ、君の名は『で戦中、戦後の混乱期、数寄屋橋が真知子と春樹の出会いとすれ違いの舞台になる。』

フランク永井の『有楽町で逢いましゅう』はそのころのコマーシャルソングだ。有楽町駅前の報知新聞はその後読売新聞に引き継がれて読売ホールになっていた。ここでは毎週ジャズコンサートが催されて若いカッパルのたまり場に。ホールは三十二年から読売会館となり、その主要部門に大阪からそころが進出した。そころはラジオ、テレビを通じて開店をPR。そのひとつがテレビ番組『有楽町で逢いましょう』だった。これが歌になり、映画になってこのキャッチフレーズは開店時にはすっかり定着。有楽町のイメージを一層若者の町へと塗り変える。開店当日のそころは幾重に囲んだ人波でうずまった。

二十五年にはじまった朝鮮動乱は特需ブームを呼び、サンフランシスコ講和条約を経て二十七年には独立へ。そして昭和三十年代の日比谷は空前のビルラッシュを迎えるのである。

# デムカ アム

## デンカ の七十年を 見つづけた街日比谷

### 12 あすへの飛翔



東宝再開発完成予想図



第2・3ブロック

**東宝再開発(東宝日比谷ビル)の概要**  
 新ビルの構造と敷地面積=第1ブロック・鉄骨鉄筋コンクリート地下4階地上18階4,155㎡、第2ブロック・鉄筋コンクリート地下3階地上1階657㎡、第3ブロック・鉄骨鉄筋コンクリート地下3階地上5階663㎡、合計5,474㎡+既存東宝本社ビル1,287㎡、建築面積=3,863㎡、延床面積=59,339㎡、駐車台数=181台、完成予定日=62年9月、開業予定日=62年10月、テナント=映画館・スタジオ・貸事務所・飲食店・店舗・駐車場・機械室

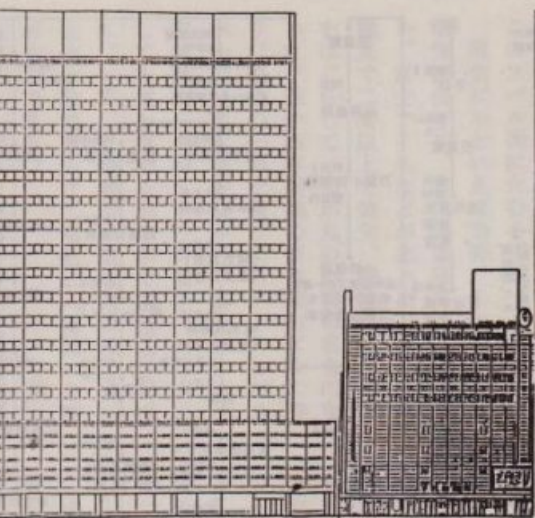
この時期を境いにわが国は高度成長への道を歩みはじめる。新安保を成立させた岸内閣総辞職の後を受けた池田内閣は三十五年九月、所得倍増計画を発表する。日比谷も空前の建設ラッシュを迎えた。このビルブームの推進役は三十九年に開催されることが決まった東京オリンピックであった。

まず交通路。当時の道路は自動車の増加に対応しきれず、このままではせっかく

く開催する東京オリンピックの選手輸送も危ぶまれていた。旧外濠の神田川埋め立て工事がはじまる。新橋からへびのような二階建てビルが有楽町を経て東京へ延びる。その屋上が高速度道路になった。三十三年、コリドー街、有楽町フードセンター、数寄屋橋ショッピングセンター、西銀座デパートが高速の一、二階に誕生する一方で、江戸時代から親しまれた数寄屋橋が取り壊された。三十四年誕生した数寄屋橋公園にある菊田一夫の書になる、数寄屋橋ここにありき、の石碑が往時を偲ばせる。

三十二年十月、地下鉄丸の内線の西銀座駅がニュートキョー前に開業する。当時の国電は殺人的ラッシュが繰り返され、地下鉄の開通は日比谷サラリーマンの夢でもあった。その後日比谷線、千代田線、有楽町線、三田線が相ついで開通、首都交通網の一大拠点となっていく。

建設ラッシュ最大の話題は新幹線の開業であった。東京オリンピックブームの目玉商品でもあった新幹線は三十九年の十月に開業したが、三十三年ごろから用地買収がはじまり、三十七年には架線工



第1ブロック

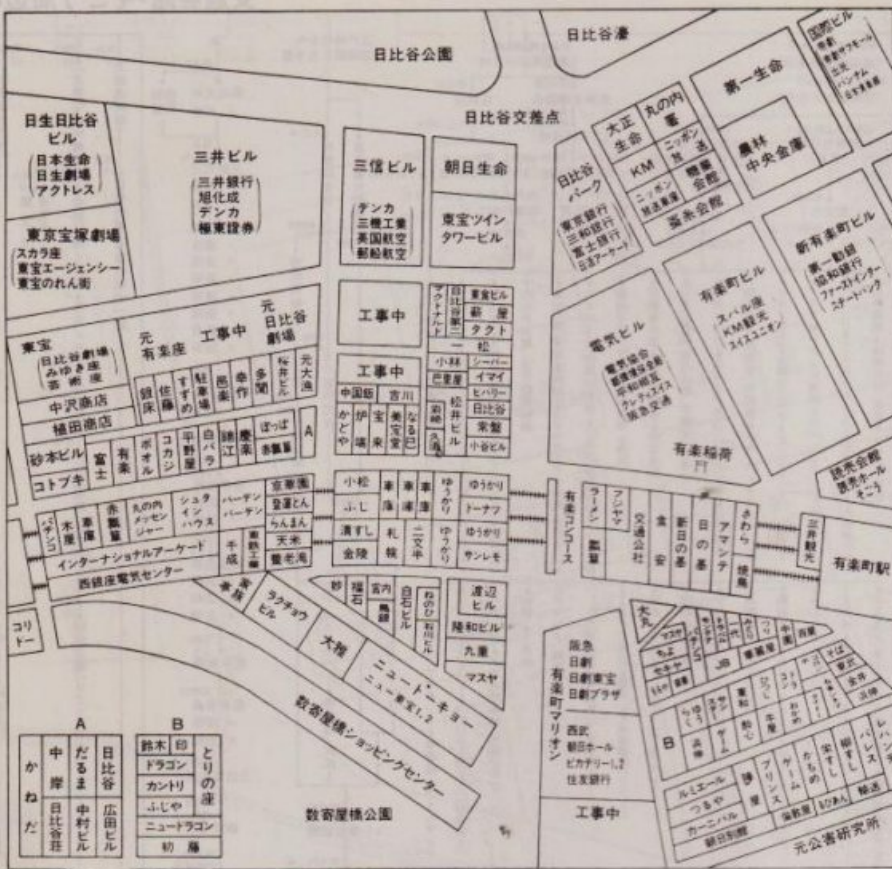


既存ビル  
(東宝本社・みゆき座・日比谷映画ほか)

**東宝再開発計画でなくなったお店**  
 日比谷映画・有楽町周辺の最後のテナント=日比谷映画・ファンタジーコーナー・アートギャラリー・ギンレス・スタンド売店・宝塚花壇・バブバンド・日比谷サロン・炉端音楽・色々楽々亭・笑福・有楽座・宝くじ売場・ルックミー・アークセサリー・飯急ユアーズ・有楽ビュッフェ・珈琲館ウェストン・洋酒サロンシャドウ・居酒屋音楽・耐庵、ゲームコーナー・家族亭  
 三番街ビル最後のテナント=ゲームスポット・ヒズアンドハズショップ・日比谷麻雀センター・バブ三番街・色々楽々亭  
 東宝別館最後のテナント=飯急茶屋・インドネシヤラヤ・ピヤホールローハイド・サントリーパーローハイド・牛どん・七福・小花鮎カティビル最後のテナント=ティールーム霞江・メンバーズカティ・ビクニック・日乃出券房

昭和三十五年の東京は日米安全保障条約改訂をめぐる激しい闘争の渦のなかにあった。この年一月に調印された安保条約は五月二十日、野党排除の衆参両院で強行採決され、これに反対するデモ隊が連日国会周辺を包囲していた。その数は自然承認の前日・六月十八日には三十三万人にも達した。十五日は全学連の四千人が国会議事堂へ乱入、デモ隊を迎えうった警官隊との攻防のなか東大生・樺美智子の死去という痛ましい惨事もひき起こす。安保の嵐は日比谷を襲う。暴徒化したデモ隊は日比谷公園の松本楼を焼き、日比谷交差点一帯は火焰瓶の炎と煙のなかでさながら戦場と化した。

昭和三十五年の東京は日米安全保障条約改訂をめぐる激しい闘争の渦のなかにあった。この年一月に調印された安保条約は五月二十日、野党排除の衆参両院で強行採決され、これに反対するデモ隊が連日国会周辺を包囲していた。その数は自然承認の前日・六月十八日には三十三万人にも達した。十五日は全学連の四千人が国会議事堂へ乱入、デモ隊を迎えうった警官隊との攻防のなか東大生・樺美智子の死去という痛ましい惨事もひき起こす。安保の嵐は日比谷を襲う。暴徒化したデモ隊は日比谷公園の松本楼を焼き、日比谷交差点一帯は火焰瓶の炎と煙のなかでさながら戦場と化した。



有楽町駅東口再開発完成予想図



昭和60年12月現在の日比谷

事が開始される。隆和ビル周辺の三角地帯は大幅に削られ、富可川などがこれを契機に日比谷を去った。

区画再編成の進んだこの一面は新しい町づくりを進める。日本一のビヤホールとして再開発を期すニュートーキョーは三十三年に、サンケイ新聞跡のラクチヨールビル、九重ビル、ますやビルは三十八年に、そして隆和ビル、渡辺ビルが三十九年に自社ビルを建設する。晴海通りをはさんだ朝日新聞は三十五年、松竹ビカデリーを含めて大改造工事を完成させる。昭和二年完成した重厚さ溢れる旧館に約二倍分の新館を組み合わせた新社屋は日比谷新聞街の象徴となった。

ビル建設はさらに進む。同年、三井不動産が日比谷三井ビルを完成させ、当社もここに本社事務所の一部を移転させた。三十七年には小谷ビルが竣工、この年開演中の宝塚劇場が焼け、十九人死傷の痛ましい事故が起るが、その後三十九年新装して再開場する。四十一年新帝劇を包括した国際ビル、翌四十二年には三代目帝国ホテルが竣工。さらに有楽町ビル、新有楽町ビル、日生ビル、ツイインタワービル、新朝日生命ビル、帝国ホテルインペリアルタワービルなどが完成した。

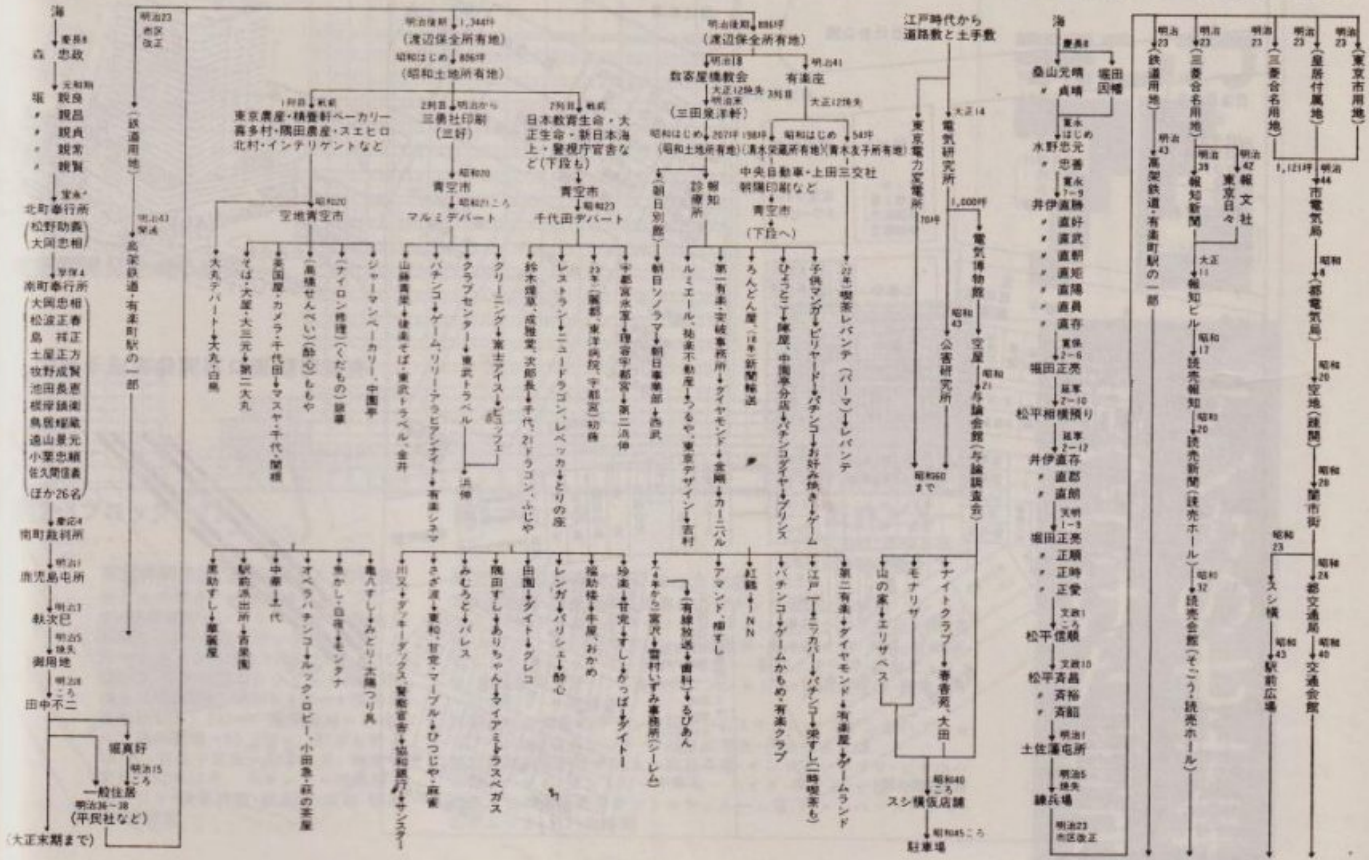
こうした華やかなビルラッシュの陰で寂しい話題もある。大正時代の代表的建造物として知られた二代目帝国ホテルが四十二年に、昭和はじめの名建築朝日生命ビルも五十六年に、その前四十二年に

は明治時代から都民の足として親しまれた都電も撤廃され、懐かしい日比谷駅、数寄屋橋駅もなくなった。

三十七年、有楽町駅前整備都市計画が決定された。雑然とした東口を再開発して新しい都市づくりをめざそうというもので、スシ横と交通局がA地区、朝日街B地区、日劇、朝日新聞C地区の三区画に分けられる。四十三年、戦後のラクチヨール史を彩ったスシ横が撤去される。最後まで頑強に抵抗したたるま館もこの年八月、衆人監視のなかで強制撤去された。都職員の持っていたマイクを握った禰要次郎のあいさつに拍手が鳴りやまなかったと各紙が伝えている。五十五年、朝日新聞が築地新社屋に引越す。翌年一月には日劇もサヨナラ公演。四十八年間にわたる歴史を閉じる緞帳が下がったとき、舞台と観客がサヨナラを叫び合って涙のフィナーレとなったのである。

A地区では四十年に交通会館が完成している。地下二階、地上八階の延べ面積二万坪のうち五千坪を都が区分所有し、残りを三菱地所が。テナント数三百を数える雑居ビルと都庁分室の同居する官民一体ビルとなった。

三、四十年代にかけて日本最大のオーディオメントセンターを誇った日比谷も、テレビやレジャーの多様化に押された映画界の凋落とともに、若人の町としての看板はすっかり新宿や原宿、渋谷に奪われていた。しかし、五十九年十月



オープンしたマリオンは日比谷、有楽町を見難した若者たちに強烈なインパクトを与えた。地下二階、地上十一階のマンモスビル。デパートと映画館とイベントホールがぶつかり合うホットゾーンの誕生は学生、OL、サラリーマンなどのヤング層を呼び、周辺一帯をマリオン一色に埋めたのである。マリオンの完成は、有楽町や銀座など周辺のデパートや専門店への来客も増やすという、マリオン現象をひき起こし、全国の都市開発の専門家から注目を集める。

この東口再開発には朝日街のB地区が残っている。朝日街は最初の三列が商店街で、四列目の都有地千坪(公書研究所)と東電変電所七十坪はすでに移転を終えている。ここには図のような駅前広場と高層ビルが建つ計画だ。地元では再開発準備組合を中心に二十数年間にわたって論議が繰り返されている。複雑な利権がからんで意見統一ができないためだ。

三信・三井ビル周辺では東宝の再開発計画が進んでいる。この一画は旧日比谷劇場、有楽座を中心に東宝が半分以上の土地を取得しており、ガードまで五つに分けた再開発計画のうち一三ブロックの建設工事がはじまった。三井ビル前の第一ブロックは地下四階、地上十八階。オフィスと映画館、商店街に。三信ビル前の旧国策ビルも取り壊しが進んでおり、ここは駐車場と公園になるといふ。二年後には本社周辺の周辺は一挙に様変わり

する。このように日比谷はいま、二十一世紀に向けて急激な変貌を遂げようとしている。

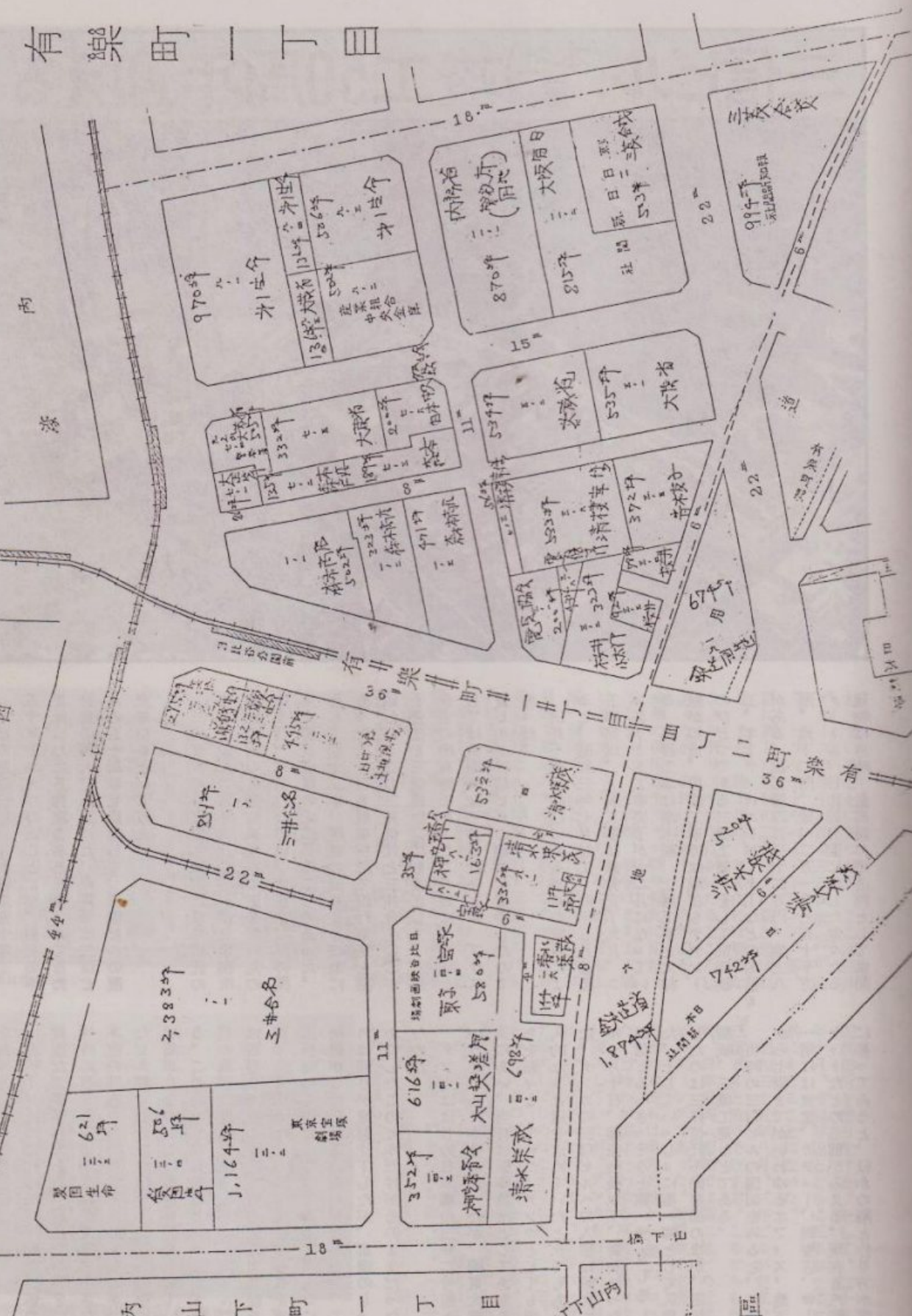
デンカ70。デンカは日比谷に生まれ、日比谷に育った。この間、当社の成長を見つけた街・日比谷は、さらに次世代に向かって飛躍をつづけるデンカの明日も暖かく見守ってくれるに違いない。

一月から一年間にわたったこのシリーズも今月をもって完結いたしました。ご精読ありがとうございました。取材にあたりまして社内外の方々から多大なご協力と励ましをいただきました。社外で快く取材に応じていただいたり、資料を提供してくださった方々を紹介してお礼に代えさせていただきます。

★中央図書館、日比谷図書館、国会図書館、有楽町町会、本日閉店安倍 久、旧富可川佐藤 清、電気協会寺田治三郎、旧時事新報斎藤一郎、飯島敏信、天米、日比谷便利社、富士アイス、旧同野口順太郎、新日の基、ぼっぱ、日比谷荘、植田商会、栄すし、千鳥、九重、隆和建物、ふじ、とん太、るびあん、ふじや、東和産業、有楽町総合開発センター、電気倶楽部、東光電気、第一国際タクシー、東宝、東宝不動産、東宝地所、三井不動産、電通、三友新聞ほか。

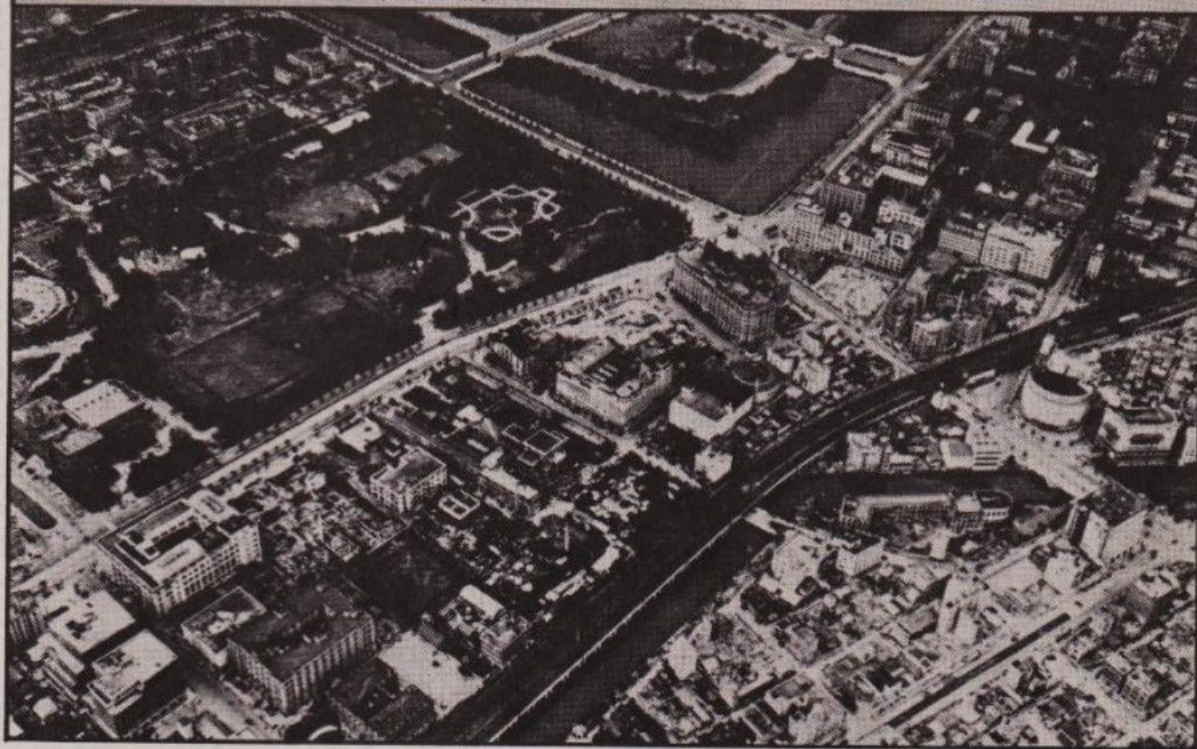
有樂町一丁目

町田 祝  
内 落  
町 田  
内 落  
町 田  
祝



昭和9年の地籍台帖(内山書店刊から)

# 三信ビル(本小屋)竣工50周年迎える



本社のある三信ビルが竣工五十年。五十年といえはひとことだが、当社の半世紀にわたる発展のあとをみつめてきた社史の番人でもあった。今月号は三信ビルの五十周年を記念して、三信ビルの歴史をひもといてみた。

三信ビルの「三信」は実は三井信託のことなのだ。三井信託(株)が創立事務所を丸の内の有楽館(現在の三井銀行丸の内支店)に設けたのは、大正十二年の関東大震災直後の十二月のことであった。そして翌十三年、現在の三井ビルの地にあった三井合名仮事務所(銀行業務を開始した。この三井信託と三井合名(株)が子会社「三信建物(株)」を設立して、三井合名の所有地であったこの地に、当時としては画期的な三井信託ビル、プラス貸ビル「三信ビル」の建設に着手したのであった。

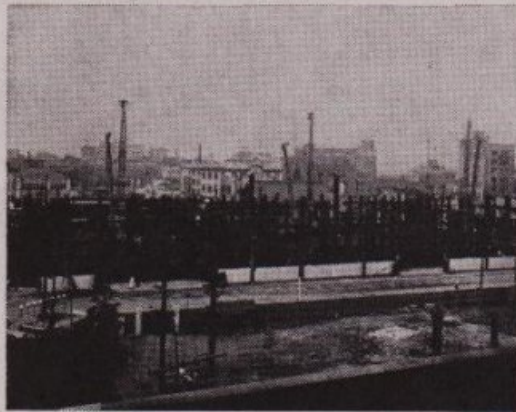
三井不動産(株)にある当時の資料によると、昭和三年七月起工、四年五月基礎工事完成、上層工事は鉄骨完了九月、コンクリート工事了了が十二月になっていく。基礎工事は清水組、上層工事を大林組が担当、設備工事では現在もテナントのひとつである三機工業、そして東亜鉄工、オーティスエレベーターなどの名前がある。総工費四百三十二万円。地上八階、地下二階、延べ二万一千七百十平方メートル、日比谷公園に面した堂々たる建物は当時、最高級の建造物として世間

をあっといわせた。

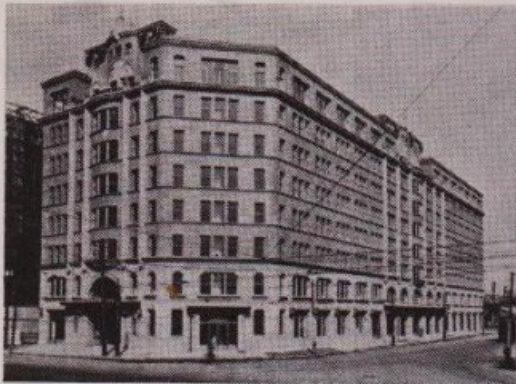
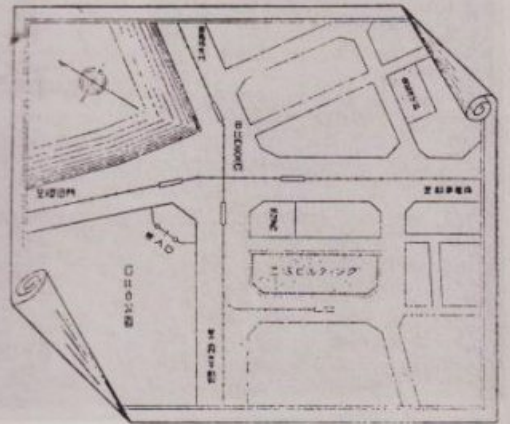
左ページ上の二枚は三井不動産提供の貴重な工事写真である。前景やバックに当時の日比谷周辺がうかがえる。小さな木造の建物や当時としてはめずらしかったビル群、紹介できなかった写真の中には馬車やなつかしい市電も姿をみせている。このあたりは有楽層といってヘドロ状の軟弱な地盤であったが、三信ビルでは岩盤まで松の生杭を打ち込んで基礎をがっちり固めたという。現在の写真を竣工当時のものとくらべてみると、入口に階段がつけられているのがわかるが、これは回りが地盤沈下したが、基礎のしっかりしたこのビルだけがそのままだったためだ。

デンカをはじめ日本橋の三井二号館というところに本社があったが、関東大震災にあり、当時は仮事務所としてあちこちを転々としていた。デンカとしても恒久的な本社屋を求めていたときでもあった。デンカの三信ビルへの入居は昭和六年一月十日、藤原会長以下、新装なった三信ビルへさっそうと第一歩をしるした。そしていっしょに第一陣として入居したのは三井信託不動産部のほか、王子製紙、三機工業などである。

当時の三信ビルの図面をみると、三階から七階までがいわゆるオフィス。地下一階には食堂、カフェー、理髪店、マーケットなどの名前がみえる。現在も八階に昇ってみると、ほかの階と作り方が変



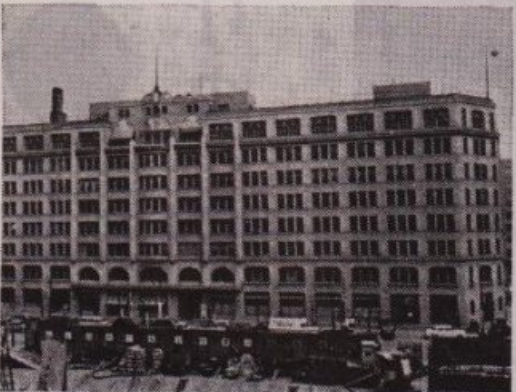
〔写真説明〕三井不動産社に残る貴重な三信ビル工事写真（上二枚）は当時の日比谷周辺の様子がうかがわれる。右のカットは当時の案内図。タイトル写真は昭和二十一年、戦争の傷あとが残る日比谷周辺。中央が三信ビル（共同通信社提供）



竣工直後の三信ビル

わっていることに気づくが、ここは三井グループの厚生施設三友倶楽部があり、ビリヤードやバー、トランプ、碁、謡に興じた戦前の三井マンの姿が偲ばれる。また、竣工当時、ビル内には豪華なシャンデリアや照明灯がいたるところにあったが、これは昭和十七、八年ごろ、金属の供出命令でゼロ戦や弾丸に変わってしまった。その後、戦争はますます厳しさを加え、デンカの本社中樞も青海工場へ疎開するほどだった。アメリカ軍はB29で東京の大空襲を敢行したが、皇居周辺はほとんど爆撃されず三信ビルは幸いにも被爆をまぬかれた。

昭和二十年八月終戦。九月十七日、占領政策の一環として、三信ビルは進駐軍に接収された。デンカはやむなく、一時本社を目黒研究所に移し、後、京橋の帝



三井ビル建設当時（昭和35年ごろ）の三信ビル

国興信所を借り受ける。そして、二十五年十月、接収解除とともに五年ぶりに古巣にもどることになった。

昭和三十五年八月、三井ビルが完成、三信ビルと地下でむすぶ。このビルも当時、日本最高（面積では第二位）の近代ビルディングであった。耐震性に注意、内部の大理石は世界各地から集められた。当時わが国はいわゆる高度成長時代に突入していたが、デンカも石油化学進出への気運がみなぎるなど、業容が一段と拡大しはじめたときでもあったので、さっそくこのビルの八階をも借りる。現在の本社の体制がととのったときでもあった。三信ビルの五十年、その歴史はデンカの社史そのものでもあった。（三井不動産、三友新聞、共同通信社より協力いただきました）



# さよならなら●日劇 ルポ&アンケート●かわりゆく有楽町

日劇がなくなるといいうわさは以前からあったが、現実の姿となるとあまりにもさびしい。あの半円形の日劇壁面に、いまは閉店をつたえるメッセージが一枚横に走るだけだ。つい先日まで、金髪娘に人食いザメがキバをむく「ジョーズ」やお色気たっぷりのミュージックホールの大



看板がところせましとはられた、けばけばしい色の洪水はここにはすでないのだ。

今月号はデンカマンにとっても思い出いっばいの有楽町(東口)のかわりゆく姿を追ってみることにした。





最後の舞台となったサヨナラ日劇フェスティバル“ああ栄光の半世紀”



終戦直後の有楽町界隈、当社のある三信ビル(左)や日劇も焼けずに残った このあたり一体が高層ビルに変わる

## ◆五十九年にはノッポビルと 駅前広場に

今度とり壊しははじまるのは、日劇と一足早く閉店して築地の新社屋に移った隣の朝日新聞社旧社屋、そして、駅前にのびる朝日街周辺の一角。日劇と朝日新聞社は約一年がかりでとり壊され、この跡地には十二階建ての近代ビル、新日劇ビルがたつ。八三五五平方メートルの敷地に延べ面積が約七万五〇〇〇平方メートル。地階は大駐車場で、一階から七階までがデパートや多くのテナントによるショッピング街になり、八階から上は東宝、松竹、東映系の映画館が入る。新ビルの工事期間は約三年というから早ければ五十九年夏に完成する。

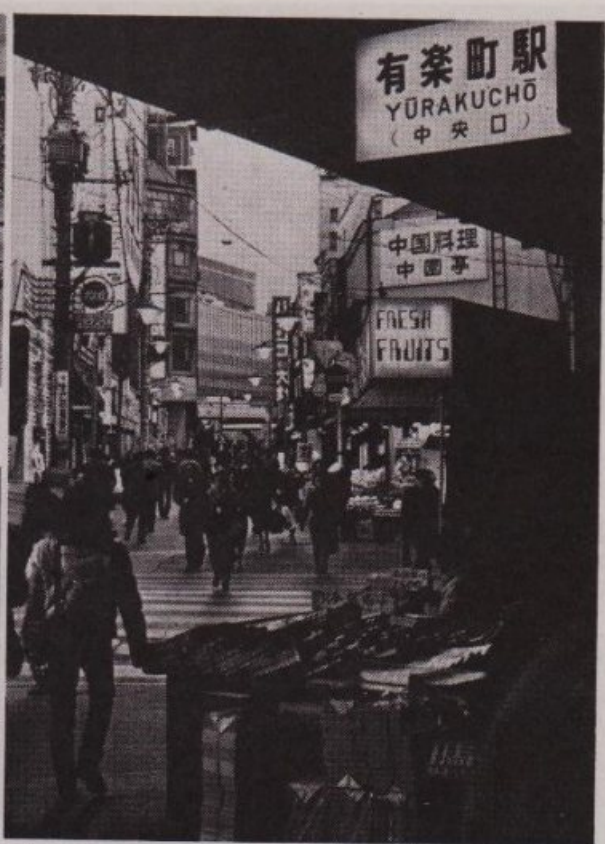
そして隣接の駅前地区には、二十階クラスのノッポビルや大型の駅前広場などができる。まったく新しい有楽町(東口)が生まれるのも間近い。

## ◆涙、涙のフィナーレ

デンカマンと有楽町。本社屋を有楽町に持つデンカの従業員にとっては、有楽町はいわば活動の場であり、青春そのものであるのだ。記者とカメラマンI氏の二人は二月の一日、カメラとペンを片手に、なつかしい有楽町の変わりゆく姿を追ってみることにした。



宝くじが日本一売れて当たった日劇チャンセンター



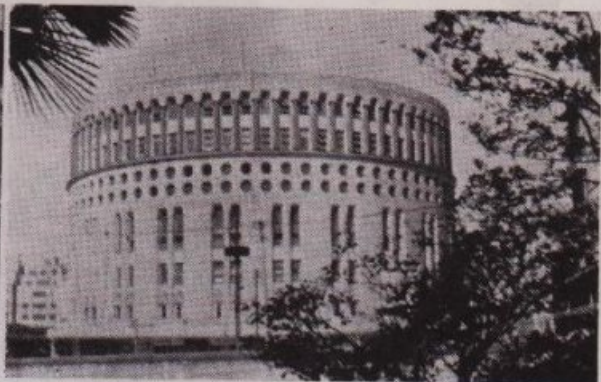
現在の中央口。このあたりに駅前広場とノッポビルがたつ



こちゃこちゃとした朝日街



閉館を伝える日劇のサヨナラメッセージ



昭和18年ごろの日劇、このころここで風船爆弾が作られたのだという

日劇。東京の名所として親まれた、歴史と伝統に包まれたマンモス劇場。昼休みの日劇前は暖かい日ざしに散策を楽しむOLやヤング、忙し気に職場にいそぐサラリーマンなどで相変わらずのにぎわいだ。折りから最終公演中とあって、特設のハイライト写真展にも人波がひろがる。有楽町の象徴ともいわれるこのビル。昭和八年創立というから、わが本社のある三信ビルの昭和五年からわずか三年後にオープンしたことになる。激しい昭和史を華麗に生きつづけた半世紀なのだ。

二千二百円の入場料を払って三階の一般席に入る。フィナーレ間近とあって、中年以上の男女を中心に場内はほぼ満員の盛況だ。みる人、でる人、それぞれに思いをこめた思い出のラスト舞台。サヨナラ日劇フェスティバルがくりひろげられる。この日の舞台は第一部がNDTダンサーによるレビュー、最後とあって舞台を踏むステップにも力がこもり、その表情には心なしかさびしさがうかがえる。

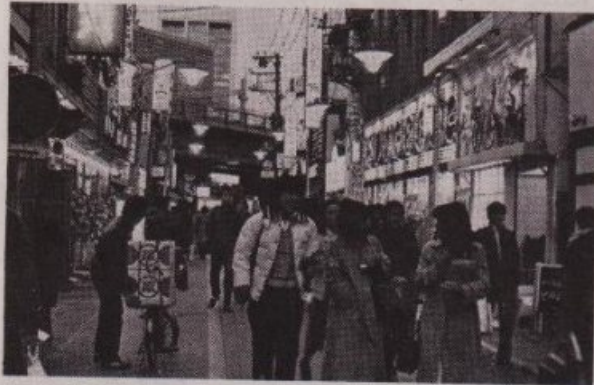
通路を回ってできるだけ前へ……。ASA400を装填したズームレンズのシャッターを夢中になって切る。回りをみるとみんなカメラをもって切っている。だれもが記念に一枚という気持ちなのだ。第二部は梓みちよショー。サヨナラフェスティバルはこのあと二月十五日までつづいた。最終日は長谷川一夫に、かつての大



朝日新聞は早々と築地へ引っこした



有名な一坪デパート鈴木商店



パチンコ屋の軍艦マーチが道いっばいにあふれる



終戦直後の面影がいまも残る。このくだもの屋はタキ売りで有名だった

スター・季香蘭こと山口淑子参議院議員が「蘇州夜曲」に涙また涙のフィナーレを迎えたという。記者のみたこの日は、ここまでの盛りあがりはないとはいえ、感慨深げの中年男女が舞台にかけあがっては花束そして握手。そして、二度とあがることのない緞帳(どんちょう)がするすると下がった。

表へ出る。日劇八階のミュージックホールは松永てるほ、浅芽けいこらがサヨナラ公演「新たな愛の公演」を、地下二階の丸の内東宝は「マッドストーン」、日劇文化は「ツイゴイネルワイゼン」を二十二日まで上映していた。もっとも、この号がみなさんの手許に届くころにはとくに閉館することになる。このビルの地下飲食街におりる。ここには両側の壁にくっつくようにして開いていた店が十数軒、ほとんどが飲み屋。にぎやかだったこの地下にならんだ赤ちようちんも明るい嬌声もすでに消えた。

日劇といえば、チャンセンタ―も東京名物のひとつだった。ここからは一千万円、二千万円の庶民の夢が売られた。日本一あたるとの評判に(もっとも発売枚数も日本一だから確率となるとなるともいえないかった)宝くじフマンのデンカマンもここに並んだ思い出を持っていることだろう。

#### ◆「君の名は」いまはむかし

マスコミ界の雄・朝日新聞社旧社屋。昭和三年設立。ここは昨年九月に移転したので、いまはシャッターが下ろされて、移転のあいさつ文だけが名残りを残している。この旧社屋はかつて、選挙や高校野球のたびに大看板が立てられて、刻々と情勢を伝えた。朝日新聞の小旗をたてたハイヤーがこのせまい路地に何十台もたむろしていたのも思い出おこすとなつかしい。

いまはブードセンターになっている高速度道路は、かつて江戸城外堀のあったところ。数寄屋橋で再会した春樹と真知子のロマンス「君の名は」はあまりに有名だ。この川ふちに、そのまたかつて、あの有名な江戸幕府の南町奉行所があった。遠山の金さんが片肌を脱いで遠山桜を散らせたところだ。

#### ◆終戦直後の面かけ残す朝日街

有楽町銀座口のすぐ前はパチンコ屋や喫茶店などがあって、なんとなくゴチャゴチャしているが、この一角が朝日街。戦前と終戦直後の面かけをいまに残すかす少ない町だ。パチンコ屋の軍艦マーチが流れるなかをラーメンと安っぽいコーヒ―の香りがあたりをつつむ。

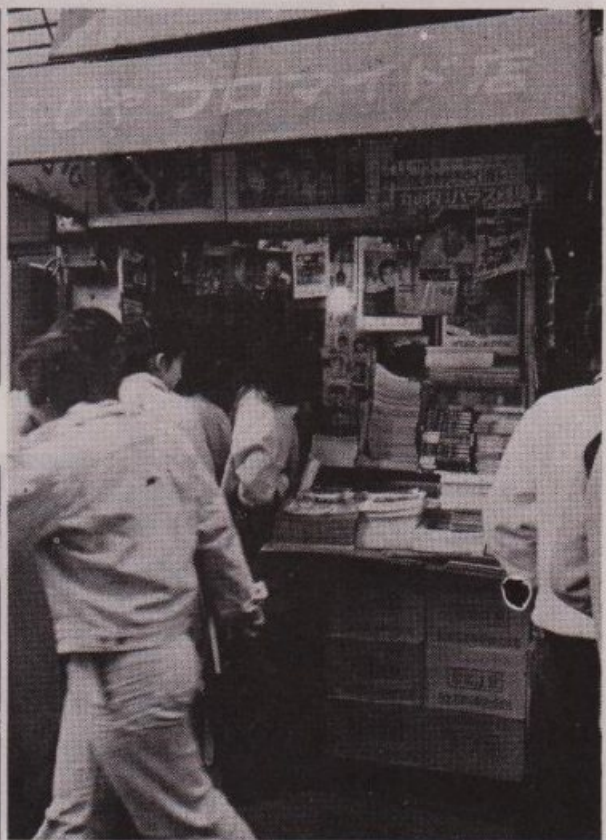
このあたりは終戦直後、すし屋横町(いまの交通会館と駅の間)につづく、ホルモン焼きやのみ屋、たべもの屋がな



有楽町の夜は若者の町だ



有楽町の名物ヤキとり横丁、ここは残る



このプロマイド屋さんも昔からある

駅中央口のアーチ形のガード下には終戦直後、百人ほどのクツミがぎがいたそうだが、いまでは四、五人がほそぼそと営業をつづけている。

朝日街にはむかしながらの古い有名店が多い。駅前交番前の立ち食いソバ屋が後染そば。あわただしくそばをかきこんだサラリーマンが足早に立ち去る。三角形にとがった威勢のいいくだもの屋は百果園。ここは東京で一番早くバナナのタキキ売りをやって有名になった。道路を奥に入ってデラックスみつ豆、ソフトゼンざいで有名なおかめ。時間帯を問わず、女性客でいっぱいだ。このおかめとなりがお好み焼き屋のかっぱ。デンカの人もよく行く。そしてさらにこの前がマージャン屋・友楽クラブと国際クラブ。二軒ならんだすし屋が栄ずしと柳ずし。喫茶店のるびあん、倫敦屋、ルミエールといったところもこのあたりでは知られている。交通会館前のなんとなく古めかしいビヤホール・レバンテはおいしい貝料理で有名。かつて新聞記者たちのタマリ場でもあった。

駅中央口のアーチ形のガード下には終戦直後、百人ほどのクツミがぎがいたそうだが、いまでは四、五人がほそぼそと営業をつづけている。

らんだマーケット街だった。ガードの上をSL列車が煙を吐きながらとおり抜けたのだという。焼け跡の銀座を横目に、先輩のデンカマン諸氏が西口のスバル街（いまの電気ビル、有楽町ビル、新有楽町ビルあたり）やこのあたりをはいかい、カストリや横流しのバーボンウィスキーに舌つづみを打った。

朝日街にはむかしながらの古い有名店が多い。駅前交番前の立ち食いソバ屋が後染そば。あわただしくそばをかきこんだサラリーマンが足早に立ち去る。三角形にとがった威勢のいいくだもの屋は百果園。ここは東京で一番早くバナナのタキキ売りをやって有名になった。道路を奥に入ってデラックスみつ豆、ソフトゼンざいで有名なおかめ。時間帯を問わず、女性客でいっぱいだ。このおかめとなりがお好み焼き屋のかっぱ。デンカの人もよく行く。そしてさらにこの前がマージャン屋・友楽クラブと国際クラブ。二軒ならんだすし屋が栄ずしと柳ずし。喫茶店のるびあん、倫敦屋、ルミエールといったところもこのあたりでは知られている。交通会館前のなんとなく古めかしいビヤホール・レバンテはおいしい貝料理で有名。かつて新聞記者たちのタマリ場でもあった。

この駅前にはミニショップがめだつ。日劇近くに鈴木商店という店があるが、ここはまさに一坪デパートといった感じのたばこ屋兼雑貨屋。百円ライター、ガム、カサ、サンダル、と実に千七百種用意しているとか。ギネスブックにこんな部門があればまず世界新記録はまちがいないだろう。一日十万円の売り上げで近所のピカデリー劇場より日銭をかせぐのだという。

また、すぐそばにスターの写真が所せましとはられたプロマイドの店・ふじやがある。ここは間ローメートルとさらに小さい。駅前の甘ぐり屋、サンドイッチ屋、アクセサリー屋も、それぞれ有楽町の顔なのである。

有楽町のこのあたりをひと回り。いつの間にかあたりは早くも夜のとなりにつつまれる。午後五時、有楽町駅銀座口に入影が増える。カレとデートの約束なのだろうか。赤いコートに身を包んだ若い女のが人待ち顔に時計をのぞきこんだ。はつらつとした彼女の横顔には変わりゆく有楽町への郷愁はもろろん、新しい有楽町への期待はない。しばらくの後、手をとりあった二人が人波にまきこまれては消えた。有楽町の夜がはじまった。

#### ◆一坪デパート・鈴木商店

# 有楽町東口81年2月

そ～おな～んです  
ココが有楽町東口です



有楽町駅

交通会館

紳士服 浜伸

後楽之屋 東武ビル 紳士服

NOVE 有楽シネマ

ドロン (パン)

おかわり 甘味や

ひつじや

東和

サンスター パチンコ

ゆうらく コーヒー

とりの屋 のみや

成雅堂 ゴム印

銀座 中華

モモや 喫茶

子代

DRAGON (ハンカチ)

初藤 (お菓子)

レバンテ レストラン

新聞輸送機

ゲームパルス ランチ

和洋寿司

菊

栄寿司

ゲームセンター かもめ

あびあん コーヒー

アモンド コーヒー

COFFEE (株) 朝日コミュニティ サービス

セヴァン コーヒー

プリンズ コーヒー

さけ 陣屋 のみや

新井歯科

ルミエール コーヒー

朝日サンアップ

カニバルクラブ

つるや 魚屋

駐車場

駐車場

空地

公害研究所 展示コーナー

日劇

TOYO 男性化粧品部

都心

後楽

日劇有楽町センター

さんだらほうち

ピクニックス

チンセンター

朝日新聞社屋

松竹ピカデリー

ふじやブロード店

首都高速道路

晴海通り



かわってほしくない有  
楽町

伊藤 暢洪

<本社有機第二事業部>

わたしと  
有楽町



カツライスが楽しみで  
ねエ

田隅 龍二

<電化不動産>

いつだったか、出張で会社を  
あけた翌日、ふと机の引き出し  
をあけたら、ぐんばい編集室か  
らの執筆依頼状があるのでびっ  
くりしたね。有楽町の今昔に  
ついて書けということ。おれ  
も今昔を語る年になったか  
なんて、なにか体の隅をスーッ

とすきま風がよぎった気がし  
た。それじゃチビチビやりなが  
ら、ナツメロでも口ずさむこと  
としよう。  
有楽町界限は、子供のころ、  
若いころ、そしてデンカのオフ  
タイムといろいろ想い出がある  
よ。まず子供のころ、こんど解

国電有楽町駅を降りて三信ビ  
ルへ向かう道すがら、二つの空  
地、スラム街がある。そのわき  
を一心に会社へ向かうサラリー  
マン。まだ日比谷線、千代田線  
両地下鉄もなく、有楽町へ通勤  
する人びとは国電、地下鉄銀座  
線、地下鉄丸の内線およびバス  
に乗って通っていた。十数年前  
の情景である。  
現在の有楽町は大きく変わっ  
たものだと思う。新しいビルが  
立ちならび、かつてのスラム街  
も立派なビルと変化している。

体がはじまった朝日生命館、こ  
の一階、晴海通りぎわに美松と  
いうバンド入りの立派な大食堂  
があった。たしか二階も食堂だ  
った気がする。日曜日はよく親  
に手をひかれて銀座へ。宵の銀  
ブラの前にここでバンド演奏を  
聞きながら、カツライスを食べ  
るのが楽しみでね。そのせいか  
いまだにトンカツは大好き  
だ。  
次は読売ホールのジャズコ  
ン。これはひとり身のころ、い  
まのそごうデパートの場所に読  
売会館があって、その四階？  
に狭いホールがあった。終戦直

十年ひと昔というがずいぶん変  
わったものだ。  
私にとって有楽町という名は  
この街にくるまえから頭にしみ  
ついてた。フランク永井が唄  
い流行した「有楽町で逢いまし  
ょう」という歌が私に有楽町と  
いう名前を記憶させたといえ  
る。  
その後、この歌が実は有楽町  
の駅前にそびえる「そごうデパ  
ート」のコーマーシャルソングで  
あると聞いてなるほどと思っ  
た。いま、有楽町の駅のホーム

後で演奏会のできる会場といえ  
ば、この近所では日比谷公会堂  
とこのホールだけ。毎週水曜？  
に交替で演奏会があり、いつで  
も満員の盛況だった。レイモン  
ド・コンデ、依田輝男、松本文  
彦たちのコンボ演奏はとくにし  
びれたもんだ。モダンのほかは  
ウエスタン、ハワイアンあり  
で、そうとう前TVでこのころ  
活躍したブレイヤーが演奏した  
けど懐かしかった。  
それからデンカのオフタイ  
ム。やはり国定だろうね。国電  
ガードの前に昔風の硝子戸のあ  
る二階だての寿司屋があって、

会議が終わると仲間と連れだっ  
て二階へ上がりこんで、飲んだ  
り歌ったり大変だった。おKち  
ゃんという小股の切れ上がった  
お姐さんがいて楽しかった。そ  
れとすぐ前のビルの地下にニュ  
ーアサヒ。ここで下地ができる  
と日劇前のグラウンドCへくりこ  
んだもんだ。そう、日劇といえ  
ば店じまいで、隣の朝日新聞と  
解体して新しいビルができるら  
しい。これで有楽町の名物もな  
くなり、昔の風情とはおさらば、  
淋しいじゃござんせんか!! さ  
あ、お酒もなくなっただし、ここ  
いらが潮どき。失礼しました。

に立って「そごうデパート」の  
方を見るとふとあの歌が思い出  
されてくる。  
残念なことには、現在、私は  
モグラのように地下鉄で通って  
いるため、有楽町界限を歩くの  
は昼食どきのわずかな時間しか  
なく、ときとしてその変化に驚  
かされている。この有楽町も今  
後いろいろな意味で変化してゆ  
くものと思われるが、一面では  
あまり変わってほしくない気が  
する。

銀座四丁目を出て数寄屋橋交差点を渡ると、中年男たちにもはっと安らぎと懐かしさをおぼえる界限、有楽町に出る。そこ



若い青春の血をかきたてた日劇

坂岡 俣治

〈加工技術研究所〉

# わたしと 有楽町



日比谷公園で蚊に喰われながらのピバーグ

田村 裕之

〈本社有機第一事業部〉

## 子供時代の思い出

——私の祖父が、銀座の三原橋の近くに住んでいた関係で、私は木挽町で生まれ、銀座、有

楽町は私の故郷といえよう。

——私は、よく一人でこの祖父母の家へ泊まりに行ったが、夜中進駐軍の戦車が走りさるキヤ

は、戦後いち早く再開された娯楽の殿堂日劇を中心に、ジャズやロカビリーのメッカとして、戦後の若者たちの青春の血をか

きたてた場所でもあった。また、宝塚劇場付近は、日本のブロードウェイと呼ばれ、ロードショウ映画や劇場などが集まり若い人たちにぎわう場所である。

昨年秋、朝日新聞社が築地へ移り、いままだ日劇がなくなるという。戦後の歴史を背負ってきたものが一つ一つ消えてゆくのは淋しい限りだ。かつて、銀座の流行を求め集まったフーテン族や、みゆき族がさまよったこの界限から、若者は新宿や原宿へ移り、いまは中年サラリー

マンたちが多忙な仕事の疲れをいやす夜のひとときを、鱈のタキのうまい店、ほろほろ鳥とやらの鍋料理をつつきながら人生を語らう。交通の面では銀座の玄関口であった国電有楽町駅は、近年地下鉄が縦横に走るようになり、大幅にその機能がかわってきた。

人の流れが変わり、人びとの表情も変わってきたようだ。私はまだ国電で本社に通勤していたころは、地上の駅を行きかう人びとの顔にはなんとなく人間味が感じられたものだが、千代

田線も開通し、地上の風景に接することもなく本社ビルに入るようになってからは、地下鉄の駅に降りた人びとの顔は、なんとなく無表情で冷たいように思えてならなかった。

江戸の初期、織田有楽斎（信長の弟）の屋敷があったことに由来する有楽町も、近代都市機能への対応のためにときの流れとともに変わらうしてゆくが、やはり私どもにとってはいつまでも「有楽町で逢いましょう」と、呼びかけてくるような町であって欲しいものである。

タピラの音に子供心にも戦争の恐ろしさを感じた。

——たしか日比谷公園が高い金網で囲まれており、その中で行なわれた風上げ大会に、よく祖父に連れられて行った。

——三原橋が埋め立てられ、そこにできた映画館へ甥と小使いをもらい、よくニュース映画を見に行った。この想い出深い映画館も、いまはもっぱらピンク映画専門のようで、その後一度も行ったことはない。

——また、当時私は池袋に住んでおり、当地までの足は池袋

数寄屋橋間のチンチン電車（別名「都電」）を受用していた。

## 青春時代の思い出

——ある夏、日比谷公園の野外音楽堂のベンチで蚊に喰われながらピバーグ（露営）し、乞食（この言葉に支障あれば同所常住者の方）のオッチャンに誉められた（?）。

——また、同、悪友が夏の暑さに気が狂い、神聖なるお濠りに飛び込み、警察官から嚴重なるお小言を頂戴した。

オジンと呼ばれる時代の想い出（現在進行中）

——三信ビルの正面玄関の階段が入社時にくらべ何段か高くなり、さらに高くなりつつある。

——有楽町駅前の飲食街、スバル街がなくなり、さらにまた朝日生命会館が取り壊されつつある。

——ガード下の日の基酒場のホッピーと煮込みの値段が上がり、さらに今後も上がり続けるであろう。

——本社勤務が続く、本社が当地を離れぬ限り、新しい有楽町の想い出がまたまた生まれてくるであろう。

# 日比谷物語

三井グループ“三友新聞”連載

山岸 弘明



# ① 太田道灌と江戸

のりや貝をひき、魚をとってほぼほと暮らした入江が一変して大名屋敷となり、明治維新では練兵場や兵舎に、そしてわが国近代産業のいぶきが…

…日比谷の今昔は激しい日本史の移り替わりそのものでもあった。

東京都庁正面に据えられた太田道灌像。東京がはじめて都市としての端緒をひらいた江戸城創設者。長祿二年（一四四〇）四月というから今から五百数十年前の昔のことである。

当時の江戸城は後世のものとはくらべものにならないほど粗末で、石垣もなく土塁をめぐらせただけであった。太田道灌の有名な歌に、「わが庵は松原つづく海近く富士の高嶺を軒下にぞみる」がある。江戸は台地と入江が入り組んだ複雑な地形で、その中でもっとも大きかったのが日比谷入江である。現在の新橋駅から有楽町をへて東京都庁あたりまでのび、西新橋から日比谷公園、日比谷公園、丸の内、丁目、東京駅にかけてアシの草原のひろがった海岸線がつづいていく。

日比谷の地名も漁師がのりや魚をとるために海中にたてた竹のヒシからきたもので、波静かで遠浅な入江であったといふ。

道灌はこの日比谷をみおろす高台にあって、東京駅から丸の内一、二丁目へとつづいた松林と美しい富士山をながめてうたった。

道灌当時の長祿江戸図、その後の水練（一五五八）江戸図、元龜天正（一五七〇）江戸辺之図をみる

ここにいう日比谷村は現在の西新橋日比谷シティあたり、桜田村は龍が関、下川村は皇居外苑のほぼ中央になる。

江戸城を作った太田氏は源頼政の出という。はじめ関東管領・上杉家の若党であったが、永享のころから頭角を現わして相模守護代となり、享徳の乱のとき江戸城を築いて古河公方成氏に備えた。後にわが国政の中心地となる江戸城のはじめでもあった。道灌は江戸を拠点に武蔵・相模の各地で成氏と転戦、武名は日を追って高まったが、この道灌も文明十八年（一四八六）、太田氏の主君であった上杉

杉定正によってあえやく暗殺されている。

# ② 秀吉の天下統一

太田道灌が歿した十五世紀後半から十六世紀後半までの百年間は戦雲の動乱がつづく戦国時代である。道灌の暗殺事件を契機に起った山内・扇ヶ谷岡上杉氏の争いの間隙をぬって、江戸は大永四年（一五二四）北條氏綱におち、戦国の乱世が夢のよまな平和な毎日がつづいた。

戦国時代、百年間の動乱の世界を救ったのが織田信長である。信長は今川義元を桶狭間に破って力をつけ、以来天下統一にむけて邁進する。天正四年（一五七六）近畿一円を制圧して安土城を作り、東は徳川家康と結んで固め、自らは西に向かって勢力を拡大する。だれの目にも天下統一が目前と思われたが、天正十年六月、明智光秀の謀反にあってあえなくも本能寺に散った。

信長の後をひきついだのが豊臣秀吉。秀吉は信長の天下統一を助け、自らも有力武将としての地位を確保していったが、光秀を討ちとってからは信長亡き後の天下統一に向けて歩みだす。いったんは家康と対立して戦って敗れるという危機も経験するが、やがて妹や母を人質とする思い切った外交手段を發揮して家康を臣従させていった。

こうした中央の動きに、ひとり江戸の町が無縁でいられるはずはなかった。天正十五年、秀吉は関東の諸大名に私戦を禁じ、小田原にあった北條氏政・氏直に上落をうながしたが、父子はこれを拒否

する思い切った外交手段を發揮して家康を臣従させていった。

こうした中央の動きに、ひとり江戸の町が無縁でいられるはずはなかった。

天正十五年、秀吉は関東の諸大名に私戦を禁じ、小田原にあった北條氏政・氏直に上落をうながしたが、父子はこれを拒否

する思い切った外交手段を發揮して家康を臣従させていった。

こうした中央の動きに、ひとり江戸の町が無縁でいられるはずはなかった。

天正十七年十一月、秀吉にとって残された最後の攻勢目標となった小田原城征伐の断が下された。翌十八年六月、全国二十万の大軍を率いた秀吉軍が小田原城を完全包囲する。さしもの北條氏も七月五日、氏政が自刃、氏直が投降する。百年間にあつた関東支配がこうして幕を降ろした。



道灌時代の長祿江戸図



北条氏時代の江戸辺之図

前のごとであった。北條から徳川へ、この日を境に江戸は大きく変身をとげる。

### ③ 家康、江戸入り

小田原征伐の論功行賞で徳川家康に北条氏の関東六カ国が正式に与えられたのは北条氏滅亡の翌日、天正十七年（一五八九）の七月十三日のことであつた。

この因替えは家康にとつて、生田を追われ、都からますます遠い未開地に移されるわけで、重臣たちの激しい反対を押し切つての江戸入りであつた。

家康にとつても、時の天下人・豊臣秀吉の命令は絶対で、この苦しみを徳川政権へと生かすのである。

江戸城は幸い戦火を免がれ、城内には遠山氏やその家臣の侍屋敷が残つていたが、いずれも粉飾（そぎぶき）で、ひどく古く、しかも随分荒れていたらしく、

みかねた側近の本多正信が「他國の使者もくるのだからせめて玄關まわりだけでも」と改築を進言したが笑つてとりあわなかつたといふ。

知行割が行なわれる。榊原康政は鶴林に、井伊直政箕輪、北條氏の本拠小田原には大久保忠

世を。譜代の重臣を配して守りを固める。八、九月にかけて江戸屋敷も賜邸された。

江戸入りしたばかりであつたが、このころの家康にはゆつくりと国づくり、城づくりにかける余裕がなかつた。この年奥州に出陣、転じて上京し、文祿元年（一五九二）からの一年半、秀吉の朝鮮出兵のため肥前名護屋にあつた。江戸が飛躍をとげるのはさうした後のことである。

### ④ すすむ町づくり

出陣のつづく徳川家康にかわつて江戸城の普請や町づくりをすめたのは、もっぱらその子・秀忠や家臣の本多正信、板倉勝重らである。家康の関東経営で重要だつたのは、このほか伊奈忠次や大久保長安といった技術者を次々に登用したことであつた。

天正十八年（一五九〇）、日比谷入江から江戸城に通する道三堀と上水道工事が行なわれた。堀は建設費材や生活物資を江戸へ運びこむのに便利で、飲料水の乏しい江戸の町づくりに上水道の普及もかかせない。

道三堀は現在の「三麦村」の一角（丸の内・千鳥）、上水道は小石川沼から水を引いた神田上水のはじまりである。

工事がすすむと道三堀周辺は、江戸最初のにぎわいを見せている。材木店や回船問屋がならび、工事のための人夫、商人が江戸へ集まつてくる。当時の記録をみると、江戸町、舟町、内町に加え、遊女町が出現している。

文祿元年（一五九二）ようやく江戸城の本格修復工事がかかる。家康江戸入り後三年目のことである。翌三年三月には西の丸が完成、この時の揚げ土は量外濠などの日比谷入江周辺の整地に使われた。このころには江戸城周辺のあし原も払われ、ようやく城下町らしくなつて

いる。

この西の丸は家康の隠居城とされたが、当の家康は留守がちでほとんど在城することがなかつた。

文祿元年、豊臣秀吉は全国の名臣に命令して、朝鮮出兵を行なつた。当初は小西行長、加藤清正らの率いる日本軍が急進するが、やがて戦局は停滞する。講和交渉も失敗した慶長二年（一五四七）再び朝鮮派兵を決行するが、戦局好転の気配もなく、栄華を極めた豊臣家もつしりと重い暗雲がたがよいはじめ。

いつたは秀吉の後継者に選んだ養子・秀次には自刃を命じ、実子・秀頼は幼ない。秀吉

は家康に日本の将来と豊臣家の後見を依頼する。

### ⑤ 別本慶長江戸図

露と落ち露と消えぬるが身かな、浪花のことは夢のまた夢。慶長三年（一五九八）八月豊臣秀吉が静かに息を引きとつた。

秀吉の後は幼ない秀頼が前田利家をもり役として継ぎ、家康は五大老筆頭として政務をとる。まず秀吉の死を伏せながらの朝鮮撤兵。表面上は何ごともなく進んだが、五奉行筆頭の石田三成と武断派、三成と家康の対立は日を追つて深まつてい

た。

慶長三年の江戸を伝える別本慶長江戸図がある。家康が江戸入りしてわずか八年だが、江戸城を中心に土衆隠敷、町人住民と江戸の町がひろがる。日比谷は依然海中とはいえ、周辺の様相が大きく変わつて

いる。

現在の西新橋・日比谷シティあたりが町人住居。魚屋、酒屋、板屋などいろいろある。日比谷公園は、町人物あけ所、皇居外苑をみると、交差点寄り相模の中島殿、現存する写しの中に里見権鶴としたものがある。梅鶴は安房守忠義の幼名。里見氏は清和源氏新田氏流で、はじめ上総、下総、安房三国を

慶長三年の江戸（別本慶長江戸図）



## ⑥ 関ヶ原の合戦

前田利家が死んだ慶長四年（一五九九）閏三月三日、石田三成が加藤清正、黒田長政らに襲撃されるといふ事件が起つた。このときはあろうことが、ライバル・家康に保護を求め、この結果、三成は居城・佐和山に移つて隠居することになつた。

こうして反対派を二掃した家康は、直ちに豊臣政権の中心地であつた伏見城に入り、さらに半年後には大阪城内に豊臣秀頼の木丸をしのぐ、西の丸太守團を作つて政務をとることになる。これはすでに大老としての域をこえたものであつた。

秀吉なき後の天下人はたれか先見の明をもつた碩大名のなかに、徳川政権をみこして人質を江戸へ差したものが現われてゐる。江戸城の設計者ともいわれる藤堂高虎は慶長元年、秀吉存命中に、そして慶長四年には利家なきあと大老職を継いだ前田利長、謀反のうわさが立つと家康の要請を受けて牛母・芳春院を江戸へさし出した。

この年、堀秀治、淺野長政、細川忠興らが子供や母親を送り、家康に異心のないことを証明している。こうして江戸には人質やご気難伺いにてく

る大名が潜存するための大名屋敷が築かれる。

慶長四年のこの年、上杉景勝に謀反のうわさがたつた。前田家の成功に味をしめた家康の作戦であつたともいうが、結果は意外な展開をみせることになつた。家康はこのうわさを受けて「無事なら上落して釈明するよう」に通告するが、景勝はこれを無視、五年六月、家康は上杉征伐を決議。福島正則、黒田長政、加藤嘉明らのいわゆる武断派諸將を率いて東下を開始した。

一方大阪では、会津征伐の際を狙つた石田三成、毛利輝元、小西行長らの西軍が挙兵する。三成軍はまず家康のいた京都伏見城をはじめ東軍諸大名の城を攻め、大垣を前線基地に、そして一気に徳川軍との決戦体制が整つた。

小山で三成らの挙兵を知つた家康軍はただちに西軍討伐を決める。会津征伐軍がそのまま東軍に早変わりしたのである。九月十五日、両軍は関ヶ原に

対峙した。東軍七万四千、西軍八万三千。天下分けめといわれ、関ヶ原の朝が静かに開いた。

## ⑦ 日比谷の初代住民

関ヶ原の合戦は慶長五年（一六〇〇）九月十五日の朝八時から火ぶたが切られた。戦況は昼ごろまで互格。しかし、西軍には秀吉の旧恩にむくいたいという請いに断られ切れずに参戦した大名も多く、小早川秀秋が東軍に寝返つたことで総崩れとなつた。

家康はこの合戦の勝利で文字どおり天下人となる。戦後の論功行賞では東軍に味方した諸將はいずれも優遇されて所領を増やしたのに対して、西軍に加担した大名の処遇は苛酷を極めている。石田三成、小西行長、宇喜多秀家の領地は当然没収され、家も滅んだ。毛利秀元は中国地方の八カ国を削られ、上杉景勝は会津百、千石石から米沢三千石へと大幅減封された。

このとき改易または減封された大名は九十三名、六百三十万石ものほり、これらは東軍に属して功勞のあつた外様大名や徳川一門、譜代大名に分け与えたり、自らの直轄領としていた。

関ヶ原合戦の勝利で、江戸は

領したが、小田原征伐に連参して一方国を返上させられた。忠義は父・義康の命を受けた人質で、以降徳川方についたが、慶長十九年（一六四四）に改易された大久保忠隣の娘を妻としたため、これに連座して安房を没収、倉吉に移された。元和八年（一六三〇）二十九歳で没し、さしもの名門家も滅びてゐる。忠義に殉じた八人の家臣の遺児が活躍する瀧沢馬廻車見八太伝はあまりにも有名である。

里見氏の奥は本多殿。幼少から家康の側近として実務的手腕を発揮した佐渡守正信である。正信には戦場での働きがなかった。武功派の勇將たちには軽視されたが、家康の信任が厚く、新しい町づくりをすすめる

とともに老中職として政務全般を担当した。日比谷入江をのぼると荷物あげ場、頭方人数居所、人寄所、僧正殿とつづいてゐる。僧正は小説などで知られる天海僧正である。家康ブレインの一員として寺社行政を担当、家康の死後、東照大権現の号を決め、東照宮を造営してゐる。

さて、家康と三成の対立は同じ五大老の一人、前田利家の死で一気にバランスを失ふことになる。決戦へ、政局は再び急転する。

副都としてのにぎわいをみせることとなる。慶長六年十月、東軍の旗で、その娘を家康の六男忠輝にとつがせ、以采親政づきあいのあった伊達政宗が日比谷の第一号住居として移居する。現在の日比谷公園交差点寄り第一花壇の一画である。

慶長七、八年

にかけて関ヶ原の合戦で西軍について滅封された外様大名が次々に人質をさしだし、日比谷には鍋島直茂と毛利輝元が賜邸されている。

鍋島は日比谷公園正面入口の大噴水周辺で、毛利は東東地蔵寄りテニスコートの一画。上杉景勝、黒田長政、島津義弘、加藤清正、南部信直らの諸将も桜田から霞ヶ関にかけて賜邸されている。

このあたりに外様大名が多いのは、油断ならぬ外様大名をこの低地に集めたからで、榊原康政は上野公園に、井伊直政は西の丸つぎの外桜田の高台、など譜代諸侯には江戸防備上の重要ポイントに配することも怠っていないのである。

⑧ 伊達政宗

慶長六、八年、外様大名が賜邸を受けた日比谷から外桜田、霞ヶ関にかけての一番は低地で砂地が多く、埋立て工事が進められていたとはいえず、満足な宅地造成もできていないデコボコ地であったらしい。敷地を揮領した諸大名は、お堀のあげ土などをもらって土地をならし、屋敷作りを行なっている。

人質をさしだし、徳川家に恭順の意を表わすのが大名屋敷の存在理由であったので、諸大名は一心のないことを表わす手段として、颯々豪華な江戸屋敷建設を進める。江戸初期の大名屋敷は、一国一城の主を意識した豪華華麗な桃山風建築がならんだ。

日比谷初代住民のなかで、もっとも特色ある大名といえは伊達政宗である。伊達氏は藤原北家流で中納言山藤の後裔にあたる。朝宗のとき源頼朝にしたがって奥州征伐に加わって伊達郡を与えられ姓とした。植宗のとき陸奥国守護職となり、さらに晴宗のとき居城を米沢に移した。その孫が伊達累世を代表する英雄であり、近世大名伊達藩の藩祖となつた政宗である。

政宗は細腰のため片目を失ない、独眼竜と呼ばれた。永禄十年(一五六七)生まれで、

天正十一年(一五八四)には父の遺領を継いだ。翌十三年十月、阿武隈河原で父輝宗を、二本松城主の畠山義継もともに撃ち殺した。その後、周囲の反伊達勢力を次々と倒して所領をひろげたが、十八年、中央を制した豊臣秀吉が小田原征伐を行なったとき、参陣が遅れ領地の一部を没収され、豊臣政権の中で立場が微妙であった。

その政宗が徳川時代の大々名として生き残るようになったのは、秀吉の没後、家康とガッチリ手を結んだからである。慶長五年(一六〇〇)五月、上杉景勝が会津で挙兵したとき、家康の命を受けて出陣、白石城を落として、大坂夏の陣では通明寺口で後藤基次、薄田兼相を討った。その後、加増をくりかえし陸奥六十二万石の太守におさまっている。

⑨ 日比谷の伊達邸

慶長寛永期、日比谷公園の交差点寄り第一花壇の一画にあった伊達邸は、一般に慶長六年(一六〇一)十月に賜邸されたことになっている。『貞上公治家文書』などには、同年一応の居所となり、十一年に正式賜邸されたことあり、『寛政重修諸家譜』をみると、五年三月、江戸

の政宗邸を家康が訪問してい

る。両家の親密さを考えれば、関ヶ原の合戦前から江戸屋敷をもつていたことも考えられる。伊達家にはその後もたびたびのお成りがあった。家康が將軍となつた八年十二月十日、先に火災あり、新しい教習屋で点茶を献じ、散宴を、とある。先の火災とは六年閏十二月の駿河町火災のことだろう。このときは江戸のほとんど全市を焼いている。

八年のお成りでは、太刀、白銀、馬などを賜わり、政宗も太刀、馬などを献上している。十二年、二代將軍・秀忠がお成り、寛永元年三月、三代將軍・家光がお成り。このように伊達邸には將軍家のお成りがしばしばくりかえされ、外様大名とはいえ、伊達家の扱いは別格といえた。

慶長年間、桜田には有力な外様大名屋敷が並んで、それぞれに絢爛の美を顯つたが、なかでもきわだった美しさをみせたのが、この伊達邸であった。有力大名屋敷は式正御成といつて、將軍家のお成りに備えた建物を作つたが、数多いお成りを受けた伊達邸はぐく豪華だった。

橋門の表門のほか、金箔の彫刻をほどこしたお成り門があった。あまりの美しさにみとれると時間のたつのも忘れるところから日暮門の名も。



伊達政宗画像(仙台市博物館蔵)

伊達邸には大広間、小広間、お成り書院、小書院、ご座間、数寄屋など正式正御成りに必要な部屋が揃い、千帖敷きといわれた大広間がとくに有名であった。もともこの大広間は慶長十九年八月の台風で倒れ、さらに元和元年九月毛利邸出火、元和七年一月屋敷邸出火、寛永十二年七月島津邸出火があり、いずれももらい火で全焼した。あいつく火災にその都度、屋敷の立て直しが行なわれた。

### ⑩ 伊達騒動

寛永十三年（一六三六）五月、伊達政宗は病いで倒れたが、このとき三代将軍・家光自らが日比谷公園の上屋敷に見舞い、二十四日墓石効なく七十歳の生涯を閉じた。『曇りなき心の月を先たてて浄世の間を照らしてま行く』政宗の辞世の句であった。

二代目は、男の越前守（陸奥守）忠宗が継いだ。長男の秀宗は早くから別家を興し、宇和島藩の藩祖になっていた。忠宗は慶長四年の生れだから、この年三十七歳。『寛政重修諸家譜』などによれば、幼ないころから家康、秀忠、家光の三將軍のお成りがあり、そのつど太刀や時服などを拝領している。現在の帝國ホテルは当時、伊達家の中

屋敷。寛永期の江戸図に松平越前とあるのはこの忠宗である。万治元年（一六五八）六十歳で死去。

忠宗の後、仙台六十五万石の太守を継いだ陸奥守綱宗が日比谷伊達邸の当主になったのはわずか二年のことだが、伊達家にとつて思いもかけない大騒動を巻き起こしている。夜毎、遊女通いに興じていた綱宗が、川舟の中で吉原三浦屋の高尾大夫をまづ二つに切り捨てたという不祥事を起したのは、万治三年（一六六〇）五月のことであった。

伊達藩は当時、幕命で小石川堀の埋立て工事を請けて莫大な工費を必要としており、藩内はぐらついた。やがてこの事件は伊達騒動へと発展する。江戸家老・伊達兵部は綱宗を失脚させるための陰謀だとし、一万国家老・伊達安芸は四代当主を狙う兵部の謀略とした。このときは幕府の評定で綱宗の隠居通算を決める。綱宗、二十一歳。隠居後は喜心と号して七十二歳の余世を送っている。

万治三年七月、わずか二歳の龜牛代、後の陸奥守綱村が継いだ。伊達家は明暦三年（一六五七）五月中屋敷を、万治四年（一六六二）二月に上屋敷の屋敷替えがあつて日比谷を去つたが、その後も幼君継嗣未遂事件など激しい内紛が続き、寛文

十一年（一六七二）三月がクライマックスに。この日、権勢をきわめた伊達兵部を糾弾する幕府評定が行なわれたが、席上、兵部が反対派の伊達安芸を斬殺、自らも殺害されるという異常なハブニングで結末を迎える。

### ⑪ 佐賀の鍋島

佐賀の鍋島藩といえは、講談の化け猫騒動や竜造寺事件で知られているが、その鍋島家上屋敷が日比谷公園の正面入口にあつた。

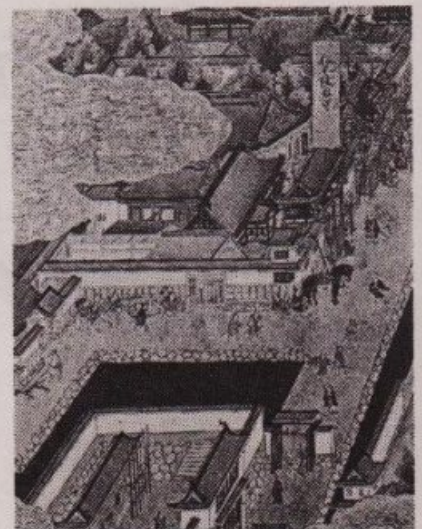
鍋島氏は藤原氏の出で、鍋島に土着して代々竜造寺家に仕えたが、やがてその竜造寺に替わつて佐賀三十五万石を領有する。鍋島家藩祖の直茂は天正七年（一五七九）生まれで、義理の兄でもあつた竜造寺隆信と政家をたすけたが、政家が豊臣秀吉の不興を受けて隠居すると、幼ない高房を見限りして竜造寺領を預かる。

直茂は秀吉の下でどんどんど頭角をあらわす。島津攻めや朝鮮出兵で抜群の功名をあげたが、この直茂も関ヶ原の合戦で西軍に味方したため存亡のピンチに陥つた。戦後福岡の柳川に立花宗茂を攻め、養子となつていた竜造寺高房と勝茂を江戸に差したことでようやく許されてい

る。高房は戦国の荒波に翻弄されたヒロインでもあつた。竜造寺の嫡子として生まれたものの、すでに旧領は養父の鍋島家の手中に握られ、土蔵のとき豊臣秀吉の人質、この時（一六〇三）さらに江戸に回されていた。高房はいつまでも所領を返さない直茂を恨んでアイロイセとなり、慶長十一年（一六〇七）日比谷邸で自殺して竜造寺家はつひ

佐賀三十五万石の藩主は、慶長十一年から直茂の実子信濃守勝茂が継ぐ。勝茂は竜造寺一門の統制強化をすすめる一方、築後川の堤防建設、灌漑事業、上水運建設をはかり、後に十二万石を打出す。

勝茂はさらに鹿島、小城、蓮池の三支藩とご親類四家を作る。こうして明暦期までに藩体制は確立するが、次の丹後守光茂の時、元祿の消費経済がすすんで藩財政は逼迫する。元禄八年の藩借入金は合わせて銀二万三千貫に及び、享保期には武断政



日比谷の伊達邸（国立歴史民俗博物館蔵）



江戸図屏風にみる鍋島藩上屋敷（国立歴史民俗博物館蔵）

治による藩政改革に取り組み、鍋島家は光茂のあと、元禄八年（一六九五）から信濃守綱茂、宝永四年（一七〇七）から丹後守吉茂が継ぎ、元禄期の一時を除いて幕末までの二百六十年間、日比谷に住んでいる。

### ⑫ 西軍の総大将

長州毛利家は戦国時代には中国地方八カ国を領有した大々名であったが、関ヶ原の一戦に敗れ三十六万石におとされる。このときの徳川幕府への怨みが二百六十年後の維新革命へのエネルギーにも。

二度にわたった徳川との争いでも一方の主役をつとめることになった長州（山口県）毛利藩邸も日比谷公園の裁判所まりにあった。

毛利氏の祖先は鎌倉幕府の功臣大江忠房といひ、その子孫が吉田に定住した。毛利を大々名に押しあげたのは元就である。二百貫の地から身を起し、肥子・大内両家を破って中国を平定する。その孫輝元は豊臣秀吉五大老の一人として百十五万石を領有していた。

関ヶ原の合戦では西軍の総大将として大阪城へ入場したが、この反徳川勢力が江戸時代の大大々名として残ったのは、決戦前

に届いた本多忠勝・井伊直政からの和議状による。毛利勢は合戦が始まって一戦も交じえず関ヶ原を退去し、このことが関ヶ原の勝敗を決めた。

この結果、毛利家では領国が安堵されるものと信じた。

しかし、戦後、旧領八カ国のうち六カ国を没収され、輝元には隠居を命ぜられる。嫡子・秀就は周防、長門、二十九万石に封ぜられたが、この長門守秀就が日比谷公園の初代住民である。

秀就の最初の難関は、百十二万石から十九万石への削封にともなう家臣団の再編成と六カ国返租問題であった。このときの毛利家知行高削減率は八〇%で、このため家臣の生活は非常に苦しいものとなったが、さらに追い打ちをかけたのが返租だ。毛利家ではこの年の租米をすでに徴収していたため、新たに封じられた領主から既収租米を弁償させられたのである。この財政危機は、父子を毛利家の滅亡はいまにきわまったと嘆かせたという。

しかし、秀就は慶長十三年、萩に新城をつくり、さらに三年間にわたる厳しい検地を行なう一方、春に年貢を決める春定の法を採用する。慶安四年（一六五二）秀就が没すると、その子大膳大夫綱広が継ぎ、万治三年（一六六〇）当家制法々々を公

布して藩体制を確立している。綱広は天和二年（一六八二）隠居して、次は長門守吉成、元禄七年（一六九四）から大膳大夫吉広、宝永四年（一七〇七）から長門守吉元となるが、吉元は藩内の人づくりをめざして藩校明倫館を建設している。利家はその後、二百六十年間日比谷にあった。

### ⑬ 入江の埋立て

慶長八年（一六〇三）二月、徳川家康は征夷大将軍に任命された。家康にとっては晴れて全国の大諸大名を征服することになったわけだが、これを契機に名実ともに江戸を中心とした新しい支配体制を展開する。

町づくりも急ピッチではじまる。この年、日比谷入江の埋立てを含む江戸港整備、翌九年から豪華壯麗な江戸城築城に着手。新將軍の威光天下に示すためにも、日本一の江戸城づくりが不可欠であった。

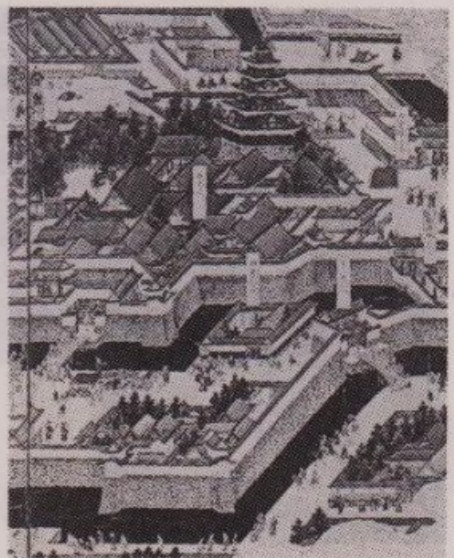
日比谷のあけほのともいえる日比谷入江の埋立ては、江戸城構築のため全国から運ばれる建築資材荷上げ用江戸港整備が主目的でもあった。この時の工事は天下普請で幕府から命令された諸大名が石高千石について十人ずつの人力を出しあったこと

から、千石夫ともいわれられている。神田山を切りくずした土が、日比谷入江に運ばれた。築城工事は外様大名二十八家の負担ではじまった。この工事は以後毎年のようにくりがえされ、二十年後の寛永年間に入つてようやく完成する。本丸を中心にした二の丸、三の丸、西の丸、大手、日比谷とうすまき状に伸びる複雑な築城法は、難攻不落の名城とされている。

慶長十一年（一六〇六）一説に十二年ともいう）の江戸絵図が現存する。この図には江戸城から日比谷までの城郭内が記載されているが、これによると現在、皇居外苑となつている西の丸と日比谷には譜代大名がつつき、丸の内周辺には外様大名が軒を並べている。日比谷は西に日比谷濠（現存）、東は現在高速度道路となつている。外堀に囲まれ、外堀は日比谷公園の心字池から日生ビル、宝塚の南はじを通過して高速度に通じていた。

これより新橋寄りの帝國ホテルや日比谷公園については記載されていないが、第七回で紹介した伊達、鍋島、毛利のほか、伊達政宗の嫡子忠宗邸、藤原（馬見島）七十五万石の島津義弘邸があった。

江戸城（江戸図屏風―歴史民俗博物館蔵より）



られた日比谷市街は、その後三百年後の関東大震災まではほとんど変わることがなかった。

⑭ 慶長江戸絵図

日比谷入江の埋立は慶長八年(一六〇三)の市街大改修だが、初代住民の帰郷もこの年行なわれた。三年後の慶長十一年江戸絵図をみよう。

三井・三信ビル前の日比谷通りが家康イトコの水野市正。三井ビル周辺が茨城県土浦三万五千石松平藤井伊豆守、ニュートキーヨからガードの一面が三重県の鳥羽五万六千石丸鬼長門守、朝日生命・ツイントワーパークビルが栃木県の宇都宮十萬石奥平大膳大夫。

日比谷交差点から有楽町駅寄りには、ニッポン放送、豊林中金、第一生命ビルが羽葉伊達遠江守、独眼竜・伊達政宗の長男で別家を興し、愛媛県の宇和島十萬石に。有楽町ビル、新有楽町ビルが松平奥平飛騨守、岐阜県の加納十萬石。電気ビルは空屋になっている。これ以前に初代住民があったと考えられるが、明らかにできない。

有楽町駅周辺では有楽町マリオンと朝日街には森蘭丸の弟羽葉美作守、そことう有楽町駅の一部には桑山伊賀守、交通会館

堀田因幡守、そして第一勧銀宝くじ部周辺には竹中伊豆守があった。

丸の内三丁目をみると国際ビル、新国際ビル

には羽柴左衛門大夫の名前がみえる。後改易された悲運の武将・福島正則邸である。つづく東京会館、富士ビル日比谷寄り

が、牧野伊予守。東横ビルと富士ビル一部が空屋で新東京ビルは浅野紀伊守。

また、都庁には森伊勢守、山内対馬守、彦坂小刑部があり、皇居外苑の日比谷寄りには里見守房守、戸島主膳、谷六右衛門、加々爪甚十郎、阿部左馬助、松平和泉守、井上右近、牧野駿河守など大小名が名前を連ねている。

この図から寛永期までの江戸図には、三信ビルから東横ビルまでの日比谷通りに一列に町屋が並んでいる。食料品、雑貨を商う商店街であったが寛永五年(一六二八)二月大火後の城下再編で京橋に替地させられた。

⑮ 大番頭水野市正

慶長八年(一六〇三)の埋立て以来、日比谷には中堅クラスの譜代大名が集まったが、初期の大名屋敷は外様大名のそれとくらべると地味で、二、三千坪の屋敷に表門も長屋門がほとんどであった。

慶長十一年『慶長江戸絵図』にみる日比谷初代住民の一人に、譜代の小大名水野市正忠胤がある。三井・三信ビル前の日比谷通りに六年間住んだ。

水野家は家康生母の実家という名門だ。家康の幼い期、於大の実家であったこの水野家が今川から織田へくら替えしたため離別の悲話も、母子はやがて涙の対面をはたす。

忠胤の父忠重は於大の弟だから家康とはイトコ同士。於大の兄弟はやがて徳川譜代大名として重きをなすが、忠重も愛知県刈谷三万石、三重県の神戸四万石に取立てられている。

茨城県の結城藩祖・勝成は忠胤の兄。兄弟は慶長五年の関ヶ原の合戦で大垣城を攻め、その功で勝成は備後・備中十萬石を得、忠胤も三河国内(愛知県)で二萬石が与えられ、大番頭となった。

大番頭は戦時は先鋒として敵に切り込み、常時は將軍を直接

警護する幕府武官の代表職である。大番頭はその長。その働きが直接勝敗に結びつくことから五千石から一萬九千石で、家柄や人柄のすぐれた勇將が選ばれた。

この忠胤は実にささいなことから轍籠を招く。慶長十四年九月、浜松五萬石の藩主松平桜井忠頼を招待して自宅で宴会を行なったが、このとき配下の大番士が忠頼を殺害するという事件が起こった。『寛政重修諸家譜』では「与力の久米左平次某が服部半八郎と武道の事を言い争いて刃傷におよび、忠頼これをささえむとして左平次のために告せられる」とある。この事件に連座した忠胤は事件一カ月後に切腹を命じられている。

松平一族といえは十八松平が知られるが、一族のなかでもっとも家康に近く、その活躍を支えたのは松平藤井家だ。藤井家は家康四代の祖・松平長親の五男利長にはじまる。二代宮一の時、關東入国に従い、関ヶ原の合戦で岐阜県の土浦三萬五千石を受ける。

その子伊豆守信吉が三井ビル周辺の初代住民で、慶長八年(一六〇三)ころから延宝九年



慶長江戸図の日比谷付近

(一六八〇)まで在任している。

日比谷時代の八十年間は家康の縁につながって出世街道を邁進する。大阪の陣などで次々に累増、封地も群馬県の高崎、兵庫県の笹山、同じ兵庫県の明石、奈良県の郡山と変わり、五代信之のとき茨城県の高河で九万石を領有していた。

二代の山城守忠国は藤井家にとつて一番幸運な時代に育っている。慶長十四年に二代將軍秀忠の御前で元服し、この時秀忠の一字をもらって忠国を名乗り、元和九年三代將軍家光の將軍宣下拝賀参内では左方列首を、正保三年の五代將軍綱吉誕生時には御筈の役を仰せつかるなど、將軍一族として厚遇される。

次の日向守信之は幕閣として活躍する。五代將軍綱吉の初期の幕政を補佐した堀田正俊は賞罰厳明をと見え、幕府財政の健全化と農民統制強化をはかる。いわゆる天和の治であったが、一方ではその強引な改革に不満も高まっていた。貞享元年(一六八五)若年寄稲葉正休が江戸城内でこの正俊を殺害する。

信之はこの事件直後の二年六月から一年間老中に。幕政はやがて牧野成貞、柳沢吉保などの側用人政治に変わっていくのであった。

### ⑩二分された九鬼

やきとり横丁で有名な有楽町ガード下、ニュートーキョーの一面は水軍で有名な九鬼長門守守隆が初代住民である。九鬼氏は熊野湾に面した九鬼浦の豪族で、当時は村上をはじめどの水軍も海賊まがいのことをやって生活していた。九鬼がほかの水軍と異なつたのは、中央政権と結びついたことだろう。

守隆の父嘉隆は織田信長の水軍となり、のち豊臣秀吉に仕え、四国、九州、朝鮮の役などで働いて志摩・伊勢(三重県)三万五千石を領した。この親子は関ヶ原の合戦で直接刃をかわす皮肉な運命にある。守隆は上杉征伐以来、徳川方の一員として西下したが、一方の嘉隆は石田三成に組して鳥羽城にあった。ここで親子が戦い、西軍が敗れると嘉隆は自刃して果て、守隆は五万六千石を領有する。

大阪冬の陣では、九鬼水軍の面目を見せつける。大船一艘、安宅船五艘、早船五十艘を連れて伝帆口に攻め寄せ、鉄砲を打ちこんで敵兵を追い払った。この守隆が寛永九年(一六三三)に逝去すると、九鬼家お家騒動が起つている。守隆には良隆、貞隆、隆孝、久隆の四子があつたが、貞隆は早世し、良隆

は病弱のため嫡子を辞したのので、一度宗門にあつた久隆が避俗して家督を継ぐことになる。ところが、別家をたてていた隆秀が宗家相続を主張したので、九鬼家は両派にわかれてお家騒動を展開する。この争いは幕府裁許の結果、久隆は父遺領のうち三万石を没収され、兵庫県の三田三万石に転封、敗訴となつた隆秀は一旦所領没収のうえ改めて京都府の綾部二万石に取立てられた。幕府はお家騒動を口実に九鬼水軍を二分したのである。

大和守久隆は鍛冶橋門、虎の門石垣普請を命ぜられ、慶安二年(一六四九年)三十一歳で逝去。三代目はわずかに三歳の長門守隆昌がつき、寛文九年(一六六九)養子・和泉守隆律、貞享三年(一六八六)再び養子・長門守副隆を迎えた元禄四年(一六九一)屋敷替えがあつて日比谷を去っている。

晴海通りをはさんで朝日生命ビル、東宝ツインタワービル、日比谷パークビルの初代住民は徳川家功臣の一人、奥平大膳大夫家昌である。家昌の父信昌の生きざまは、戦国大名から近世大名への歩みそのものだ。

### ⑪徳川功臣の奥平

信昌ははじめ今川に属し、義元の死後家康方となり、一時は武田信玄の攻勢にあつて武田にも組したが信玄以後、徳川方に再びくつら替へした。

この人が家康の信頼を得たのは天正二年(一五七五)の長篠の戦いであつた。この戦いの直前、武田勝頼は信昌の離反を怒り、人質の弟平兵衛を処刑していた。信昌は武田勢の猛攻を受け、長篠城を死守して織田・徳川連合軍を勝利に導く。戦後、信長から名前の一字を与えられ、十年には旧領と遠江の一部を、さらに小牧・長久手の戦いで百余級をあげて秀吉から美作守に推されている。

初代住民の家昌はその信昌と家康長女亀姫との長男。家康にとつて初孫になる。四才の時御前元服、家康の一字を貰つて家昌を。関ヶ原の合戦は秀忠に従つて木曾路を攻め、慶長六年には栃木県の宇都宮で十方石を与えられ、八年(一六〇三)で日比谷賜邸を受けた。

次的美作守忠昌は元和五年(一六一九)十月、一万石の加増があつて茨城県の古河へ国替えとなるが、三年後の七年八月には旧領に戻り、寛文八年(一六六八)逝去。この時、これより先に発令された禁止令を知らずに、家臣の杉浦右衛門が





死し、その罪がとがめられた大膳島龍が二万石を割られ、山形九万石へ。

十年(一六七七年)七月からはわずかに四歳、善子の昌幸、奥平家は延宝七年(一六七九)屋敷替えがあつて日比谷を去つてゐる。

### ①9 波乱の半生 伊達秀宗

独眼竜伊達政宗の長男で、少年期波乱の半生を送つた秀宗(愛媛県の宇和島藩十万石)上屋敷が慶長八年(一六〇三)ころから天和はじめまでの約八十年間、日比谷のニッポソ放送、農林年金、第一生命ビルにあつた。秀宗は伊達政宗の長男として生れたが、四歳のとき豊臣秀吉に人質として送られ、六歳のとき秀吉の猶子となつた。慶長元年に聚楽第で元服したとき、秀吉の一字をもらつて秀宗と名乗つたが、これらのが後、伊達家継承を遠慮する主因になる。

秀宗は秀吉にかわいがられるが、父・政宗と秀吉の仲は悪く、慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の合戦で政宗が徳川方につくのがわかると、宇喜多秀家のもとに送られた。こんな誤で、秀宗が徳川家康にはじめて拝謁したのは戦後の七年で、九月には

今度は徳川家の人質となつた。

時に十二歳、日比谷埋立ては八年のことだから、当初は日比谷公園の伊達邸にあり、このころ改めて賜邸されたのであろう。十一年の江戸図では羽柴待従とあり、後旧姓に復した。

秀宗が伊達家を継がなかつたのは、正妻の子ではなかつたということもあつたが、政宗の家康への遠慮からで、次男忠宗が嗣子と決まる。十九年(一六一九)大阪の陣が起ると父とも木津今宮内口を攻め、戦後、その功で宇和島十万石を与えられた。宇和島藩祖となつた秀宗は正保四年(一六四七)に領内檢地を行ない、これまでの地方知行制を改め蔵米制とし、慶安四年(一六五二)には初めて定免制をしいて、以後藩政機構が徐々に確立する。

一代目遠江守宗利は二人の兄があいついで倒れでくりあつた。五男宗純に愛媛県の吉田三万石を分知して、自らは七万石の宇和島城主におさまる。伊達家は天和一(一六八一)三年に日比谷を離れたが、宗利の子宗賢のとき十万石となり、村年、村候、村拜、宗紀とつづく子孫は代々宇和島城主として幕末を迎える。

### ②0 加納の松平奥平

徳川家功臣の一人、奥平大膳家が朝日生命ビル、東宝ツインタワービルと請海通りをほさんだ日比谷パークビルの一画にあつたことは⑧で紹介したが、有楽町ビル、新有楽町ビルの一画に慶長八年(一六〇三)ころから寛永十一年(一六三三)までの約三十年間あつた松平奥平飛彈守家はその宗家にあたる。

長祿の戦い以来、徳川の功臣として数々の功名をあげた奥平信昌は、長男の家昌が宇都宮十萬石の別家をたてたので、その所領であつた岐阜奥の加納十萬石を三男の美作守忠昌に譲るがこの忠昌が有楽町駅前の新田有楽町ビルの初代住民になる。

加納藩は中仙道と東海道の分岐点で、関西を抑える重要拠点として家康が築城したもので、娘婿の父信昌が配属される。その妻、忠昌にとつての母は、家康の長女で正妻築山殿との間に生まれた長女の龜姫である。

奥平家の歴史を語るうえでこの龜姫の存在は忘れられない。永祿三年の駿府生まれだが、母親ゆりの気性の激しさで知られてゐる。天正四年、信昌に嫁いで化粧料三千石を受けたが、加納姫、加納夫人と呼ばれてその権勢は藩政に重大な影響を与

えている。元和元年、夫がなくなると髪をおろし、寛永二年(一六三三)六十六歳のとき亡くなった。

初代住民の忠昌は文祿四年(一五九五)に御前元服して秀忠の一字をもらい、加納城主となつたとき松平姓を許されたが病弱で、父の信昌が補佐した。このころ、父子は加納城下の整備や藩内の治山、治水事業など藩政の基礎を築くが、慶長十九年(一六四四)には忠昌が父母に先だつて没している。

次はわずか七歳の千松。千松は元和七年(一六二二)に御前元服して秀忠の一字をもらつて飛彈守忠隆を名乗り、この間、藩政は加納夫人が見守る。しかし、加納夫人も没した後、忠隆も寛永九年(一六三二)に二十五歳の若さで亡くなると、生まれたばかりの幼君右京を藩主に盛りたるが、三年後の十二年に数え年四歳で没して、ここに加納家が断絶している。

### ②1 森蘭丸の弟 森忠政

織田信長の寵臣で、本能寺の変で信長とともに散つた森蘭丸の弟・森忠政の上屋敷も日比谷の有楽町マリオンと朝日街の一画にあつた。

森氏は八幡太郎義家の出とい

う武家の名門である。代々神奈川県の森を領有していたので姓とし、その十七代が日比谷初代住民の一人羽柴森美作守忠政である。

忠政は信長の勇将森可成の六男だが、長男可隆は手籠山で戦死し、次男蘭丸(長定)、坊丸(長隆)、力丸(長氏)の三兄は本能寺の変で戦死、つづく長可も長久手の戦で討死したのでくりあがって、父の遺領・金山を領有した。秀吉のとき、羽柴

勝をうけ、慶長五年(一六〇〇)には家康に見込まれ、川中島十三万七千石に転じている。関ヶ原の合戦では石田三成のさそいを振り切り、秀忠にしたがって真田幸村の上田城を攻め、その功で八年、月、岡山県に十八万六千石を与えられ、この年(一六〇三)日比谷陽邸を受けた。

藩内は当時名古屋山三と井戸宇右衛門の両家老派が対立して藩内を分していたので、忠政は一方の山三に井戸を討つよう命じたが、この争いの中で山三も殺されている。一人の遺体はなせか出雲街道の両側に埋められ、その上に植えられた松が相對して、にらみあいの松と呼ばれた。また、このころ流行したかきおどりの出雲阿國が山三の亡霊を演じて人気を集めたという。この事件は身切りをつけた井戸一族が立退いて平隠をとり戻している。

忠政は翌九年津山築城と総検地を行ない、十年からは江戸、名古屋、篠山城普請を助けて大坂冬・夏の陣に出陣した。この忠政には、八人の男の子があったが、いずれも早世し、このため、寛永十一年(一六三四)七月、食中毒で急逝すると、養子の長継がつぎ、さらに長継も没すると五歳の万右衛門が成人するまでの条件でおおがつぎ、このことが、老家騒動につながる。元禄九年(一六九六)幕府は不調法、不行届の子どもをもって森家の断絶を決めている。

たどった。この事件は身切りをつけた井戸一族が立退いて平隠をとり戻している。

忠政は翌九年津山築城と総検地を行ない、十年からは江戸、名古屋、篠山城普請を助けて大坂冬・夏の陣に出陣した。

この忠政には、八人の男の子があったが、いずれも早世し、このため、寛永十一年(一六三四)七月、食中毒で急逝すると、養子の長継がつぎ、さらに長継も没すると五歳の万右衛門が成人するまでの条件でおおがつぎ、このことが、老家騒動につながる。元禄九年(一六九六)幕府は不調法、不行届の子どもをもって森家の断絶を決めている。

元禄は十一年に六千石の加増を受け、十四年、さらに二万石を加えられ、二万六千石となり、大坂冬の陣では天王寺口を、夏の陣では道明寺表に陣して、四月七日の合戦で十七級を得ている。

### ②末期養子断絶桑山

慶長八年(一六〇三年)ごろ

から元和、寛永初期にかけて、有楽町駅南半分と朝日街の一部には桑山伊賀守の上屋敷があった。桑山氏は愛知県の出で、秀吉の長浜時代からの家臣である。重晴のとき、賤ヶ岳の戦いで佐久間盛政の猛攻を受けたが、城を固守して秀吉の来援を待った。この事が認められて秀吉の弟秀長の麾下に入り、兵庫

の竹田一万石から和歌山一万石に進む。天正十九年に秀長が没すると秀吉に任せ、隠居後もお伽衆の一人になるが秀吉の信頼は絶大だった。初代日比谷住民の伊賀守元晴はこの重晴の二男。秀吉に任せ朝鮮の役にも加わったが、関ヶ原の合戦では父と甥一晴とともに徳川方につき、その功で京都の御所で二万石が与えられた。父の家系三万石は後、一晴がついで桑山家は、天名となるが、二家は後、いずれも改易という悲運を味わう。

元晴は十一年に六千石の加増を受け、十四年、さらに二万石を加えられ、二万六千石となり、大坂冬の陣では天王寺口を、夏の陣では道明寺表に陣して、四月七日の合戦で十七級を得ている。

元晴には三男一女があった、長男清晴は祖父重晴の没後、一時、その養老料のうち二万石を分知されたが、慶長十四年に家康の勘気を受けて養老生活を送り、一代目は、男の貞晴。この元晴、貞晴の二代が日比谷住民である。貞晴は慶長九年御所で生まれ、元和六年父の跡をつぎ、九年八月に従五位下加賀守に叙任したが、寛永六年(一六二九)九月、二十六歳の若さで逝去する。

貞勝には実子がなく、あわてて弟宗晴を養子として迎えようとしたが、末期の養子認められず、寛永七年六月、封地を収められ、日比谷上屋敷を土取された。

### ③悲運の福島正則

福島正則といえは悲運の勇将として知られている。豊臣政権を作り、そして自らの手で滅亡させることになった正則。その最後は家康に利用されて捨てられる悲劇のヒーローを演じるのである。

この正則の上屋敷も、帝國劇場の国際ビルと新国際ビルに慶長八年(一六〇三)ごろから元和五年六月までの約十六年間あった。当時の記録では南北六十間、東西百間の六千坪で、現在の両ビルを合わせた数字とほぼ一致する。

太閤記では尾張の山村で腰に縄を巻いて石臼を引いた桶屋の赤んぼうと云うことになっているが、秀吉の臣・福島三信の子で、母は秀吉のおばである。

少年期から秀吉に従って各地を転戦、賤ヶ岳の戦いで一番槍の功名をあげて五千石を得、以後、小牧、長久手、九州、小田原攻めなどの活躍で、一躍岐阜県の清洲、千両石の大々名に取り立てられていた。この豊臣恩顧の大忠臣が、加



悲運の大名・福島正則

慶清正らとともに関ヶ原の合戦で徳川方につき、結果的に豊臣家を滅ぼす動きをするのは石田三成への日頃のうっ憤が重なったものだ。ともあれ、正則は関ヶ原の合戦最大の激戦となった宇喜多秀家との戦いでこれを破り、その功で戦後、広島四十九万石に躍進する。

しかし、三成没後、今度は豊臣秀頼に救いの手を出そうとして、それがかえって彼の立場を悪くした。大坂の陣で出陣を許されず、家康が亡くなると、正則の生き残る道はなくなっていた。徳川家にとって豊臣願願の旧臣で不穏な風評のある正則を中国の要所におくことは許されない。元和六年、広島城の水害修復工事を口実に福島家の取潰し(配流同様の移封)が決まる。牧野忠成らが上使にたったこの日、愛宕山下中屋敷と日比谷上屋敷は鉄砲隊を含むものものしい軍勢が取り囲んだ。

正則は一言の弁明もしないまま「ただ仰せにこそ従えり」と答え、一同感涙にむせんだという。正則のとき川中島四万五千石に移され、寛永元年(一六二四)七月、六十四歳で没した。

### ②4 山内一豊とその妻

日本一の妻を得た山内一豊も、また日比谷の初代住民の一人である。賜邸のあった慶長八年(一六〇三)ごろは、東京都庁といっても東京駅寄りである第一庁舎一角の二千坪。元祿、宝永と上屋敷を増やし、後期は国鉄線を含む、都庁の大部分を占める大邸宅になる。

山内家は藤原秀郷の子孫で、俊通の代に鎌倉の山内を領したことから山内と称した。対馬守(松平、土佐守)一豊は天正十五年生まれ。父盛豊は岩倉城が織田信長に攻められたとき自刃したので、一豊は母とともに諸国を巡り、やがて豊臣秀吉の麾下に入った。

二十九歳の時、若党・喜助の娘をめぐったが、この妻が貧苦の一豊を献身的な内助の功で出世させた日本一の良妻として有名である。一豊は良妻を得て次第に出世する。

天正十八年三月、秀吉の小田原征伐に従って静岡県の掛川五万石を得、関ヶ原の合戦では徳川方について一躍土佐、千四万石の太守となったが、この合戦でも妻の働きが光った。大阪方では徳川方について諸大名の妻子を人質としたが、一豊の妻は翻意を迫る大阪方の書状とともに、密かに独自の情報を忍ばせ、一豊はこれを未開封のまま家康に渡した。二十四万石の美は妻の決死の行動によったのである。一豊は慶長八年、高知城を築いて日比谷賜邸を受けたが十年九月、六十一歳で没した。

一豊には妻子がなかったため弟の子対馬守(土佐守)忠義が養子となった。この人は六尺余の大男で鎌ひげをはやし豪将だが、趣味や娯楽にも熱中し、その業績にもまななるべきものがある。寛永八年、野中兼山を啓用、藩政を充実確立して、組織を完備した。新田開発、海防整備などの土木工事、産業の振興、農民政策と家臣団の増強などであった。しかし、成果をいそぐ兼山に不満も高まった。

明暦二年(一六五六年)七月から藩主が対馬守忠義にかわり、重臣たちは兼山失脚をめざす強勁書を出す。こうして藩政は家老合議制による文治政治にかわった。日比谷山内邸はこの後、豊員、豊房とつづき幕末に及んでいる。

### ②5 茶人大名織田有楽

有楽町の語源は、慶長のころ教習屋橋近くの泰明小学校の一面に織田有楽斎の屋敷があったからで、教習屋橋の語源もまた織田有楽斎の屋敷跡が、長く放置されて元教習屋丁と呼ばれたことによる。

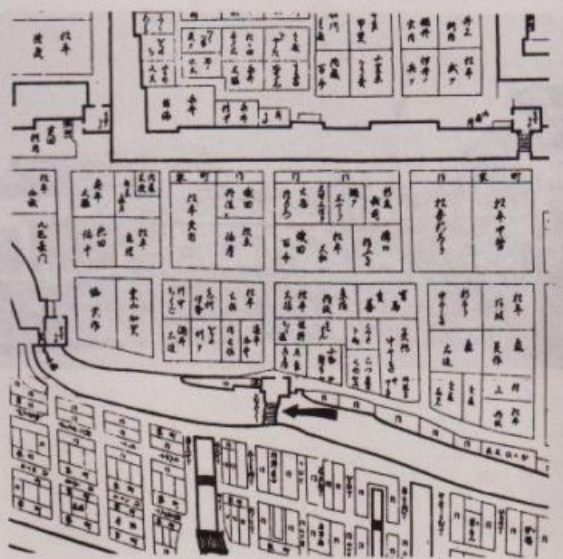
有楽斎は千利久高弟七人の一人にかぞえられるが、茶人としても有名だが、実は織田信長の弟で、関ヶ原の合戦でも活躍した勇将であったことはあまり知られていない。

織田氏は恒武平家の出ともいう。越前織田荘にあって姓とし、尾張守時代に拔擢されたが、信秀に至って俄然頭角を表す。信長は十八歳で家督をつぎ、一族間の血で血を洗う戦いをくりひろげながら尾張を治め、やがて天下を統一する。

その信長は明智光秀に討たれるが、その結果信長の一門はいずれも歴史の渦中にもてあそばれている。長男は本能寺の変のとき、一采城で自刃し、その子三法師は秀吉配下にあつて関ヶ原の合戦で西軍に属して敗れる。

三男信孝は秀吉によって自刃させられ、四男秀勝は病死した。ただ一人、一男信雄は関ヶ原で敗れたのち家康に助けられ子孫は大名として存続する。

こうした織田一族の中でもっとも優雅な生涯を送ったのが弟の有楽斎長益であった。有楽斎は本能寺の変では「采城」にあつ



寛永図の鍛冶橋(矢印)付近



織田有楽斎(「茶人織田有楽斎の生涯」から)

て難をのがれ、その後、豊臣秀吉のお咄衆に加わり、茶道に親しんだ。関ヶ原の合戦では徳川方に加わり、戦功をあげ、大和国内に三万石を領している。

日比谷邸はこの後の慶長期のことが、賜邸、上取ともにこれといった記録がなく、はっきりしない。有楽は晩年、四男長政、五男尚長にそれぞれ一万石を分知し、残り一万石で余世を茶人として送ったが、元和七年(一六二二)に逝去している。

柳本織田家記録によれば、(元数寄屋丁は)慶長のころ織田有楽屋敷に下されしが、後明地となり、三、四丁ほどの芝生。春はつみ草、夏は池辺の晩冷を賞し、築山のかたち残り、(略)秋色おもしろく人多く遊びし」とある。有楽斉没後か、寛永八年(一六三三)の幡子長者に子なく断絶後、しばらくは公園のような空地であったことがわかる。

## ②6 日比谷御門の完成

徳川幕府は家康の後、二代將軍秀忠、三代將軍家光にいたって不動のものとなった。徳川時代の日比谷を知る第一の手がかりは江戸図だが、初期のそれは現存図が極端に少ない。慶長図の後、元和板江戸古図が知られ

るが、すでにその現存も疑問が残っている。

初期のもっともはっきりした江戸図は寛永図と評される武州豊島郡江戸庄図になる。この図もすでに原本は実存しないが、各種の写図複製図が知られている。第四回で紹介したこの図によれば、伊達政宗、忠宗親子が日比谷公園第一花壇と帝國ホテルに、毛利、鍋島も同じ日比谷公園にはじめて名前を連ねている。

慶長図で三井ビル、三信ビル前にあった水野市正は真田中屋敷に、国際・新国際ビルの福島正則は鳥取の池田宮内に変ったほか、東商は織田丹後、新東京杉原伯耆、都庁には酒井右近、織田刑部、松本出雲らの名前がみえる。

慶長図空屋の電気ビルにも池田備中守が賜邸されている。もっともこの人が電気ビルの初代住民になるのかというと、依然即断は許されない。

日比谷周辺には城郭門が多かったが、これらの寛永図のころの完成している。日比谷門は日比谷公園の日比谷口にあった。公園口には橋門の石垣の一

部と城堀の一部にあたる心字池が残っている。

慶長図にはやや南側に書かれていたが、当時のものは土橋で寛永四年(一六二七)石垣を広島城主の浅野長晟が作り、寛永六年に廓門を伊達政宗が構築している。

日比谷門は日比谷と豊ヶ関を結ぶ城内門だけに、江戸城防備上も重要視されていた。この門警備は、三万石の大名や高級旗本が一年交替で勤め、五十人が勤務している。鉄砲十丁、持筒二十丁、持弓一組ほどを常備、四人の番士が羽織袴を着して通行者を監視した。夜は着六ツ冠木門がとじられている。

日比谷門は設立後、明暦大火など何度も焼失するが、その都度再建され、明治維新後の六年(一八七三)十一月に撤去された。

## ②7 日比谷の諸門

前項に日比谷御門を紹介したが、日比谷周辺にはこのほか山下御門、数寄屋御門、鍛冶橋御門の三門があった。

山下御門は帝國ホテル横の道

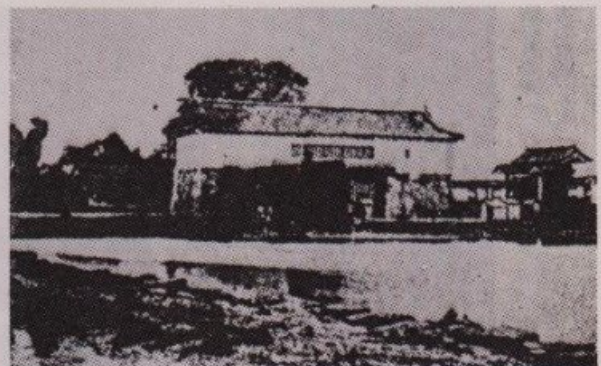
路を銀座にむかう国鉄ガードの近くにあった廓門橋で、はじめは山王神社近くにあった門を移したのだという。寛永十三年(一六三六)佐賀藩主鍋島勝茂と香川県の丸亀藩主駒高俊が幕命を受けて廓門をつくり、はじめ鍋島門と呼ばれたが、いつしか姫御門とも呼ばれるようになった。これは鍋島邸前の堀際あたりに「姫が井」という井戸があったからだという。

姫が井という井戸の名前も、いわくありそうだが、江戸期この周辺の屋敷の人たちの行なった奇習を知ると、さらに謎が深まってくる。井戸にはいつも鏡がかよわれて使用されることがなかったが、毎年一回だけ近所の大名屋敷から白米一升ずつが井戸に投げ入れられ、この時井戸の蓋を二回たたいて案内を乞うしきたりになっていた。

山下門の御門警備は三千石から一万石の旗本があたり、門は昼夜あけっぱなしであったという。明治六年(一八七三)七月撤去。

数寄屋御門は晴海通りの有楽フットセンター付近にあった。

寛永六年(一六二九)伊達政宗



日比谷御門  
数寄屋橋御門(「幕末明治文化変遷史」から)



が造営した枳形  
橋門で、五千石

から一万石の旗

本が三交代で

あつた。諸門

番所御法令書に

よると、鉄砲五

丁、弓三張、長

柄五筋などが常

備され、番十三

名が羽織袴着用

で勤務してい

る。芝口門とも

呼ばれ、明治六年三月に城門が

撤去されて橋だけになった。

鍛冶橋門は慶長年間作られ

た無名門で、寛永六年ごろ枳形

門となり、明治六年五月枳形が

はずされている。

これらの日比谷周辺諸門は大

手六門に次ぐ重要路に据えられ

ていたので、警備も厳重であつ

た。枳形門は防禦上大きな利点

をもっている。それは外にむか

つた門が狭く、一度に大勢が入

れないうえ、中に入っても三方

から射すくめることができるな

どの利点があつた。もっとも江

戸でこの枳形門が威力を発揮し

なければならなかつたことは遠

になつた。

## ②松山の池田備中

電気ビルは慶長十一年江戸圖  
では空屋敷となつていたので初  
代住民が知られていないが、こ  
の十年代(一六〇五)に松山の  
池田備中家が賜邸されてい  
る。

『池田備藩邸考』によれば  
「備中守殿の上屋敷は敷寄屋橋  
門の内にあり。これ鳥取に封せ  
られし後賜いしなるべけれどそ  
の年月等は旧記にみるところあ  
らず、慶長十九年九月この邸に  
して奉せられし」とある。

松山池田氏は後で詳しく紹介  
する岡山三十一万石、鳥取三十  
二万石、両池田藩と同族。池田  
を大々名に押しあげた輝政の弟  
信輝の三男長吉が藩祖になる。  
十二歳のとき秀吉の養子となつ  
て羽柴姓を名乗り、備中守に叙  
任して一万石を与えられた。

関ヶ原の合戦では徳川方に属  
し、その功で鳥取六万石を得る。  
鳥取では戦火にあつた市街や  
城郭を復旧拡大したが、このた  
め苛酷な重税を課して領民に怨  
まれたといふ。

次は備中守長幸。天正十五年  
生まれで、慶長十九年(一六一  
四)二十八歳のとき父の遺領を  
つぐ。大阪冬・夏の陣にしたが  
い、元和三年二月輝政の孫光政  
の鳥取入城にともなつて五千石

が増され、愛媛県の松山六万  
五千石に転封となつた。

長幸は松山に入封すると松山  
問屋と玉島問屋の制をたて、つ  
づいて松山川の三角洲を利用し  
た干潟干拓で長屋内新田三十七  
町歩を開拓する。この長幸が寛

永九年(一六三五)病いに倒れ  
たとき、見舞いに訪れた脇坂佐  
守安経と主水正安堅父子を弟  
の長頼が殺傷するという事件が  
おこつた。先ほどの『池田備藩  
邸考』にも「故ありて」とだけ  
記述されている。

次は出雲守長常が継ぐが、九  
年後に十二歳の若さで逝去し  
た。長常には嗣子がなかつたの  
で養子を迎えようと幕府に願ひ  
出るが、末期の養子許されず、  
改易と同時に日比谷邸も上取さ  
れるのである。

## ②水野の鬼監物

交通会館、そこつ朝日街、  
有楽町駅の寛永始めは、水野監  
物上屋敷となつてゐる。監物の  
あと寛永七年九月、ここを賜邸  
された『井伊家譜』によると、

「教寄屋橋御門内のお屋敷は先  
達桑山丹後守様お屋敷にて後水  
野監物様ご拝領、その後(空屋  
敷になつていたので幕府に願ひ  
出て)頼負佐様(井伊直滋)ご  
拝領」とある。

水野監物といふは監物忠元と  
監物忠善である。忠元は天正四

年、水野忠守の三男として生ま  
れた。刈谷城主の水野忠政の孫  
にあたり、忠政の娘お大の子で  
ある徳川家康とは従兄弟にな  
る。忠政・忠守父子は三河以来

の歴戦に従ひ、忠元も二代將軍  
秀忠の御小姓番頭になり、慶長  
十九年、元和元年(一六一五)  
の大坂の役の功で、この年茨城  
県の山川三万石を受け、三年に  
はさらに五千石を加えられた。  
六年十月、四十五歳で逝去。

忠元の後には長男の忠善がわづ  
か九歳で家督をついでいる。こ  
の人は戦国武者の名こりを残し  
た豪將で、本田の鬼内記(政  
勝)青山の鬼大膳(幸利)にと  
もに水野の鬼監物と呼ばれて恐  
れられた。

忠善が日比谷にあつたのは十  
八、九歳までのことだから、ま  
だそう自立したエピソードもな  
かつたが、序々に本領を發揮す  
る。寛永十二年、静岡県の田中  
四万五千石、十九年愛媛県の吉  
田四万五千石、正保二年愛知県  
の岡崎五万石と転封をくりかえ  
し、岡崎への国替えが決まつた  
とき、わがことなれりと大喜び  
をした。

岡崎は尾張徳川家と領を接し  
ていたが、忠善は名古屋の押さ  
えを自負して、その領内を監視

し、尾張家の家臣を殺したり、城堀を測るなどトランプがたえず、江戸や国許、隣国での評判はすこぶる悪かった。

しかし、この忠善の岡崎での活躍も忘れられない。岡崎藩は幕高増にもなつて家臣団の拡大整備が必要であったが、武功ある浪人を探しだして招いたり、領内総検地で年貢の増収をはかり、藩庫制の整備などをすすめている。

### ③ 父子訣別の真田

真田十勇士を従えて獅子奮迅の大活躍を演ずる真田幸村の武勇伝は講談で有名だが、この昌幸、幸村と父子訣別して徳川方についた信之中屋敷が、慶長末期から万治二年（一六五九）十一月まで、三井・三信ビル前にあった。

真田家は東信濃の名門・海野氏の一族で、武田信玄、上杉景勝に任えた。昌幸の代になった天正十三年、家康に上田城を攻められ、秀吉の仲介で家康と結んで信玄を人質として差し出したが、このことが関ヶ原の合戦での東西父子訣別につながる。

関ヶ原の合戦がはじまったとき、信之は家康の麾下にあったので当然東軍と行動を共にしたが、父と弟は大阪方について敗

戦を味わう。戦後この兄弟は明暗のはっきりした道を歩む。敗れた父子は信之の助命嘆願で、一度は高野山で齋居生活を送り、大阪の陣が始まると再び大阪城に入つて華々しく散る。

一方、家康の信任を得た信之は、元和八年、長野県松代十三万石に加増された。日比谷中屋敷はこの信之からの五代か、その子からの四代。

河内守信吉は信之の長男で、沼田三万石を領し、大阪の陣では父が病氣と称して参戦しなかつたので名代として出陣、戦後は相次ぐ戦いで荒廃した領内の復興につとめた。

#### 三歳で襲封

したが、四年後に逝去して、寛水十五年（一六三八）おじの大内記信政が入る。用水下事、新田開発など領内開発をすすめ内高四万二千石を了らした。

明暦三年からは熊之助の弟の伊賀守信澄。この人は拡大領地で悪名が高い。寛文二年に行なつた領内検地で、一季に五倍の十四万四千石としたが、これはただ強引に石高を増やして増税をはかったもので、領民の不満が高まる。また時間ごとく、幕府から命ぜられた両国橋普請でも、木材不正が発覚して天和元年十一月、城地を没収されてい

る。

### ④ 飯田の堀家

元和期（一六一四）から元禄十一年（一六九八）九月までの約八十年間、有楽町マリオンと朝日街の一面には真岡・鳥山・飯田と転じた堀家五代の江戸上屋敷があった。

堀氏は藤原氏利仁流。秀政のとき織田信長に仕え、のち豊臣秀吉に属して、賤ヶ岳、小牧の陣で活躍する。天正十三年には侍従となり羽柴姓を受け、石川県の北の庄十八万石を領した。その子秀治も秀吉のもとで数々の功名をあげ、新潟県の春日山四十五万石に栄転する。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦では東軍にあって所領は安堵されたが、その子直政に変わった十五年、家内不統一を理由に改易された。日比谷堀氏はこの秀治の弟美作守親良から始まっている。始めは新潟県の座主三万石を領したが、のち稀命を受けて宗家をつぎ、栃木県の真岡一万二千石となり、大阪の陣の功績が認められて寛永四年（一六二七）、同じ栃木県の鳥山二万五千石に転じた。

寛永十四年五月に親良が没して次は美作守親昌がつく。この人は文芸大名として知られてい

る。幼いころから和歌に親しんだが、駿府、佐倉、大阪と相つゞ御加番を勤めながら和歌に興じ、都文化にあこがれたといふ。寛文十二年（一六七〇）長野県の飯田三万石に転封され、翌年亡くなっている。

飯田藩における前半の堀家は藩主の若死と悪政がつづいて藩内は没落する。次の周防守親貞は延宝元年（一六七三）九月に遺領をつぐが、貞享二年（一六八五）新潟県の高田在番中に現地で没し、養子の美作守親常も元禄十年（一六九七）三月江戸で逝去する。

親常には妻子がなかつたので再び養子大和守（石見守）親賢を迎えるが、この人が牛之助騒動を起している。牛之助は親賢の用人。結婚お礼のため目通りした時、側室が牛之助と交わした笑顔をかんぐって牛之助を殺し、母も狂死した。

### ⑤ 徳川功臣の大久保

大久保忠世、忠隣とハハオは徳川創設期の大臣として知られるが、忠隣は晩年は配流のうち没するという悲運にみちたものだった。

忠世は家康側近として幾多の功績を残したが、その子忠隣もそれに劣らない。十六歳で初陣



承応二年の江戸図



明暦三年の「新設江戸の図」

を飾り、二十歳のときの三方ヶ原の戦いでは、馬を失い自らも傷つてなお家康に従ったので、見かねた家康が馬を奪わせていっしょに逃げ帰った。

後の長篠の戦いでは家康と馬をならべて全軍を指揮し、一代將軍に秀忠を推したのも忠隣。文字どおり家康側近のナンパワンであった。

その忠隣がつまずくのは佐渡・岩見釜山などで手腕を露揮した大久保長安が、この人の家臣で、慶長十八年に病死したとき生前数々の悪業があったとされて断絶、一族ごとごとくが連座して処刑されたことであった。

また、翌十九年(一六一五)には忠隣自身もライバル本多正信の策謀にあつて京都で捕えられる。これは私的婚姻が問われたものだが、誰れにも言いがかりとみえた。しかし、忠隣が謀反を起こすのではないかという噂がとどろき、本人の無実の訴えも届かず、配所に流されている。駿府と江戸二元政治の犠牲者でもあったのだ。

大久保家は嫡子がすで没したので幼い孫加賀守忠職が岐阜県の加納藩三万石をつぐが、この忠職が寛永十一年(一六三三)有楽町ヒル、新有楽町ヒルに賜邸されている。

日比谷邸は次の出羽守忠朝と

二代だが、この間、兵庫県の明石七万石、佐賀県の唐津八万三千石、千葉県の佐倉八万八千石、神奈川県の小田原十一万三千石とトントン拍子に増加がくりかえされる。

忠朝は延宝五年から元禄十一年(一六九八)までの二十二年間老中を。華やかな元禄時代の幕政最高責任者であったが、実権は側用人の柳沢吉保や牧野成貞が握り、生類憐みの令などを発令して市民の悪評を買った。

有楽町駅の東京寄りと交通会館には寛永七年(一六三〇)九月から寛保二年(一七四二)六月までと、延享二年(一七四五)十二月から天明元年(一七九〇)九月までの二回にわたつて与坂井伊家が入っている。

井伊家といえは板田門外で暗殺された直勝を生む滋賀県の彦根井伊家が知られる。徳川譜代筆頭として何度か大老を送りだす名門だが、この与坂井伊藩はその支藩。家康のもとで数々の武功をたてた井伊直政は、日比谷陽邸を受けた直勝の父になる。直政は、天正十八年の家康江戸入りに従つて長野県の箕輪十二万石を領し、慶長六年

その子兵部少輔直勝は、七年三月十三歳のとき父の遺領十八万石を継ぎ、九年には彦根に新城を築いて、彦根藩井伊家がはじまる。慶長十九年大阪冬の陣、元和元年大阪夏の陣では病床にあつて参陣できず、このため弟直孝を出陣させて彦根城を譲る。『寛政重修諸家譜』によれば、元和元年二月直勝多病たるにより弟直孝にその封地をつかめられ、直勝は上野国の領地三万石をたまひ、碓氷郡安中に住ひ、碓氷、牧の両関所を領けられるとある。

直勝は病弱どころか、日比谷關邸後も、三十二年間、寛文二年(一六六二)七十三歳の生涯を送っている。

寛永九年(一六三二)からは長男の兵部少輔直好がつく。正保二年(一六四五)六月、五千石の増加があつて愛知県西尾三万五千石となり、さらに万治二年(一六五九)一月静岡県の掛川三万五千石へ移される。

井伊家はその後寛文十二年(一六七二)伯耆守直武、元禄七年(一六九四)兵部少輔直朝がつくが、この直朝が宝永二年(一七〇五)発狂する。普通ならここで井伊家は断絶となるところだが、そこは譜代最大の重臣家の分家である。

遺されて病状をたしかめると、かねて願ひ出の井伊本家養子兵部少輔直短の相続を認められた。直短は宝永二年十月相続とともに新潟県の与板二万石へ転封される。与坂井伊家のはじまりでもあった。井伊家はここで直陽、直員、直存とつづいて幕末におよぶのである。

寛永十八年(一六四二)から元禄三年(一六九〇)六月までの四十九年間、電気ヒルには兵庫県の足崎五万石、青山家三代の上屋敷があつた。

青山家は藤原氏花山院流。はじめ群馬県の青山にあつたが、のち愛知県に移つて松平家に仕えた。忠成は家康の信任が厚く秀忠の傳人となつたが、日比谷電気ヒルの住民はその三男大輔少輔幸成と大膳亮幸利、播磨守幸隆の三代。のち一旦は日比谷をはなれるが、しばらくして三井ヒルに戻りさらに三代つづく。

幸成は天正十四年生まれで十四歳のとき関ヶ原の合戦に従つたが、途中幼少との理由で戻される。大阪冬の陣では、それより先に友人の病末を見舞うため、黙つて任地を離れたことで閉門中であつたが、こっそり兄

造されて病状をたしかめると、かねて願ひ出の井伊本家養子兵部少輔直短の相続を認められた。

直短は宝永二年十月相続とともに新潟県の与板二万石へ転封される。与坂井伊家のはじまりでもあった。井伊家はここで直陽、直員、直存とつづいて幕末におよぶのである。

寛永十八年(一六四二)から元禄三年(一六九〇)六月までの四十九年間、電気ヒルには兵庫県の足崎五万石、青山家三代の上屋敷があつた。

青山家は藤原氏花山院流。はじめ群馬県の青山にあつたが、のち愛知県に移つて松平家に仕えた。忠成は家康の信任が厚く秀忠の傳人となつたが、日比谷電気ヒルの住民はその三男大輔少輔幸成と大膳亮幸利、播磨守幸隆の三代。のち一旦は日比谷をはなれるが、しばらくして三井ヒルに戻りさらに三代つづく。



寛文六年の江戸図



寛文十年の江戸図

忠俊の陣にはせのぼった。勘氣は間もなくとけ、夏の陣では晴れて出陣がかなう。五月七日、大阪落城のとき、城中に攻め入り、念願を果たした。

戦後、茨城県内で二万三千石を受け、百人組頭、ご書院番、御小姓十人番頭を歴任、寛永十年、静岡県の掛川三万六千石、十二年尾崎に移って五万石を領有する。日比谷住民となるのは、このあとの十八年。二十年（一六四三）二月には病のため五十八歳の生涯を閉じる。

幸成は遺言で、男、三男、四男にそれぞれ分知することを願い出て認められたので、次の幸利は四万八千石となった。『寛政重修諸家譜』によれば、四代將軍家綱から、尾崎は板東の地たるによりその人をえらばるべしといえども、幸利若年にしてその才略老練におとらず、ゆえにそのまま任せおかれる」と激励されている。これに応えたのかどうか、尾崎青山家は歴代善政を布き、経済力豊かで、生産性の高い藩領として繁栄している。

幸利は万治二年奏者番となり、三年には大阪城普請、延宝六年大阪周辺の幕府直轄領檢地を行ない、貞享六年（一六八四）からの幸育も奏者番、寺社奉行となり三代將軍家光

の五十回忌法会を奉ねた。

### ③⑤ 帝国ホテルの本多

帝国ホテルが江戸初期、伊達家中屋敷であったことはすでに紹介したが、この後明暦三年（一六五七）五月から天和年（一六八八）四月までの二十五年間、神奈川県の横須賀五万石本多越前守利久と、山形県の上山三万五千石土岐山城守頼行、伊予守頼股上屋敷があった。

寛文・延宝期の江戸地図をみると、このころの帝国ホテルは上下二つに区切られ公園寄りが本多家、線路寄り土岐家となっていた。

本多氏は本多定正の流れ。その子孫が代々松平家に任え、天正十八年家康が江戸入りしたとき、康重が千葉県の白井一万石を賜った。慶長五年の関ヶ原の合戦では秀忠に従って上田城を攻め、戦後愛知県岡崎五万石を領している。本多氏は康重のあと康紀、忠利とつづき、その次の利長が日比谷住民になる。

利長といえは神奈川県の横須賀三十七年間の厳しい農民政策に触れないわけにはいかない。情け容赦ない取り立てと重い負担を強要して、領民の不満が高

まった。

『寛政重修諸家譜』によれば天和三年三月十日、領内の政事よろしからず、さきに巡見使封地に至るのときそのはからひ御むねに進いしにより所領を公取せられ、出羽国内において一万石をたまひ出任せと定められる」とある。

こうした失敗の一方、柳堤構築などの早害対策、道路整備といった治績も伝えられている。日比谷邸は山形県の村山移封直後の二年四月、屋敷替となった。

もう一方の土岐氏は清和源氏の頼光流。代々土岐郷に住み、途中嫡流は断絶して一家は離散するが、定政のとき家康の配下となり、天正十年、山梨県内で一万石、次の定義のとき大府の高槻一万石に移った。この定義の子が頼行だが、襲封時は幼少だという理由で千葉県内一万石に減封され、寛文元年になって上山三万五千石城主に。

次の頼股ははじめ小姓番頭などをつとめ、襲封後は奏者番、大阪城代などを歴任している。

### ③⑥ 岡田と堀田

三共、三信ヒルの一部とその前の日比谷通りは寛永期以降真

田家中屋敷となったことを紹介したが、その後、万治元年（一六五八）十月からは岡田善政、善次父子、延宝八年（一六八〇）十月から堀田正英に変わっている。

万治、寛文、延宝と二十二年間にこの住んだ岡田氏は、代々が織田家の臣。善同のとき豊臣秀吉麾下に入り、関ヶ原の合戦では徳川方にあつてその功で五千石を与えられた。

日比谷住民の豊前守義政は関ヶ原の合戦直後の慶長十年（一六〇五）生まれで、寛永八年（一六三二）に遺領をつぎ、万治元年伊勢内宮造宮奉行を命ぜられたとき叙任と日比谷賜邸を受けた。三年五月には後の勘定奉行にあたる勘定頭にすすみ、七千五百石に増された。勘定頭は諸国の郡代、代官を支配し、租税の収納、幕府用度品の会計や關八州における訴訟裁判を担当する。寺社奉行、江戸町奉行とともに三奉行の一つにカウントされる要職である。

寛文二年（一六六二）義政の訴訟審議中に、一色内蔵助という代官が訴訟相手を刺殺する事件があったが、この一色を打ちとる。十年に隠居、七十三歳の余世をまっとうしている。その子豊前守義次は弟に千一百石を分知したので六千石となり、延



延宝七年の江戸図



延宝八年の江戸図



宝四年芝新擧奉行、つづいて伏見奉行をつとめた。

次の堀田対馬守正英は春日局の縁で出世街を歩む。父は春日局の養子正盛。この正盛は三代将軍家光に近侍して、老中となり、千葉県の佐倉で十一万石を領有した。その子正英は四歳の時、四代将軍家綱の御小姓となり、三十一歳で御小姓番頭、ついで御書院番頭をへて延宝四年大番頭にすすみ、天和元年(一六八一)には若年寄に栄進する。

この間、宗家は兄正信がつぎ、正英も二年二月、八千石の旗本から茨城県内一万三千石の大名に取り立てられるが、堀田家が大名に列するのはわずか五年。元祿元年(一六八八)正英が没すると、五千石が没収され、その子正親は八千石の旗本に戻されている。

37 日比谷元祿

江戸幕府設立後、百年をへた元祿時代一六八八年から一七〇三年。戦さがなくなつて久しく、武士にも町人にも農民にももはや平和は当然のことと考えられていた。江戸は急激に発展し、当時人口はすでに百万を数えたという。消費は拡大し、貨幣経済がすすみ、商人が大きく

力をもっている。

日比谷もまた、華麗にくりひろげられた元祿文化のなかに細爛たる日比谷元祿を現出したのである。万治四年(一六六一)から四十二年間、日比谷公園の交差点寄りには山梨県の甲府二十五万石、徳川綱重邸があったが、この人は三代将軍家光の三男。兄四代将軍家綱を補佐して、一時は五代将軍の第一候補と目されるが、惜しくも実現しない。

しかし、やがてその子家宣と孫家継の二代にわたって徳川宗家を襲封することになるのは五代将軍綱吉没後のことである。三井ビルの一画には酒井河内邸があった。下馬將軍とうたわれた大老酒井忠清の子忠挙邸で、父の失脚後、中央では閑職に終始するが、このことが前橋藩政に専心させる結果になって、酒井歴代随一の名君と語り伝えられる。

日比谷は幕府政治の中心地でもあった。老中や若年寄、寺社奉行の役宅ともなつたからである。彼らは江戸城内での執務のほか、実務をそれぞれの上屋敷で行なつた。パークヒルの一画には土屋敷正、稲葉正氏、戸田忠貞といった幕閣の実力者が移り住んでいる。

稲葉家は三代将軍家光の乳母

春日局の縁につながつて出世街道を歩み、父子三代の老中。新潟県の高田十萬千石を領有していた。

元祿といえは、泰平の夢を破つた赤穂浪士の討入りに触れないわけにはいかない。東京駅の山陽国策パルプビル、東京海上ビルの一画には幕府の勅使接待所「伝奏屋敷」があったが、元祿十三年三月、この屋敷で数かずの恥かしめを受けた浅野内匠頭が、奥中松の廊下で吉良上野介に切りかかる。仇役の吉良上野介も都庁先の鍛冶橋際にあつた。

旧主の仇を討ちとつた大石良雄らの快挙に江戸市民が酔いしれたころ元祿の幕が降ろされた。日比谷の歴史もまた大きな転路にたたざれていたのであった。

38 甲府宰相

日比谷住民が六代將軍になつた、といつたら一笑に付されそうだが、実は本当の話なのである。万治四年(一六六一)二月から宝永元年(一七〇四)までの四十二年間、日比谷公園の交差点寄りに徳川綱重、綱豊二代の江戸上屋敷があったが父の綱重は惜しくも五代將軍を逃がしたものの、その子綱豊は六代將軍家宣になり、その孫家継は七

代將軍を継承する。

カットの徳川家系図をみてもらえば、この親子はどんな立場の人で、將軍就任もなるほどどうなつてけることだろう。初代の綱重は正保元年(一六四四)三代將軍家光の三男として生まれた。この年はちょうど家光が四十二歳で、四十二歳のとき一歳の子供をもつと悪いことがある、という当時の風習にしたがつて養子としてたざされたが、この養子先が大阪落城のとき奇跡的な脱出をはたした三代將軍家光の姉千姫である。綱重はこうして竹橋御門の千姫邸で育ち、寛文元年(一六六一)には山梨県の甲府十五万石に封じられている。

綱重の日比谷賜邸は万治四年二月のことだ、この直前の大火で焼けたされた伊達邸跡である。幕府は作事料として二万両を与え、新居は寛文元年九月完成している。十九日、四代將軍家綱から上使稲葉正則が派遣され、屏風二双、衝立障子一、羅紗、酒肴、母順松院へ銀百枚などが下賜されている。順松院は京都の町人の娘で、家光の側室となつて綱重を生み天和三年(一六八三)に没している。

この綱重は延宝六年(一六七〇)三十四歳の生涯をよけるがこの人がもしあと二年生き

元祿二年の江戸図



延宝五年、菱川師宣「江戸雀」から



していたら、間違いなく五代將軍の座にすわっていたことだろう。延宝八年に兄の四代將軍家綱が病死する。家綱は病弱で実子がなかったため、弟の綱吉が五代將軍に就任している。

綱吉は、はじめ天和の治といわれる文治政治を展開したが、堀田正俊死後は柳沢吉保の側近政治が始まり、政治は弛緩する。泰平ムードの中で消費生活がすすみ、元祿文化を現出するが、急成長にもなろうインフレがすすみ、「生類あわれみの令」ほどの悪政もめだっている。もし綱重の寿命がもう二年長かったら、徳川中期の歴史はもっと変わったものになっていたことだろう。

### ③9 六代將軍家宣

日比谷公園交差点寄りにあった甲府宰相徳川綱重の將軍への悲願は、その子家宣と孫家継に到って開花する。

家宣は寛文二年(一六六二)四月、綱重の長男として生まれた。母は千姫のもとに奉公していたお保良の方で、幼名が虎松。しかし家宣の波乱にみちた一生は、関係者の誰にも予想できなかつたことだろう。

虎松が生まれたとき、綱重には関白一茶光平の娘との縁談が

すすんでいた。正妻を迎える前に子供があつてはまずいということで、家老の新見正信がわが子として育てる。後、このことが幻の天一坊事件へ発展する。綱重は正妻がなくなると、虎松を正式の長男として迎えることにしたが、このとき新見の反対派が、虎松はすでに早世し、極秘に自分の実子を養育している、と幕府に訴えたためであつた。あやうく天一坊にされかねた虎松であつたが、このときは幕府が虎松の正当性を認めて異議を却下する。

寛永十一年、虎松ははじめて四代將軍家綱に拝謁、延宝四年元服して綱重を名乗り、延宝六年(一六七八)父綱重が逝去すると甲府千五万石をつぐ。やがて元祿文化が細燦と花ひろくが、おじである五代將軍綱吉は子室に恵まれない。綱吉のなんとか後継者を、の願いは生類あわれみの令につながっている。宝永元年に長女鶴姫が死ぬと、ついにあきらめて綱重を養子とすることを決め、西の丸に迎えられる。日比谷公園の甲府邸はこうしてなくなる。

宝永六年(一七〇四)一月、綱吉が死んだので家宣は四十八歳で六代將軍となつた。家宣將軍の登場は綱吉の悪政に悩まされた市民から歓迎される。家宣

はまず生類あわれみの令を廃止し、間部詮房と新井白石を登用して、いわゆる正徳の治を布いている。しかし家宣は正徳二年十月五十一歳で病死する。その治政はわずか三年にすぎなかつた。

家宣のあとの七代將軍にはその子家継がつぐ。家継は宝永六年生まれだからこのとき四歳にすぎず、実際の政權は詮房と白石がすすめる。しかし幕閣内には反白石勢力も根づよく、対立がつついて政治が停滞する。そして家継は正徳六年四月逝去。八歳のはかない運命であつた。

### ④0 中期阿部家

帝國ホテルには江戸中期と後期の一回阿部氏が入るが、元祿文化華やかな天和二年(一六八二)四月から明和元年(一七六四)七十八年間あつた阿部氏は阿部宗家である。阿部氏は藤原氏流。関ヶ原の合戦で徳川方に

ついて五千石を受け、正次のとき家光に認められて埼玉県の岩槻五万石に累進次の重次はさらに九万九千石に増加されたが、家光死後に殉死している。

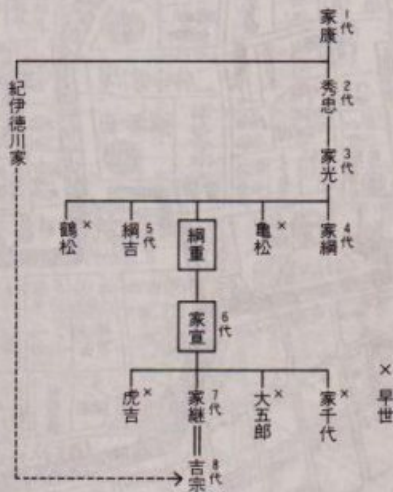
帝國ホテル初代の対馬守(備中守)正邦は、万治二年(一六五九)父定高が亡くなつたとき、わずか二歳にすぎなかつた

ので、一時おじの正春がつき、十四歳のとき、改めて父の遺領を相続した。天和元年、京都府の宮津九万九千石に移り、翌年、帝國ホテル賜邸を受けている。正邦はさらに元祿十年栃木県の宇都宮十萬石、宝永七年福山十萬石に転じたが、こうした相次ぐ国替えに藩財政は窮乏し、これを補うために、収奪強化と厳しい領民強圧をくりかえす。帝國ホテル時代の阿部家は百姓一揆の対応に追われている。

最初の全藩規模総一揆は享保二年(一七一七)で、宝曆三年(一七五三)の一揆では強訴、打ちこわしと暴動化した。このときは農民の願いが一応認められたが、やがて首謀者の多くが捕まつて厳罰に処せられると、領内は消えがたい不信感でおおわれる。後、明和六、七年、天明六、七年の凶兇時に再び大百姓一揆が激発して農民勝利へとつづく。

この間、阿部氏は正邦が正徳五年(一七二五年)一月、五十八歳で逝去し、次は伊勢守正嗣がつぐ。この人は元祿三年生まれの四男だが、上の三人が早世してくりあがつた。寛延元年(一七四八年)隠居して明和六年十月、七十歳で歿した。次の伊勢守正石は中央幕閣で

### 徳川家系図



活躍する。宝暦二年四月養者番となり、六年五月寺社奉行、十年十二月所司代となり、明和二年十二月、老中に就任する。

当時幕政は田沼意次、意知父子による賄賂政治がその極に達していた。正右もその田沼父子の片腕として十代將軍家治に任え、権勢は一気に高まった。天明五年（一七八五）意知が殿中からの退出時に暗殺されると、翌六年には家治の病死にからんで意次も失脚し、田沼時代が終りを告げる。この時正右も二十一年間つとめた老中職を辞任している。幕政は松平定信の寛政の改革へとつづく。

#### ④ 前橋の酒井忠挙

「天下のことみな雑案頭（忠清）の指南に漏るるものなし」。延宝九年（一六八一）三月から元禄六年（一六九〇）十二月までの十二年間、日比谷三井ビルの一画には下馬將軍とうたわれた酒井忠清の子、河内守忠挙邸があった。下馬とはその役宅が江言城大手門前の下馬札そば（現在の三井物産、丸の内消防署）にあったことからきている。江戸城外の將軍といふ意味もあった。

名門・酒井家には「系統ある

が、譜代大名の別格として大老を約束された雑案頭家は、藩祖親清の二男家忠の流れである。重忠のとき關東入府に従い、その子忠世は老中、大老を二十四年間つとめ、一人おいた忠清が忠挙の父になる。

忠清は四代將軍・家綱の信任を独占して専横を振るったが、延宝八年十一月の將軍後継問題でつまづく。子のない家綱の次期將軍に有栖川宮幸仁親王を迎えようとしたのである。しかし、有栖川將軍は水戸光圀や堀田正盛の猛反対にあつて実現せず、代つて家綱の弟綱吉が五代將軍の座を射とめる。

綱吉は直ちに忠清を罷免すると堀田正盛を老中筆頭に据え、下馬先の酒井邸も没収される。このとき、その子忠挙が日比谷松平忠之郎の賜邸を受け、忠清は天和元年（一六八二）五月逝去している。

忠挙は慶安二年（一六四九）の生まれ。酒井家へは度々のお成りがあったので、幼少時から家綱にかわいがられた。父の失脚後、前橋十三万石をついだが、当初は「父在職中のはからいにいきすぎがあった」として六カ月の通禁も受ける。

忠挙は父の反動もあって中央では閑職に終始するが、この間積極的な藩体制強化にとりく

む。これまでの酒井家は中央幕閣での華々しい活躍の反面、藩政は曲り角でもあった。家臣には学問や武芸を奨励する一方、綱紀の肅正、儉約を徹底して、違反をきびしく処分した。また諸制度の整備、元禄検地の実施、商業振興など、その充実した藩政は前橋酒井家随一の名君と語りつがれている。酒井家は元禄六年豊敷替えがあつて日比谷を去り、忠挙は享保五年（一七二〇）十一月、七十歳で逝去している。

#### ④ 青山大膳亮

寛水十八年から元禄三年六月まで、電氣ビルにあつた青山家が元禄六年（一六九〇）十月再び日比谷に戻つて、寛政元年（一七八九）までの九十六年間、三井ビル、旧日比谷劇場などの一画に住んだ。

最初の住民である播磨守幸督は前回紹介したが、幸督の後は宝永七年（一七二〇）十月から大膳亮幸秀。この人は父の遺領兵庫県の尼崎五万石から正徳元年（一七一二）長野県の飯山に入り、享保二年（一七二七）再び京都府の宮津に移封されている。延享元年（一七四四）九月、四十九歳で逝去。

幸秀には八男があつたが、長

男勇は卓世、つづいて四男の幸篤が嫡子となつたが、嗣嗣のため嫡嫡となり、庶子ながら三男の大膳亮（大蔵少輔、大和守）幸道がつぐ。宝暦八年（一七五八）岐阜県の郡上四方八千石へ国替え。郡上藩は前任の金森出雲守が財政難のため強引な検地を行ない、あいつぐ強訴と江戸への出訴で改易されたいわく地であつたが、幸道は切捨田畑を調べて増収を打ち出す。

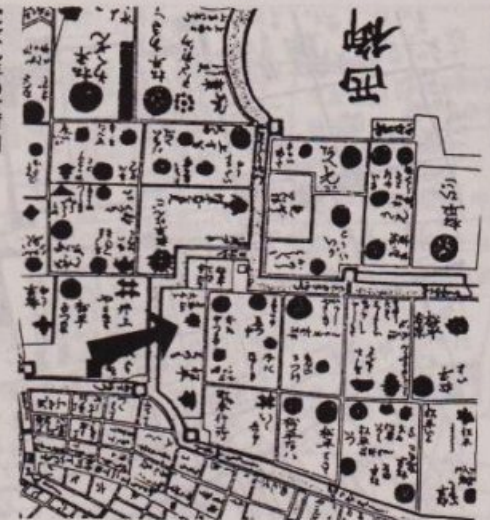
次の大膳亮幸完は寛政の改革ブレイクの一人として知られている。安永四年（一七七五）就封、八年養者番となり、天明八年（一七八八）若年寄へ。

当時の幕政は十一代將軍家斉のもと田沼政治を改めようとした寛政の改革が松平定信の手ですすめられていた。改革は奢侈遊情に流れる風潮を享保時代に戻そうといつもので、文武を奨励し、検約の徹底をはかることであつた。株仲間の解散で価格安定をはかり、旗本・御家人の借金棒引き令も。

幸完は、若年寄として将来を囑望されたが、寛政三年（一七九二）八月病いのための辞職を願ひ出た。



元禄三年の江戸図



寛政九年の江戸図

### ④北條中興の祖氏朝

三井・三信ビル前の日比谷通りは、真田中興敷の後、岡田義政、善次父子、堀田正英となつたが、その後、さらに変遷がつつた。

貞享(一六八四)のころから坂本内記重治、元祿二年(一六八九)八月から植村土佐守忠朝、元祿八年(一六九五)から二年間、北條伊勢守(美濃守)氏治、遠江守氏朝が入っている。

坂本氏は、はじめ武田家に仕え、貞古のとき関ヶ原の合戦で徳川方についた。父は五百七十石にすぎなかったが、重治に至つてとんとん出世する。天和元年(一六八二)大目付を振出しに寺社奉行にすすみ、深見藩一万石の大名に取り立てられた。はじめその精勤ぶりを賞賛されたが、貞享四年には逆に勤務不良とされて、二千二百石の旗本に降格された。上りも下りも一瞬、日比谷邸もこのときと取された。

次の植村忠朝も同じ運命を辿る。植村氏は代々愛知県に住み、三万ヶ原の戦いでは、秦忠が僧兵を率いて家康を援けた。はじめ千葉真内で三千石を受け、元和二年からは九千石、秦朝をへた忠朝は御書院番頭、大

番頭をへて、天和二年四月加増があつて一万一千石の大名に列した。しかし幸運もここまで。宝永元年(一七〇四)植村千吉殺害事件に連座して除封されていく。

北條氏は関東に雄飛して戦国大名の典型といわれた北條早雲の流れをくんでいる。天正十八年、氏政、氏照は豊臣秀吉の軍門にくだつて自刃したが、嫡子氏直と弟氏規は和乎に努力したとされて赦免された。

氏規は大坂府の狭山で七千石を受け、さらにその子氏盛のとき四千石の加増があつて大名となったが、その四、五代目藩主が日比谷大名となつた氏治、氏朝である。

氏治が寛文十年(一六七〇)に家督をつごとしたとき幕府の猛反対があつた。それは養父が病身で長い間出仕できなかったからである。氏治は新規取立ての扱いで狭山藩主となつた。次の氏朝は北條藩中興の祖といふ。藩財政を整備して軍政、民政につとめる。また伏見奉行、寺社奉行など中央での活躍も見逃せない。

### ④松平大給主計

江戸中期の三信、三井ビル前の日比谷通りはのまぐるしく

変遷する。万治からの三千年間、五つ々の大名家が入り替つたことを紹介したが、元祿十年(一六九七)十月からの松平主計頭近鎮からは、役職旗本が移り住んでいる。

松平主計家は松平第三祖からはじまる徳川一門の松平大給家の出である。長男栗元の子孫は愛知県の西尾・奥殿藩、岐阜県の岩村藩を興すが、三男親清の子孫は大分県の府内大給家となり、その四代後の忠昭の二男が日比谷住民となつた近鎮。さらに分知して一家を興した。

近鎮は明暦三年(一六五七)に四代將軍家綱に拜謁して、中興番をつとめ、さらに小姓番頭をへて、天和三年(一六八三)からは大番頭にすすんだ。小姓番頭は書院番とあわせ両番と呼ばれる重職。会社の秘書室をもつと大きくしたような職務で、將軍の君父を勤める。小姓組は一組が五十人からなり、番頭はその長。職祿は四千石で、大番頭は五千石ながら、誰大名の待遇を受けた。

近鎮は將軍一門の幹部旗本として活躍、正徳二年(一七一二)に隠居して、享保二年(一七二七)七十一歳の生涯を閉じ

この松平大給家の日比谷在任は五年間にすぎなかったが、次

の土屋朝直、秀直父子は元祿十五年十一月から享保十二年(一七三〇)まで二十八八年になる。土屋氏は足利支流で、一門には栗木具土藩土屋藩九万五千石がある。朝直ははじめ山城守に任官、ついで備前守、甲斐守、丹後守とめまぐるしく変わる。貞享二年(一七八五)のご書院番頭を振出しにお小姓番頭、ご書院番頭と事務系幹部役職を歴任。日比谷賜邸直前の元祿十五年十月、大番頭に昇進した。

享保七年、朝長が没してその子兵部少輔秀直がつく。秀直の日比谷時代はお使番、お小姓番頭につつき、最後がお側衆。家祿は朝直のとき千石から三千石に増加されている。

江戸中期の三信ビル、三井ビルの日比谷通りに高級幹部旗本がつづいたことを紹介したが、土屋秀直について、松平乗興、安藤愛定とお側衆が賜邸されている。

享保十一年(一七三三)からの五年間は松平内匠頭乗興邸となつた。この松平家も前回紹介した松平大給系。直系の家乗家の分家で、佐賀県の唐津七万石の城主であつた栗春の二男がこの乗興である。元祿三年(一六

### ⑤つづくお側衆

江戸中期の三信ビル、三井ビルの日比谷通りに高級幹部旗本がつづいたことを紹介したが、土屋秀直について、松平乗興、安藤愛定とお側衆が賜邸されている。



元禄六年の江戸図



享保五年の江戸図

九〇）五歳のとき父の遺領のうち五千石を分知されて乗興家を興した。

乗興は、はじめ中奥小姓となり御小姓番頭、御書院番頭とすすみ、日比谷賜邸は次の御側衆時代である。御側衆は將軍の側にあつて御用の取次や將軍の裁定などを伝えるいわば秘書役、その待遇は大名に準じていた。享保十七年寄合し戻り、日比谷邸を上取される。宝曆二年（一七五二）逝去。六十七歳。

享保十七年四月から七月までの三月月間は安藤出羽守愛定、主計頭（山城守）定厚父子が住んでゐる。安藤氏ははじめ松平家に仕え、一時、今川、北条にも属したが、関ヶ原の合戦では徳川方にあつて重吉が伏見で戦死した。愛定は御小姓番組、御書院番頭、御側衆をつとめ、日比谷賜邸一月後に五十七歳で亡くなる。その子定厚は中奥お小姓となるが出仕をとめられ、七月、日比谷邸を上取されてゐる。

この安藤家の日比谷賜邸を伝える資料が『東京市中橋』に載つてゐる。  
「日比谷御門内安藤出羽守屋敷、坪数千八百坪ほかに三百五十九坪土手、東五十一間五尺、西四十七間五尺、南北二十九間四尺一三十五間五尺。」

田安御門外安藤出羽守屋敷を用ひつゝ召上げられ、代地のため日比谷御門内松平内匠頭殿上ヶ池の内、出羽守屋敷拝領つかまつり……。享保十七年四月二十三日、御側衆安藤出羽守内島村勝右衛門……」

享保十七年七月、この日比谷御門屋敷は三井ヒルの二圃にあつた青山大膳亮にお領けとなり、この後南北二つは分けられる。

#### ④6 養子続きの深溝家

元祿四年（一六九二）十二月慶長からニュートキーヨーにかけての一圃に、十八松平の一つ松平深溝家が入つてゐる。

『藩翰語』をみると「父子あいついで四代まで徳川殿のためみな戦死をせしめたりける」とある。この松平家は松平第三祖信光の七男元芳からはじまつてゐるが、その弟親忠が徳川家の祖となるので、徳川一門の有力松平家としても知られてゐる。

忠定、好景、伊忠と三代にわたつて戦死した後、家忠も関ヶ原の合戦のとき、家東の関東出陣の留守を守つて伏見城で華々しい討死をとげ、これが『藩翰語』のいう四代みな戦死にあたる。

忠利のとき、愛知県の大塚一萬石を領有したので松平深溝と呼ばれた。後、愛知県の吉田、京都府の福知山と転封した後、寛永九年（一六六九）から長崎県の島原六万六千石に宋進してゐる。

日比谷最初の住人は主殿頭忠房。忠房が福地山にあつた二千年間は民政に力をそいで、孝子を表彰するなど善政で知られた。西日本一帯のお目付け役でもあつた島原に國替えが決まつたときも、四代將軍家綱から「島原は難治の地ゆえ、人を遠んで移すので、よく忠勤するよう」激励されてゐる。

しかし、忠房の代は期待にこたへたものの、宇都宮転封までの四代は、養子相続と内紛、天災や悪疫、農民の逃散などが相ついで、將軍の意向どおりにならなかつた。

忠房は學問好きで、自然を觀賞して楽しむなど元祿大名として生きる。三人の男子はいずれも早世したので嗣子に一族の忠雄（以降いづれも主殿頭）を迎えるが、この人も享保二十年（一七三五）病死したとき男子三人がいずれも死去してゐた。芳喬、忠刻とつづく養子四代は藩内に派閥を生みだし、家中の内紛が絶えなかつた。

忠刻が寛延二年（一七四九）参勤交替の途中で急死すると、

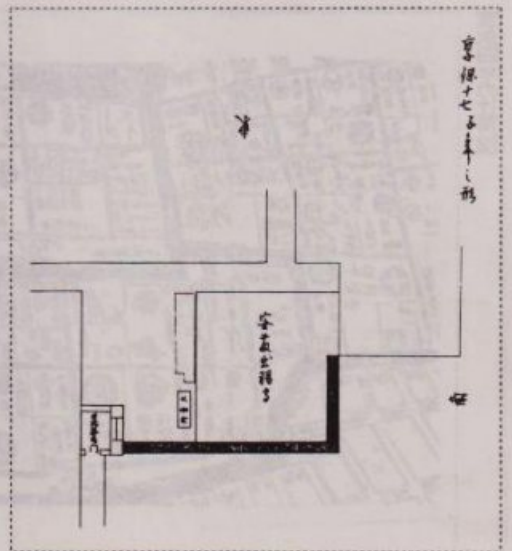
十二歳の実子忠継が遺領をつぎ、幕府はこの年橋本県の宇都宮転封を決めてゐる。日比谷松平主殿家は、こうしていったんは島原を離れ、二十五年後に再び復して明治維新を迎える。

#### ④7 春日局と稲葉

朝日生命日比谷ビル、東宝ツインタワービル、日比谷パークビルに江戸中期在住した大名三家は相ついで老中昇進をはたしてゐる。

今回はそのうちの二代、延宝七年（一六七九）から八年間あつた静岡県の田中四万五千石土屋相模守数正と、つづく貞享四年（一六八七）から十三年間上屋敷があつた新潟県の高田十方三千石稲葉丹後守正往で、次回紹介する戸田能登守は元祿十四年（一七〇一）から、日比谷にあつて、いづれもその前後幕閣中核で活躍する。

土屋氏は清和源氏の義家流。はじめ武田家に仕えられるが、忠直のとき家康に認められて関ヶ原の合戦後、千葉県の久留里二万石を与えられた。その二男数正がこの土浦土屋家のはじまりである。のち本家は城地を没収されたが、数正の子孫は幕末



享保十七年の日比谷園



宝永四年の日比谷

につづく。

政直はその教止の長男。賜邸のあった延宝七年に茨城、栃木、神奈川県内に分散していた四万石を継いだ。天和年(一六八一)には田中城に封を改め、その後譜代門閥のエリートコースを歩む。貞享元年大阪城代、翌年京都所司代、待従とすすみ、四年十月には老中の座を掌中にする。

政直の老中期は五代將軍綱吉の元禄時代を中心に六代家宣、七代家継、八代吉宗までの三十二年間。この間、牧野成貞、柳沢吉保といった側用人政治のなかで生類憐みの令をすすめ、家宣・家継時代は間部詮房・新井白石ラインに反発も。

次の稲葉氏は斎藤道三の臣林正成が稲葉重通の女婿となつて、のちの淀稲葉家を興したのがはじまり。慶長十一年岐阜県の本江に二万石を与えられ、新潟県の糸魚川、直岡に転ずる。

とこの稲葉家を中堅譜代に押しあげたのは、この正成の妻が三代將軍家光の乳母春日局であったからだ。次期將軍が弟国千代に傾きかけたとき、家康に直訴してひっくり返した春日局は、その後も大奥にあつて絶大な権勢を振るつていた。稲葉家は正勝、正則とつづくが、日比谷住民の正往も幼少期から大奥

を訪ね、曾祖母春日局や家光にかわいがられている。

天和元年、奏者番、寺社奉行、京都所司代となり、同三年四十三歳の時、父が隠居して、神奈川県の小田原、城主となりすく高田十万一千石に転封となった。正往が日比谷住民となつたのは、この間の十二年間、やがて幕閣で重きをなささうになる。

元禄十四年から六年間が老中。元禄末期は飢饉や大火が多く、十七年に年号を宝永を改める。人々は元禄の繁栄の影にお犬さまに泣き、富士の大噴火にゆれた。退廃した綱吉政治の末期でもあつた。

### ④8 老中戸田能登

朝日生命ビル、東宝ツインタワービル、日比谷パークビルの江戸中期は、土屋、稲葉の老中二代につづいて、高田六万七千石戸田能登守(日向守、山城守)忠真もまた老中昇進をはたした。

戸田氏は政光の次男光忠にはじまる。その子忠次が天正十八年家康の關東入国にしたがい、慶長六年、尊次とき二万一千石の大名に取り立てられた。一代とんだ忠高は老中として名望があり、その子忠真が日比谷住民になる。忠真は慶安、年生ま

れで、十五歳のとき日向守に叙任して、貞享二年七月奏者番となり、四年寺社奉行と出世街道をすすむ。

元禄十二年には父の遺領である千葉県の佐倉六万七千石を受け、翌十三年(一七〇〇)十一月、日比谷賜邸を受け、十四年六月には前城主であり日比谷の先代住民でもあつた稲葉正往にかわつて新潟県の高田に転封している。高田はかつて松平忠輝、松平光長の居城として繁栄したが、光長家没落後は稲葉、戸田といつた中小藩がつづいて藩政も消極政策がとられる。不用となつた前藩士邸も開墾し田畑としたが、藩財政は苦しく藩内の橋の修理も藩税で行えなかつたという。

宝永七年(一七〇〇)閏七月栃木県の宇都宮転封となり、正徳四年(一七二四)九月老中就任とともに役宅賜邸があつて日比谷を去つてゐる。戸田家は宇都宮にあつて幕末を迎える。

戸田家の後は埼玉県の川越五万石秋元伊賀守(但馬守)喬房、越中守喬求、涼朝三代が正徳四年(一七二四)九月から延享四年(一七四七)までの三十三年間在任している。

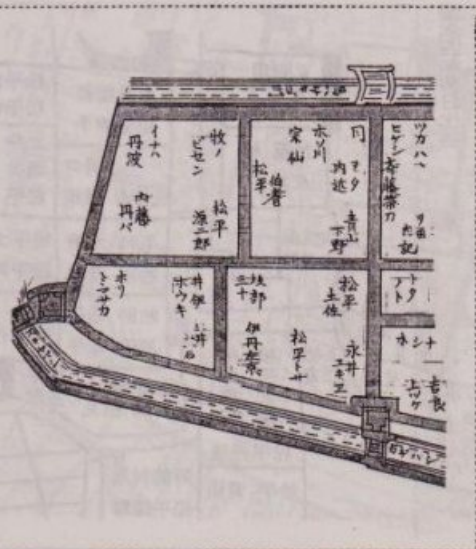
後群馬県の総社で二万石を賜わつた。泰朝、富朝の後若年寄、老中となつた喬朝がつぎ、日比谷の喬房はその子。父喬朝のとき川越に転じ養蚕や絹織物の生産を奨励、柿や養魚など農業の副業をすすめた。喬房は日比谷賜邸と同じ正徳四年、遺領を継ぎ、享保八年奏者番となつたが元文三年九月五十六歳で死去。

喬房には男子がなかつたので婿養子を迎えて相続する。喬求は戸田越前守忠余の二男。天文三年(一七三三)十月遺領を継いだ。延享元年(一七四四)二月、二十九歳の若さで亡くなり、再び秋元貞朝の三男原朝を養子に迎えている。

### ④9 電気ビルの中期

電気ビルから交通公社有楽町店の入っているガード周辺の一画は、江戸前期兵庫県の尼崎五万石を領有した青山大膳家が賜邸されたことはこれまでご紹介したが、中期元禄以降の三十年間では、本多正水、内藤政親、とめまぐるしく変遷する。

元禄三年(一六九〇)六月からの本多紀伊守(豊前守、伯耆守)正水は、俗に沼田本多家と



元禄十一年ころの日比谷



宝永四年の江戸図



で、さらに正徳四年（一七一四）九月から享保元年（一七二六）三月までの二年間は老中職を拝命している。

短命で知られる七代將軍家経時代、土屋政直、井上正令、阿部正喬、戸田忠貞らと老中に列するが、政治は部下である幼將軍後見役岡部詮房、政治顧問新井白石が握り、反感をいだく六老中はサボターシユや無視戦術をくりひろげた。

貞享のころ（二六八四―）から元祿四年四月まで賜邸された松平藤井阿波守（伊賀守）忠周の藩祖は松平藤井二代信吉の二男忠晴にはじまる。天正十九年静岡県の田中二万五千石を受け、その後の度重なる加増で日比谷住民の忠周のとき京都府の亀山三万五千石を得ていた。

忠周も出世街道を邁進する。貞享二年若年寄、宝永二年御側用人、享保二年の京都所司代をへて、九年十一月から十三年四月までの四年間は老中職に就任する。同時代の老中には八代將軍吉宗のブレーンとして享保の改革の推進役を果たした松平重昌や水野忠之、若年寄本多忠統、御側取次有馬氏倫、加納久通、南町奉行大岡忠相、勘定奉行神尾春史らがあった。忠周も享保の改革の一翼をになった。

### ⑤ 国際ビルの池田藩

鳥取池田藩といふ因幡、伯耆二方国で三十一万石を領有した大名である。同姓の岡山三十二万石と同じ血統で、輝政が徳川家康の二女をめぐった。

この松平池田家上屋敷が江戸時代、現在の国際ビル、新国際ビル、東京会館、東越ビル、新東京ビルの一画にかけて大邸宅を形成していた。もともと池田氏が元和五年（一六一九）、悲運の勇将として知られる福島正則の上屋敷を賜邸された当時は日比谷寄りの約半分にすぎず、その後、周囲の火消し組住宅や大名屋敷を吸収したものだ。

池田氏は源頼光の後裔ともいう名門でもあった。信輝のとき織田信長と乳兄弟になってその後引立てを受け、その子輝政が池田を大々名に押しあげた。

日比谷初代住民となった備前宰相忠雄は家康の次女督姫を母としたが、この督姫と池田氏が厚遇を受けたこととは無縁ではない。忠雄はわずか九歳のとき兵庫県内で六万三千石を受けたが、輝政がなくなったとき世継ぎをめぐる毒闘事件が起った。督姫が自分の実子忠雄、忠雄にすべての遺領をつがそうと、庶子で長男の利隆に毒闘頭

を任掛けて失敗、自ら命を断った事件であった。忠雄はこのとき、亡くなった兄忠継の跡をついで岡山二十八万石に転じ、日比谷賜邸を受けた。

池田家は次の因幡少将（相模守）光仲のとき鳥取三十二万石となり、以降、因幡少将（伯耆守）綱清、相模守吉恭、宗家、重寛……とつづいて十三代が日比谷に在任する。

鳥取藩は大藩ではあったが、元祿以降他の大名家と同様に藩財政が悪化して藩主、藩士の生活を逼迫させる。幕府からの公役や相次ぐ災害復旧などの臨時出費が増え、参勤交代の旅費や上中下なご五つをかぞえた江戸屋敷経費も増加して、享保期には藩主の江戸参勤費用が捻出できずに四苦八苦している。

このため藩は一時、年毎の豊凶にかかわらず税を一定にする年限請負法を実施するが、享保・元文一揆などの反対運動にあつて撤廃せられる。

### ⑥ 江戸中期の日比谷

元祿文化は泰平ムードのなかで都市の消費生活を向上させ、新井白石、室鳩巢、養生道來らの学者を輩出した。文学や絵画・芸能の世界も井原西鶴や近松門左衛門、松尾芭蕉らを産んで

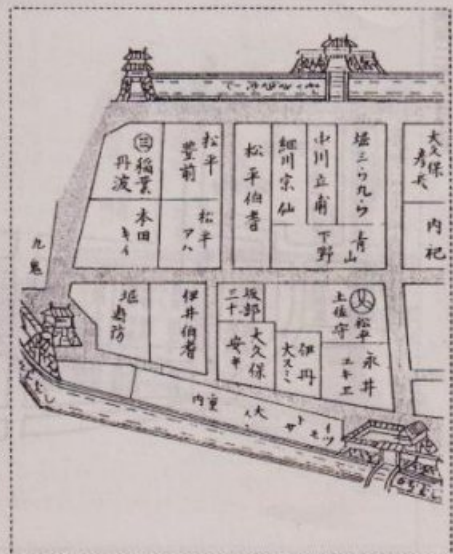
副働たる元祿文化を演出するが、一方で、インフレや道義の頹廃もめだち、米作経済を基盤とした封建制度そのものをゆさぶるのである。

帝国ホテルの岡部宗家が相次ぐ転封にあつて藩財政が逼迫、これを補うために収奪強化と厳しい領民弾圧をくりかえしたことを痛感紹介したが、この後紹介する佐倉畑田藩、笠間牧野藩、岡崎本多藩をはじめ、どの大名家も多額の借財をかかえて藩政の改革にせまられていた。

日比谷公團にあつた徳川綱豊（家宣）が五代將軍綱吉の養子となつて、その子家継とともに六、七代將軍に襲封したことを紹介したが、その家継もわずか八歳で病死して、八代將軍には紀州の吉宗を迎えることになる。

吉宗は紀州光貞が下女に手をつけた庶子であったが、紀州家に嫡子が亡くなつて御三家五十五万石を継ぎ、やがて將軍の座がころがりこんだ。この吉宗は大奥育ちの將軍とはまったく違つた環境に育つたことから、次々と新機軸を打ち出す。節約と尚武の風を奨励して、軟弱な幕府政治を正す。いわゆる享保の改革であつた。

吉宗はその治政三十年間にわたつてこの改革に取り組みが、



元祿はじめの日比谷



宝暦十三年の日比谷



その一つは幕府の人心を一心にするための抜擢であった。その一人が有楽町ビルの老中筆頭・松平乗昌であり、朝日街にあった南町奉行所の大岡越前。改革は幕府の財政をどうやって建て直していくかということ。消費支出に歯止めをかける一方、農民からの年直取り立てを、より厳しいものにした。

しかし、農村対策に全力を傾け、米將軍の異名までとった吉宗ではあったが、この改革も成功するには至らなかった。財政の逼迫は貨幣の改鋳、増発にすぎず、農村一揆の激発は幕藩体制をおびやかす。江戸時代はかかえきれない矛盾をほらみながら後期へとすすんでいく。

⑤④ 江戸後期の日比谷

八代將軍吉宗の享保の改革は、元祿以来の奢侈の風潮に真向うから対決したものであったが、その性急な厳令は市民の反感を買って成功しない。

吉宗の没後、九代將軍家重に変わるが、この人は言語障害が激しく、幕閣でも何をいっているのかわからなかったという。ただ一人聞き分けることのできた大岡忠光の権勢が高まり、やがて側用人政治がはじまる。側用人は公然と取柄を受け、次の

十代將軍家治のとき、田沼意次が登場して暗(まいない)政治がその極に達するのである。天治七年(一七八七)十一代將軍家重の補佐役として老中首座となった松平定信は、田沼一族を追放して寛政の改革を断行する。その寛政の改革が六年で挫折した後、大御所の文化文政(一八〇四)元禄時代へとつづく。滝沢馬琴、喜多川歌麿、五代目市川団十郎、平賀源内らに代表される文化文政の華が咲き誇った繁栄の一方で、地方の困窮はその極に達していた。

十二代將軍家慶のもと幕閣の中心に座った水野忠邦は大御所の逝去を待って、享保、寛政に続く天保の改革に挑む。天保の改革は幕府財政直しのため、奢侈を取締まり、低物価政策を貫こうというものであったが、安売になれた役人や一般市民に歓迎されるはずはなかった。上知令を契機に猛反対がおこり、忠邦が失脚する。第一生命ビルにあった土井利位は、このとき忠邦ブレンから一転上知令反対に変わり、忠邦のあと老中筆頭にすすむが、難局を迎えた外交問題をかかえて忠邦の復帰と入れ替わりに老中職を退いている。

江戸中後期の日比谷は幕閣の町であり、奉行所の町であり、

医官の町であり、そして敗政難にあえぐ譜代中堅大名、その勢力を著々と養いつつあった外様雄藩の江戸屋敷の地でもあった。

第一生命からは牧野忠精、青山忠良、交通会館からは堀田正亮、帝國ホテルからは井上正経、有楽町ビルからは本多正珍らの老中が生まれ、朝日街には南町奉行所があつて大岡忠相、遠山景元、鳥居權蔵ら三千八名が名を運ねた。そして、三井ビル前には將軍主治医の今大路道三があり、日比谷公園には毛利、鍋島、三井ビルに牧野越中守、ガード周辺松平主殿頭、パークビル本多中務大輔、電気ビル永井飛騨守らがあつた。

⑤⑤ 吉宗ブレン乗昌

紀州家から八代將軍を継いだ吉宗が享保元年(一七一六)から延享二年(一七四五)までの約三十年間、精力的な改革政治を遂行したことを紹介したが、その吉宗のブレンとして二十一年間にもわたって幕閣に列した松平大給和泉守(左近將監)乗昌も老中職就任前の元祿四年(一六九二)六月から享保八年(一七三三)四月までの三十七年、有楽町ビル、新有楽町ビルの一画に住んでいる。

松平大給家は松平第三祖の孫乗元からはじまり、家乗のとき家康の江戸入りに従って群馬県内で二万石が与えられ、その後に加増で 唐津六万石の遺領を継いだ。乗昌が日比谷住民となった元祿はじめは、三重県の鳥羽六万石に移封された後であったが、在任中の宝永八年(一七一二)三重県の亀山、享保二年京都府の淀、さらに八年にも千葉県の佐倉六万石とめぐるしく国替えされている。

この乗昌が知られるようになったのは、八代將軍吉宗の就任後のことである。享保七年大阪城代、翌八年には老中に就任する。吉宗が幕府内の人心の統一をはかり、人材の抜擢を行なったことはよく知られるが、その最大の人事がこの乗昌であり、南町奉行所の大岡忠相であつた。

乗昌や水野忠之らのすすめた享保の改革は、幕府成立後百十年余りをへたこの時、社会の構造や体質の変化にあわせて、政治体制を組み替えることにあつた。上米制、足高の制、五公五民の採用、貨幣の大量発行、新田の開発、株仲間の育成などの諸政策はかなりの成果をあげるのである。

乗昌の享保の改革での華々しい活躍も九代將軍家重に変わる



文化年間の日比谷



享保元年の日比谷

と、その晩年は悲運に満ちたものとなっている。延享二年（一七四五）吉宗が引退すると突如失脚する。加増地と屋敷が没収され、江戸城への登城禁止、隠居、監禁などの処分も。そして、翌三年不遇のうちにも六十一歳の生涯をとげる。

乗呂ら享保の改革をすすめた吉宗ブレインは、新將軍家重から遠ざけられ側用人政治へとつづいたのであった。

### 56 桜田御殿の女たち

日比谷公園の交差点寄りにあった甲府城主の徳川綱豊が宝永元年（一七〇四）四十三歳のとき五代將軍綱吉の養子となり、六代將軍家宣となったことは⑧で紹介したが、その綱豊邸は桜田御殿、桜田御用屋敷と呼ばれて幕末まで残っている。

この桜田御殿は將軍死後残された側室たちの比久屋敷だが、『東京市史稿』には明和九年（一七七七）七月に安祥院が東西七十一間×南北五十三間、三千八百坪の屋敷を賜与されたときの記録が残っている。

「西の丸安祥院殿、只今までの住居地面御用について差しあげ、今度桜田御用屋敷のうちに元塚の通り代地お渡しになられ

る。四方間敷坪数お絵図の面、お定統の通り相違ござなく請取り申し候。後日のためよつくだんのごとし。安祥院殿ご用達阿部弥十郎。ご普請奉行石川弥右衛門殿」

安祥院はお遊喜の方、お千勢の方という。浪人の娘に生まれながら、松平朝春の養女となつて大奥に入り、九代將軍家重の寵愛を受けて、男の清水重好を生んでいる。家重死後一時落飾して西の丸にとどまったが、この日桜田御用屋敷に入り寛政元年（一七八九）に逝去した。重好は後、都下な百万石を領し、田安・一橋とともに三卿の一つにかぞえられる。

七代將軍家継の生母月光院も宝永元年（一七〇四）この桜田御殿（甲府邸のうち）の奥つとめがきっかけで六代將軍家宣の手がついた。六年七月、西の丸で鍋松を生み、將軍世嗣に。この人は浅草唯念寺の住職の娘で、後に実父も還俗して縁を受けた。

桜田屋敷にはこのほか家宣時代の右近の方、八代將軍吉宗時代のお久免の方など子持ち側室が余世を前將軍家重にあってるが、ただ一人変わり種高丘の老岳もこの桜田屋敷であった。高岳といえは十一代將軍家重時代、田沼意次派の大奥老女とし

て絶大な権勢を振るつたことで知られている。意次、失脚後の政治空白期に大奥を結集して松平定信の老中就任に反対した。定信の寛政の改革は、やがて大奥にまで及ぶので、高岳の老後も決して安閑としたものでなかつたに違いない。

### 57 御庭番長屋

日比谷公園の交差点寄りが宝永元年（一七〇四）から桜田屋敷、桜田御用屋敷と呼ばれ、將軍死後の側室たちの住居になつたことは前書いたが、実は時代劇でおなじみのお庭番長屋でもあった。

お庭番は八代將軍吉宗が享保元年（一七一六）紀伊藩の身分の低い士を呼びよせて創設したもので、城内の情報収集機関であったともいう。一口にいえばお庭を司る旗本だが、実際には単なる庭番にとどまらずに、江戸城の宿直、内庭の巡察に加え、將軍の耳目になつて諸大名の秘密事項を探ったりもしている。

一旦任務を受けると、農民や商人、僧侶に变身して目的地に侵入、ときには一年から三年も帰らず、身分がわかつてそのまま退業の最後をとげることもあった。このように危険をともな

う業務を担当したので、機転がきいて武術のすぐれたお庭番も多く、江戸後期では立身出世を果たすものもあらわれている。彼らは、はじめ日比谷公園の桜田屋敷にあり、やがて屋敷を与えられたり、虎の門、雉子橋御用屋敷に分散する。文化十三年（一八四二）武鑑をみると中級官吏待遇の両御番所格お庭番村垣十次郎、明葉重之丞、それより下の小十人格お庭番の古坂恒五郎、川村弥五左衛門、西村嘉十郎、高橋弥三郎、川村新三郎などはずでに賜邸を受け日比谷を離れ、桜田御用屋敷には小十人格の倉地新平、馬場彦太郎、ご休息お庭番知多田八三郎、倉地仁左衛門、お馬乗増岡鉄太郎、井出直次郎、森田常吉、お広敷添香格高橋勇吉郎、お庭の者支配馬場善右衛門、山里お庭番添香並高橋松三郎の名前がのつている。

お庭番は約二千家が世襲であったが、嘉永七年（一八五四）武鑑では、両御番所格が高橋、古坂、明葉、梶野、川村、野尻の六家に増え、二百石取りに。当初は両御番所格が、百俵で小十人格が三十俵であったことを考えると随分厚遇されていることがわかる。

お庭番から世にでた人たちは多い。勘定奉行となつた明葉飛



明和八年の日比谷（日比谷公園）



宝暦九年の日比谷門外

彈守茂村や堀野土佐守良材、遣米副使村垣淡路守純正などである。彼らは將軍の信頼を得て立身出世街道を歩んだのである。

### 58 名奉行大岡越前

大岡越前の名奉行ぶりはテレビや談話でおなじみだが、その大岡越前守忠相が活躍した南町奉行所が、有楽町マリオン裏の朝日街にあった。

この一画は、寛永はじめから飯田堀藩の上屋敷があったところで、当初はマリオンを含む大藩邸であったが、元禄十一年(一六九四)の大火で地所割換があり、さらに宝永四年(一七〇七)ここでの初代奉行松野老岐守が役宅賜邸されたとき滅地があつて、マリオンは空地になつた。

当時江戸市中には三奉行所があつて北町奉行所と呼ばれるが、それが南町に変わるのには享保四年(一七一九)のことである。度々の移動でこの北町が一番南はじにきて、まん中に南町、北はじに中町奉行所が位置するという変則な形になり、この年に奉行所制になつたとき、南町奉行所と改称されたものだ。

臣藤原数実の遺裔。忠政の時三万ヶ原の戦い、長祿の戦いに従つて六百石を受け、その三男が分知され、さらしその子忠貞のとき千七百石にすんだ。忠相は同族の大岡美濃守の子だが、十歳のとき忠貞の養子に迎へられた。

忠相が享保の改革をすすめた八代將軍吉宗に認められるようになったのは、山田奉行当時の訴訟判決が評価されたためだ。その後、普請奉行となつて江戸に戻ると、享保二年には町奉行に抜擢されて越前守となつた。忠相は在任中の二十年間、吉宗ブレインの一人として享保の改革を助けるが、その間、いくつもの名裁判を残している。三方一面損、地蔵しぼり、天一坊事件など枚挙にいとまがないが、実はこれらのほとんどがフイクションであつたり、他の奉行の裁判記録や中国の故事を脚色したものだといふ。しかし、町火消制度の整備、風俗取締り、小石川療養所の建設、物価安定への努力などその業績は大きく、その公正な裁判ぶりとともに江戸市民の人気を集めた。

忠相は元文元年(一七三二)後任の松波筑後守にバトンタッチして、自らは寺社奉行に栄転、宝暦元年(一七五一)にはそれも退いた。忠相はその間、

愛知県内で一万石の大名に列したのである。

### 59 南町奉行所

朝日街にあつた南町奉行所は、大岡越前守が二十年間就任して名奉行とうたわれたことを前回紹介した。町奉行は老中支配で、旗本のなかからとくにくれた人材が登用された。これは重要な職責であることに加え、配下の与力や同心が世襲制であつたので、よほど優秀でないといふ務まらないという背景もあつた。このため、五百石程度の小株のものが抜擢されることも珍しくなかつた。役高は三千石。

その職務は江戸市中の町屋を支配し、行政、司法、立法、警察・消防などをつかさどつていた。通常南、北二つの奉行所があり、両所は一月おきに執務することになつてた。月番にあつた方は、大門を開いて新しい訴えを受け、非番の方は前月受理した事件の整理にあつた。南町奉行所を伝える『大岡越前守御役屋敷絵図』によると、敷地面積が一千六百七十七坪、うち建坪が千八百九坪、役所向三百七十五坪とある。町奉行所はお番所とも呼ばれ、役所と同時に、役宅で、表が役所、

裏が住居であつた。

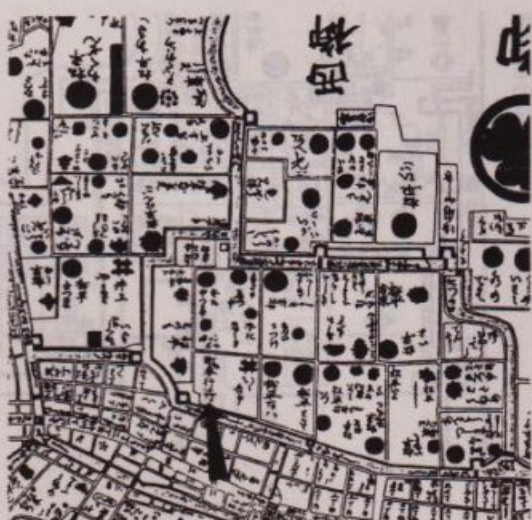
南町奉行は元文元年(一七三二)六〇に大岡越前から松波筑後守に引継がれたことは既述したが、その後、元文期が水野勝彦、島祥正、延享・馬場尚繁、寛延・山田利延、宝暦・土屋正万、明和・牧野成賢、天明・山村良旺、寛政・池田長恵、坂部広吉、村上義礼、根岸鎮衛、文化・岩瀬氏紀、文政・荒尾成章、筒井政憲、天保・矢部定謙、島居彌蔵、弘化・跡部良弼とつづき、弘化二年(一八四一)から嘉永五年(一八五二)までの七年間は遠山板を散らせた遠山左衛門尉景元、つづいて池田頼方、伊沢政義、黒川盛泰、小栗忠順、井上清直、佐々木頼菊が就任している。

幕末期はさらに異動が激しかつた。最後の五年間で十人。慶応四年(一八六五)三月から三ヵ月間勤めた佐久間信義を最後に三十八人の奉行が名を連れるのである。

江戸後期、この南町奉行所で多くの名裁判、迷裁判が生まれたが、天保の改革で渡辺華山や高野長英らを弾圧した島井彌蔵は、その苛酷な市中検査ぶりに彌甲斐と呼ばれて恐れられた。



享保二十年の日比谷



寛政九年の日比谷

⑥0 中期の帝国ホテル

④0で、帝国ホテルの元祿時代以降、農民一揆の対応におわれた阿部宗家を紹介したが、その後、明和、安永期は、井上正経、正定父子、堀田正順とかわっている。

明和元年（一七六四）五月から九年間存在した井上氏は、徳川創設期の重臣正就の子孫になる。正就は家康に認められて御用人、老中へすすむが、江戸城内で殺害された。次の正科も老中に。この間、三重県の亀山、茨城県の笠間、福島県の平をへて、日比谷時代は静岡県の浜松六万石を領有する。

正経も中央幕閣として活躍する。宝暦二年（一七五二）寺社奉行、六年大阪城代、八年には京都所司代となり、十年から三年間は老中首座に。十代將軍家治の將軍宣下では後の大老井伊直幸とともに上落して、桃山天皇に拝謁している。十二年病氣のため老中職を退き、幕政は暗黒時代で知られる田沼意次へ引きつがれる。次の河内守正定も安永二年（一七七四）奏者番、天明三年（一七八一）寺社奉行にすすみ、将来を囑望された六年三月、現職のまま逝去している。

明和九年三月から天明元年九

月までの九年間は堀田相模守正順が賜邸される。堀田氏は三代將軍家光の乳母春日局の縁にながって出世した堀田正俊の五代子孫で、通称佐倉堀田藩とい

う。この堀田家は先だつ寛保二年（一七四〇）から延享二年（一七四五）までと、この後の天明元年から文政元年までの二回にわたって、そごうと有楽町駅の一部、交通会館の一面に住むなど、日比谷とのかかわりが深い。父の正亮は奏者番、寺社奉行、大阪城代とエリートコースを歩み、延享二年（一七四五）から十六年間老中を勤める。

正順は宝暦十一年（一七六六）一、父の遺領千葉県の佐倉十萬石をつぎ、その治政は四十五年間におよぶ。この間、藩財政は次第に欠乏し、天明時代には天災も加わって藩政は一段と厳しさを増した。各地で一揆が起り、三年にはその一揆が佐倉城下に迫って動揺した藩が、農民の要求を大幅に認めている。

⑥1 笠間牧野四代

江戸中期のニッポン放送、第一生命、農林中金ビルの一画は笠間牧野藩邸であった。牧野といえは幕末の戊辰の役で長岡城下を焦土と化した宗家牧野六万

石が知られているが、この笠間牧野家は長岡牧野藩祖康成の三男儀成のそのまた四男からはじまる。

牧野氏ははじめ平家に属して源義経に敗れ、今川義元に組して織田信長とも戦った武門の家柄。成定のとぎ家康につかえ、天正十八年群馬県の大胡三萬石を得、やがて長岡に移った。笠間牧野藩は茨城県の関宿五萬三千石を与えられた成貞が藩祖で、その子備前守成春からの四代がこの住民になる。

牧野藩はなにしろ転封が多かった。元禄十年（一六九七）四月の賜邸時こそ関宿にあったが、愛知県吉田八萬石、宮崎県の延岡八萬石とかわり、延享四年（一七四七）からは茨城県の笠間八萬石と転封をくりかえした。

笠間藩では幕末までの一世紀以上にわたって藩政を布くが、この間、文化期に藩校時習館を作り、安永天明期には藩儒井上金嶽が活躍している。また、唯心一刀流や示現流がさかんで武芸熱心な城下町としても知られる。

笠間は米どころとあって比較的裕福な藩だが、厳しい年貢取立てに農民の不満は限界を超えていた。寛延二年（一七四九）には茨城山外郷で大規模な年貢

減免要求一揆が起って藩政をおびやかす。

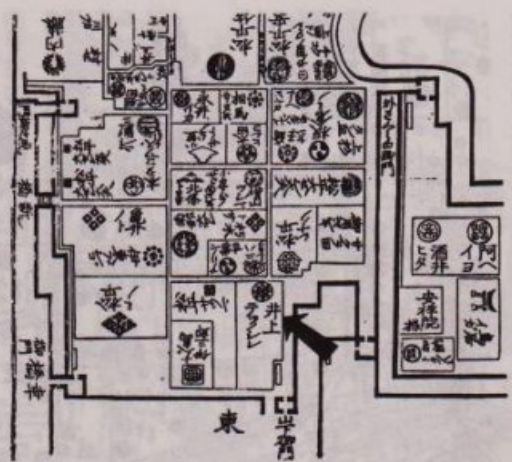
この間、藩主は備後守成央、越中守（備後守）貞通とかわり、この一画の最後が寛延二年からの越中守（備後守）貞長である。貞長は京都所司代をへて、天明四年（一七八四）から寛政二年（一七九〇）までの六年間、田沼時代後期とその後の混乱期に老中職に就任する。

天明六年八月十代將軍家治が病死。家治は筆頭老中田沼意次が推した町医師の薬を飲んで急死したので、毒殺説が流れ、意次は非難轟々のうちに失脚する。これを契機に田沼派と松平定信派の政争が十ヵ月つづくがこの混乱期の老中が、貞長らであった。定信の登用が決まり、寛政の改革がはじまると田沼時代の幕閉ちは次々に退けられる。

天明三年三月、役宅賜邸を受けて日比谷を去り、寛政二年再び日比谷に戻って三井ビルに住まうのである。

⑥2 棚倉阿部藩

帝国ホテルの江戸後期、天明元年（一七八一）九月から幕末までの八十七年間棚倉阿部藩上屋敷があった。阿部氏には三天名家があるがいずれも一門で宗



明和六年の日比谷



天明はじめの日比谷

家は江戸中期に同じ帝國ホテルにあった福山阿部藩である。

棚倉阿部藩は宗家藩祖正勝の孫忠秋が徳川家光の六人衆として老中に列したのがはじまり。栃木県の壬生二万石を受け、寛永期に埼玉県の忍八万石に栄進した。その六代目が日比谷住民の豊後守正誠で、幕末までに十二代の藩主がめまぐるしく変わっている。

この間国替えも二回経験する。忍がこの正誠と播磨守正由、鉄丸正権の三代で、文政七年(一八二四)からの福島県古川十一万石では正篤、正瞭、正嗣、正定、正善、正外とつづき、慶応二年(一八六六)棚倉十萬石では美作守正静と明治元年十二月に相続した正功の二代がある。

忍時代の藩財政は支出の増大と天災による減収がつづいて逼迫し、年貢の増徴、新田開発、御用金などでのしが、農民の反発も根強かった。正由のとき藩校創設の必要性を説き、需官の佐阪通基を迎えたが開校しな

いまま病死している。  
次の白河は前藩主の松平定信が老中辞任後藩政改革に取り組み殖産興業政策をすすめていたもので、その路線を継承する、ここでは代々養子がつづいたが、文久二年(一八六二)から慶応元年(一八六五)までの藩主正

外は風雲急を告げた末期の幕閣として活躍する。

元治元年(一八六四)奏者番兼寺社奉行にすむと、同じ年老中とスピード出世をはたす。井伊直弼が桜田門外に倒れた後の幕府は公式合体へと歩むが、一方では尊皇派志士の画策や薩長連合など反幕体制が一挙に盛り上がりを見せつづいた。

外交のもたつきも荒荒をさらけに深める。英・米・仏・蘭の四カ国は条約勅許、兵庫開港、税率軽減をせまり、幕府の意見もわかれた。兵庫開港を主張した正外は朝廷の猛反対にあつて勅命をもって老中を降ろされ、慶応元年十月、他の二項が勅許される。

翌年正静が相続すると棚倉に移され、正静は慶応四年戊辰戦争で奥羽列藩同盟に加わつて征討軍の砲火を浴びるのである。

### 63 幕府医官の今大路

三信、三井ビル前の日比谷通りには延享三年(一七四六)九月からの七十八年間、幕府医官の今大路道三郎があつた。

今大路といえはわが国医学中興の開山といわれる道三正盛、正紹父子の子孫である。戦前まで、おこげを使った道三湯を健康法としてたしなむ家庭も多か

つたが、これは道三家が開発した家庭療法の一つでもあつた。

④で三妻村(現丸の内二丁目)に道三堀があつたことを書いたが、そこに道三堀がかつた。家康に仕えた正紹は時間にルーズな人だらう。度重なる遅刻に腹をすえかねた家康が詰問すると、道路が不便で間に合いませんでしたという。それならは橋をかけてやるから今後遅刻はならんぞという。道三堀も道三橋も当時ここに住んだ今大路家に由来するのである。

今大路の祖となつた正盛が医学の奥義を極めたのは戦国末期だが、正親天皇や毛利元就、織田信長、豊臣秀吉、家康と時の英雄、天下人を診断して、親交を深めている。

次の正紹のとき秀吉から五百石を受けて侍医となり、やがて家康に迎えられ、子孫は世襲して典薬頭をつとめる。

日比谷にあつた今大路家は、はじめが今大路七代目の道三(民部大輔)元勲で、宝曆九年(一七五九)から道三(民部大輔)寿国、この人は二十八才で亡くなり、明和四年(一七六七)道三(民部大輔)正福、寛政五年(一七九三)雄五郎親興とつづく。親興も十七才で襲封、医者不養生かどうか、七ヵ月後に逝去している。

最後は寛政六年の中務大輔(典薬頭)正庸が継いで文政七年(一八二四)一ろ屋敷替えて日比谷を去る。

幕府の医官には典薬頭、奥医師、番医師、寄合医師、小普請医師、養生所医師などがあるが、今大路家の典薬頭はその最高責任者。今大路のほかには平井があり、若年寄支配で大名に準ずる従五位下を受けている。武鑑では、千二百石、登城の乗向、白むく着物が許されたとある。

### 64 三井ビル牧野

三信・三井ビルの一画は元禄時代から寛政元年までの約百年間、青山大膳上屋敷であつたことを34で紹介したが、寛政元年(一七八九)ころに、小幡奥平藩邸に変わり、翌一年七月からは笠間牧野藩邸となつている。

小幡奥平藩の藩主は松平玄蕃頭忠福で、奥平信昌の興した奥平宗家四代忠弘の分家になる。藩祖忠尚が元禄元年福島県の白河新田二万石の分知を受けて立藩、以後二度の転封をへて群馬県の小幡二万石に移つた。忠福は田沼政権最後の天明五年から三年間若年寄を勤める。この間、田沼意次が失脚、松平定信が老中筆頭に登用される寛政の改革で失脚する。



文化年間の日比谷

次の笠間牧野藩は⑥で紹介した牧野貞長からの七代である。松平忠福と同時期老中に栄進した貞長も寛政の改革で失脚し、ニッポン放送、第一生命ビルの役員から三井ビルの一画に屋敷替えされた。

このときの賜邸記録が残っている。南北七十間、東西六十、八十間の五千七十六坪、建坪千五百四十三坪とあり、明細目録には門扉七枚、戸九百本、襖二百三十四本、畳千九百三枚、障子五百九十七本となっている。当時の大名屋敷を知るうえで興味深い。

牧野家は茨城県の笠間八万石を領有した中堅譜代大名だが、三井ビルでは貞長の後、越中守貞幹、貞一、貞勝、貞久、貞明とつづく。最後の藩主として明治元年に襲封した貞和は藩邸引払い後のことで、家長としての日比谷在任はなかった。

貞明は元治元年（一八六四）から慶応四年（一八六八）までの幕府最後の大阪城代である。幕末政局混乱期の大阪は京都二条城とともに幕府関西本部ともいえる重要拠点であった。慶応元年には毛利再征のため、十四代将軍家茂自らがこの大阪城に入り、幕軍敗報のなかに急逝すれば、三年には大政奉還後なお政權奪還をめざす十五代将軍慶

喜が大阪城を前戦本部に。慶喜も鳥羽伏見の戦いが敗戦と決まるとあわただしく大阪城を退去している。貞明の早期賜居には宗家岡藩が最後まで新政府軍に抵抗したこと、自ら大阪城代であったことなどがあつた。

### ⑥5 岡崎の本多平八郎

ツインタワービルと晴海通りをはさんだ日比谷パークビルの一画には元文（一七三六）はじめから幕末の元治元年（一八六四）までの約百三十年間、岡崎本多藩上屋敷があつた。

大名となつた本多氏には平八郎家、膳所系、飯山系、高取の四つの流れがあるが、この本多氏はもともと有名な平八郎家である。代々松平家に仕え平八郎を称したことから平八郎家といふ。中でも本多を有名にしたのは徳川四天王の一人忠勝。歴戦で数々の武功を立て、関東入府では千葉県の大多喜十石、関ヶ原の合戦後三重県の桑名十石に転じた。日比谷で賜邸を受けた中務大輔忠良はその七代の末孫になる。

日比谷本多氏は、はじめ茨城県の古河五万石にあり、ついで島根県の浜田、静岡県の岡崎五万石に替つて幕末におよぶが、それまで十一カ所の領国を回つ

て財政支出が多く、移封のたびに幕府から借金をくりかえした。また、忠良の養父忠孝が十二才で没したとき、末期養子で辛くも断絶を免れたものの十五万石から五万石へ減封となり、家臣の削減にもとり組んだ。

最後の封地となつた岡崎も歴代領主の苛酷な年貢取立てに欠落人が多く農村荒廃がすすむ一方、安政八年、天明六年の大飢饉が藩財政を逼迫する。寛政期、財政改革に取り組むがほとんど効果をみないまま終息し、このころ藩主忠頼は女色に狂つて財貨を浪費、藩士は食事もままならない生活を送っていた。これはたまりかねた用人が死を決していさめ、忠頼が隠居してことなきを得る。

この間日比谷本多氏は八代つづきが、その多くは短命で養子をくりかえした。忠良が宝暦元年（一七五一）病死すると二男の忠敵が継ぎ、七年後になくなると後の四代が養子。忠敵、忠忠、忠典、忠頼とつづいている。次の忠孝は実子だが、天保七年に再び養子忠民を迎えるのである。

最後の藩主忠民は万延元年（一八六〇）からと元治元年（一八六四）からの二回にわたつて老中となり、公武合体などの多難な政局に奔走、戊辰戦争

では新政府軍に藩論を統一している。

### ⑥6 高槻永井藩

電氣ビルの江戸中期は本多正水、内藤政親、松平信治、森河俊胤、石川総茂江戸藩邸とめまぐるしく変わったことを紹介したが、享保二年（一七二七）から慶応四年（一八六八）までの百五十二年間と二たんに上収した後明治元年から四年まで高槻永井藩が賜邸されている。

江戸時代の大名家には永井姓が三家あるがいずれも一族。宗家は奈良県の橿原一万石で、ほかに加納永井藩がある。恒式平氏の流れて宗家直勝が家康に仕え、群馬県の小幡で立藩、後京都府の宮津七万三千石を受けるが、尚長のとき増上寺法会で内藤忠勝に殺害されて一時断絶した。

高槻永井家は直勝の二男直清が寛永十年京都府内で二万石を受けたのがはじまり。慶安二年（一六四九）高槻三万六千石に転封以後、一度の国替えもないまま幕末を迎える。江戸中期、譜代大名の多くは国替えや屋敷替えに悩まされているので思われた境遇にあつたともいえる。日比谷には飛騨守直明から八代が住む。直明は同族永井能登

守の五男から養子となった。寛延元年(一七四八)から近江守直行、明和七年(一七七〇)日向守直進、文化六年(一八一二)飛騨守(以後も)直与、天保十三年(一八四二)直輝、文久元年(一八六一)直矢、慶応元年(一八六五)直諒とつづいて幕末におよぶ。

幕末期風雲急を告げる安政元年(一八五四)には、直輝が京都警備を命ぜられ上京、この年九月、ロシア艦船のダイアナ号が京都周辺の海上にあつたので、木津川口から和泉大浦までの京都七口警備も受ける。元治元年(一八六四)三条実美らの七卿が長州へ都落ちしたとき高槻駅付近に宿泊するなど緊張が一段と高まった。

幕末期の日比谷諸大名は新政府軍に従って奥州を転じたり、同盟軍に加わって市街を焦土と化すなどいずれも維新の混乱に巻きこまれるがこの永井家は恭順を表わしただけでまったく関係なく終わっている。  
慶応四年四月、上収命令を受けて一たん空屋敷となり、明治元年に再び人居して四年まで在住するのである。

### 67 長岡の牧野忠精

ニッポン放送、農林中金、第

一生命ビルの一面は天明三年(一七八三)ころから四十年間、群馬県の高崎八万二千石松平大河内左京輝和、輝延父子が入り、この松平家は文政六年(一八二三)十一月に、隣りの有楽町ビル、新有楽町ビルに屋敷替えされる。

高崎松平藩は愛知県吉田大河内藩の分家。藩祖輝貞が五代将軍綱吉の寵遇を得て出世し、元禄八年には高崎五万石に榮進した。綱吉の遺言「右京も死んだら余のもとに参れ」は余りにも有名だ。この輝貞の三代後が日比谷住民の輝和。父子は有楽町ビルの項で改めて紹介する。

松平家の後、この一面に賜邸されたのが長岡牧野藩七万四千石の牧野備前守忠精である。牧野家は文政十一年二月までの四年間ここに在住する。

長岡牧野藩といえは戊辰の戦いの時、十二代藩主忠訓と家老の河井継之助が十倍に余る新政府軍をほんろう、最後は長岡城下を火の海としたことで知られるが、この忠精は忠訓の祖父になる。

牧野氏は武内宿禰の遠孫である。貞成のとき家康に属し、関ヶ原の合戦で、秀忠に従って上田城を攻めたが、このとき軍令を犯したとされ処刑された。しかし、その子忠成のとき、長岡

七万四千石を受け、その十代藩主が忠精である。

忠精は明和三年(一七六六)に父の遺領をつくと、藩校崇徳館を創設して文教の基礎を固め、新田開発に取り組む。中央幕閣としての活躍もみのがせない。天明七年、田沼意次が失脚して松平定信が筆頭老中となつたとき、寺社奉行となり、ついで大阪城代、京都所司代をへて享和元年(一八〇一)には老中に就任している。

当時、寛政の改革を推進した松平定信が光格天皇の父典仁尊号事件を契機に失脚し、十一代将軍家齊のもとで文化が華びらく大御所時代を現出していた。忠精は文化十三年(一八一六)いったん老中職を辞し、文政十一年(一八二八)二月、再び加判の列を拜命する。

### 68 酒井忠順と青山忠良

ニッポン放送、農林中金、第一生命ビルの一面は江戸後期に入つて松平輝延、牧野忠精邸となつたが、つづく文政十一年(一八二八)二月から天保八年(一八三七)五月までの九年間は福井県の小浜十万三千石の酒井忠順、忠義、さらに弘化元年(一八四四)十月までの七年間は青山駿河守(下野守)忠良が

賜邸されている。

酒井氏は雅楽助正親の三男忠利の出で、忠勝のとき三代将軍家光を補佐して大老となった。その十代後が日比谷住民の修理大夫忠順で、若狭守忠義はその子。小浜藩の酒井家は十三代二百三十八年つづいて幕末を迎えるが、このころ不作や飢饉がつづいて藩財政は窮乏する。借財は三十万両に及び、天保四年(一八三三)には名田庄で天保の打壊しが起つている。

このころの小浜藩士からは梅田雲浜がでた。尊皇攘夷を唱え、在京志士を指導したが安政の大獄にあつた。捕らえたのは井伊直弼の腹心として京都所司代をつとめた忠義であった。忠義はやがて和宮降嫁に奔走するが、文久二年所司代を免ぜられる。

次の青山駿河守(下野守)忠

良は徳川創設期の功臣忠成の十代子孫である。寛延以来京都府の篠山五万石を領有するが、篠山では、入封直後から出稼銀の課税や凶作時の重税で全藩一揆が相つた。これは藩が大巾に譲歩してその後一揆はとたえだが、忠良の万延元年(一八六〇)再び大規模な減免強訴が起つて藩体制をおびやかす。

しかし、青山家の中央での活躍はみのがせない。父忠裕は三

十二年間老中として幕閣に列なり、忠貞も天保十一年（一八四〇）から大阪城代、弘化元年（一八四四）から嘉永元年（一八四八）まで老中と末期の波乱に満ちた幕政を担当する。

十二代將軍家慶の在位は十六年だが、その大半を幕閣中心に座したのが水野忠邦である。忠邦は一たん天保の改革失敗で失脚するが忠貞の老中就任と同じころ、老中首座に復帰していた。

幕府は重大化してきた外交問題にとりくむが、名案のないまま忠邦が再び罷免される。幕政はやがて阿部正弘、松平忠徳、川路聖謨らが担当、忠貞らはこのつなぎ役となったのである。

### 69 筆頭老中土井利位

67とニッポン放送、農林中金、第一生命ビルの一画に江戸後期に住した幕閣を紹介したがこれにつづく、弘化元年（一八四四）十月から幕末慶応四年（一八六八）四月までの二十四年間在任した、古賀土井藩八万石の土井大新頭利位は、水野忠邦のブレインとして天保の改革をすすめる、一時忠邦の上知令に反対して筆頭老中を掌中にする。

土井氏は家康の母於大のいとこで、やはり徳川幕府創設期の重臣土井利勝の子孫。最初の日

比谷住民となった利位は利勝から教えて十一代目になる。利位は天保五年（一八三四）大阪城代に就任したが、このとき大塩平八郎の乱が起り、鎮圧にあたった利位の沈着な行動が幕府の評価を受ける。利位はつづいて中央幕閣への道を歩む。京都所司代をへて、天保五年（一八三四）には老中へとすすむのである。

当時の幕府は十一代將軍家齊、十二代將軍家慶のもと水野忠邦の天保の改革がはじまろうとしていた。天保の改革は大御所時代の奢侈と縁故、賄賂など退廃した社会風潮を一掃し、幕府財政を立直すことにあった。

大御所時代専横を極めた若年寄林忠英、御側衆水野忠篤を処分し、大奥の肅正を断行する。厳重な奢侈取締りや統制をくりかえすが安逸になれた役人や一般市民に歓迎されるはずはなかった。やがて上知令を契機に反対運動が起って忠邦が失脚する。

利位は、この天保の改革の実務推進者であった。忠邦の側近ナンパーワンとして儉約令に取り組み、上知令では鳥居元蔵らと忠邦を見限った。利位は変わって老中首座にすすむ。水野政權とは異なった方法で幕府体制の再建をめざすが、このころクローズアップされた対外問題を

かかえて利位も失脚。約八カ月忠邦のカンバックを許すのである。

古賀水野藩は老中首座をすべって西の丸下から日比谷に移るが、日比谷ではわが国はじめての顕微鏡による雪の結晶観察記録、雪華図説を著すなど文学大名として余世を送っている。水野家は利位の後利享、利則、利興とつづいて庶藩を迎える。

### 70 田中本多藩

江戸中後期の有楽町ビル、新有楽町ビルの一画には笠間井上藩、田中本多藩があった。井上藩は御の帝国ホテルで紹介した正経の祖父と父二代。本多氏は徳川創設期の重臣正就の子孫で、享保八年（一七二三）四月から三十七年間河内守正と正継が住んだ。正継は大阪城代などを歴任、岩手県、静岡県の浜松六万石に転封した。

次の宝暦十年（一七六〇）十二月から文政十年（一八二七）ころまでの六十七年間は静岡県の田中四万石本多正珍、正供、正温、正意の四代。本多家は正信の弟正重が藩祖で、この四代正永が老中に進んで電気ビルにあったことを9で紹介したが、さらに三代後が紀伊守（伯耆守）

正珍となる。正珍も幕閣として活躍する。二十七才で奏者番となり、寺社奉行をへた延享三年（一七四六）老中にすすんだ。この年、京都に向いて天皇から天杯を宝暦七年には吉宗七回忌奉行も。当時の幕政は九代將軍家重のもと享保の改革と田沼時代のほざまともいえた。松平典邑、失脚後は特定の指導者に権力が集中することがなく、松平武元、堀田正亮、酒井忠尚らの合議制が布かれていた。当然正珍もこの一員として手腕を発揮するが、竹内式部事件のおこった八年九月、家重の不興を受けて失脚の運命に。

宝暦期は諸大名や役人に対する厳しい処罰が下された時期で、藩政不良や家中騒動などによる改易や減封がめだつてい

る。正珍も老中在職中の勤務がりが不良であったとされ逼塞も。日比谷賜邸は逼塞のとけた十年十二月で、安永二年（一七七三）家督を紀伊守正供にゆずった。

正供は四年後になくなり、伯耆守正温、正意とつづいた文政十年（一八二七）屋敷替えて日比谷を去っている。田中本多家は天保元年（一八三〇）に起ったおかげ参りを契機に藩制改革に取組み、正寛、正訥とつづく

明治元年（一八六八）千葉県の白浜に移されて庶藩を迎えるのである。

(つづく)

三友新聞昭和六十一年三月十日分までを掲載しました。物語はこの後、幕末、明治、大正、昭和とつづきます。



# 接着する

とはどういうことか。



## ひろがる接着の世界

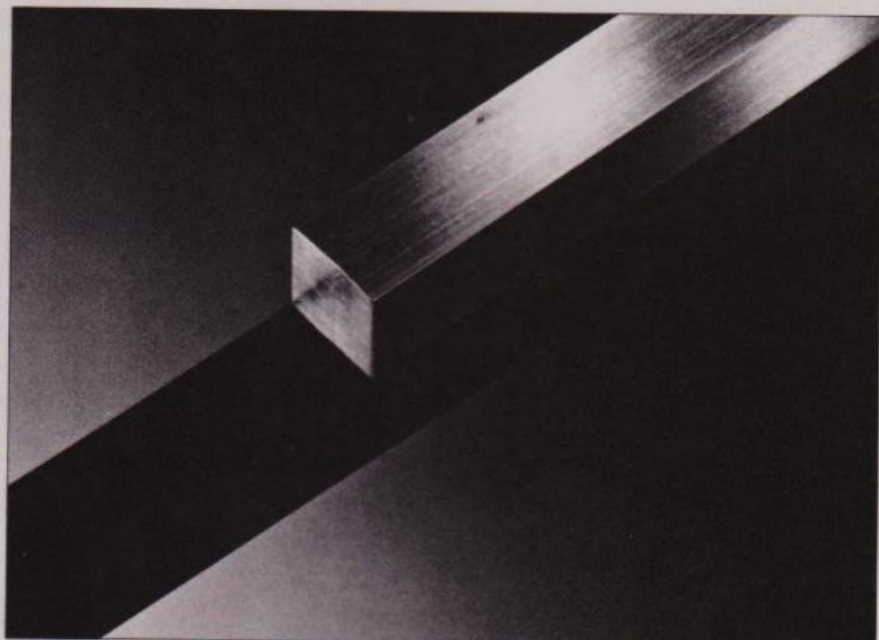
物と物を接合するのに接着剤を使用するという歴史は古く、紀元前3,000年の頃、古代メソポタミアの時代にすでに天然アスファルトが装飾モザイクの接着に使われていたという記録があります。また、旧約聖書の創世紀には、「シアの方舟」はアスファルトで防水加工されていたと記されています。日本でもアスファルトで接着した矢尻が縄文時代の遺跡から出土したそうです。

その後長い間、米糊・にかわ・うるし・でんぷん・カゼインなどの天然の高分子物質が接着剤として応用されてきました。そして第2次大戦後の高分子化学の発展が接着の世界を飛躍的にひろげたのです。接着剤は合成高分子に置き換わり、高性能化・多様化しました。そして、住宅・家具・衣料・靴・本・包装材料など身近なものから、航空機・人工衛星・スペースシャトルといった先端の分野まで、接着剤が使われていないものはないといって良いほどです。

## 複雑な接着のメカニズム

「接着する」ということは、被着体の表面同士を接着剤を介して接合することですが、実はこの接合のメカニズムは十分に解明されていないのです。しかし、被着体の物質の分子と、接着剤の分子との結合が基本になっていることは間違いありません。

「接着する前には被着体の表面の汚れを落せ」といいますが、これは被着体が汚れていると、接着剤を塗布しても被着体の分子と接着剤の分子が結びつくことができないからです。



この分子の結合の方式には、化学結合・イオン結合・水素結合・分極による結合・接着界面での分子の絡み合いによる結合など、さまざまな結合が考えられますが、実際の接着ではこれらのメカニズムがお互いに重なり合って機能しているものと推測されます。

このように、接着とは未解明の部分が残っている反応であり、それだけに新しい技術開発の可能性を秘めているといえます。

## 超高性能構造用接着剤(ハードロック)

無機から有機にわたる幅広い化学の領域で、多彩な技術展開を進めているデンカは、接着のフィールドでも数々の成果をあげています。合板や木工・建築用接着剤の主原料である酢酸ビニルモノマー・ポリビニルアルコール・クロロブレンゴム・EVAエマルジョンなどを大量に接着剤業界へ供給しつづけて来ましたが、同時に接着剤そのものの開発も進めています。

なかでも、〈ハードロック〉は抜群の耐衝撃強度、固着時間は常温でも数分間、2液非混合タイプのため作業性が良いなど——従来の接着剤を超える特性から、新しい時代の

接着剤として注目を集めています。金属・セラミックスなど接着対象も広く、最近では筐体用のC-355、車輻・建材用にM-600、プリント基板仮接着用TM-4000・8000、紫外線硬化型の光学用としてOPシリーズなどを新たに開発し、接着剤の世界をさらにひろげようとしています。

化学工業は進歩をめざす

# デンカ

電気化学工業株式会社

東京都千代田区有楽町1-4-1 郵便番号100  
本社 広報課 電話 03-507-5071

フラスチックス  
合成ゴム  
化学肥料  
カーバイド  
食塩類  
セラミックス  
セメント  
ファイン化学製品



デンカの70年を見つづけた街  
日比谷

昭和61年1月 発行

電気化学工業株式会社  
総務部 広報課

主事  
山岸 弘明

東京都千代田区有楽町1-4-1 〒100  
日比谷三信ビル5階  
電話 03-507-5072  
FAX 03-508-9377



印刷：(株)富洋印刷 東京都文京区後楽2-6-9 〒112 電話 03-813-7975

非売品（謹呈用個人出版500部）

禁：不許転載

個人出版・山岸弘明

DVDBY 塚原茂